

秋田城跡歴史資料館年報2016

秋 田 城 跡



秋田市教育委員会

秋田城跡歴史資料館年報2016

秋 田 城 跡

秋田市教育委員会

序 文

平成28年度の秋田城跡発掘調査は、大畠地区東部1箇所において実施し、奈良時代から平安時代にかけての遺構・遺物が発見されるなど、多くの成果をあげることができました。

第107次調査では、城内東大路の道路遺構が発見され、奈良時代に2時期、平安時代に4時期の合計6時期の変遷があることが判明しました。城内東大路の道路幅は奈良時代約12m、平安時代約9mであることもわかりました。このような所見は、周辺の調査成果とほぼ一致するものであり、政庁東側の基本構造にかかわる重要な知見を得ることができました。

これらは史跡の保護・整備・活用を行う上で必要不可欠な情報であり、今後、今回の成果をもとに城内東大路の復元整備を行っていく予定です。

また、環境整備事業につきましては、政庁域で唯一未整備であった南東コーナー部分の整備を行い、政庁域の広がりを表示することができました。

このように秋田城跡の発掘調査と保護管理、環境整備事業が順調に進んでいることは、文化庁および秋田県教育委員会をはじめとする関係機関や環境整備指導委員会委員、そして地元住民の皆様の多大なるご指導・ご協力の賜物と、心より深く感謝申し上げます。

平成29年3月

秋田市教育委員会

秋田城跡歴史資料館年報2016

目 次

例言・凡例

I	調査の計画と実施状況	1
II	第107次調査報告	
1)	調査経過	2
2)	検出遺構と出土遺物	12
①	第Ⅲ層面検出遺構と出土遺物	12
②	第Ⅳ層面検出遺構と出土遺物	22
③	第Ⅴ層面検出遺構と出土遺物	27
④	第Ⅵ層面検出遺構と出土遺物	33
⑤	第Ⅶ層面検出遺構と出土遺物	38
⑥	第Ⅷ層面検出遺構と出土遺物	42
⑦	第Ⅸ層面検出遺構と出土遺物	45
3)	基本層序および各層出土遺物	46
III	考察	60
IV	秋田城跡環境整備事業	72
V	秋田城跡保存活用整備事業	73
VI	秋田城跡現状変更	75
	写真図版	77
	報告書抄録	97
	秋田城跡歴史資料館要項	98

例　　言

- 1 本書は、平成28年度に実施した秋田城跡第107次発掘調査、秋田城跡環境整備事業、秋田城跡保存活用整備事業、秋田城跡現状変更の記録を収録したものである。
- 2 本書の編集は伊藤武士、神田和彦、阿部美穂が行った。I～III章を神田和彦、IV章を伊藤武士、V・VI章を阿部美穂が執筆した。
- 3 遺物の実測・トレース、遺構図の作成およびトレースは、神田のほか、整理員の森泉裕美子、伊藤雅子、宮田美奈子が行った。
- 4 遺構・遺物の写真撮影は、神田が行った。
- 5 墨書き土器については、三上喜孝氏（国立歴史民俗博物館）の指導を得た。
- 6 本調査で得られた資料は、秋田市教育委員会で保管している。
- 7 発掘調査では、以下の方々や関係機関から指導・助言を賜った。記して感謝したい。
新野直吉、岡田茂弘、渡邊定夫、田中哲雄、木村勉、熊田亮介、須田良平、大西啓介、近江俊秀、五島昌也、山下信一郎、小松正夫、大橋泰夫、林部均、三上喜孝、小口雅史、藤澤良祐、中野晴久、八重樫忠郎、高橋学、五十嵐一治、高橋和成、伊豆俊祐、根岸洋、文化庁記念物課、
国立歴史民俗博物館、奈良文化財研究所、宮城県教育委員会、東北歴史博物館、
多賀城跡調査研究所、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター（敬称略・順不同）

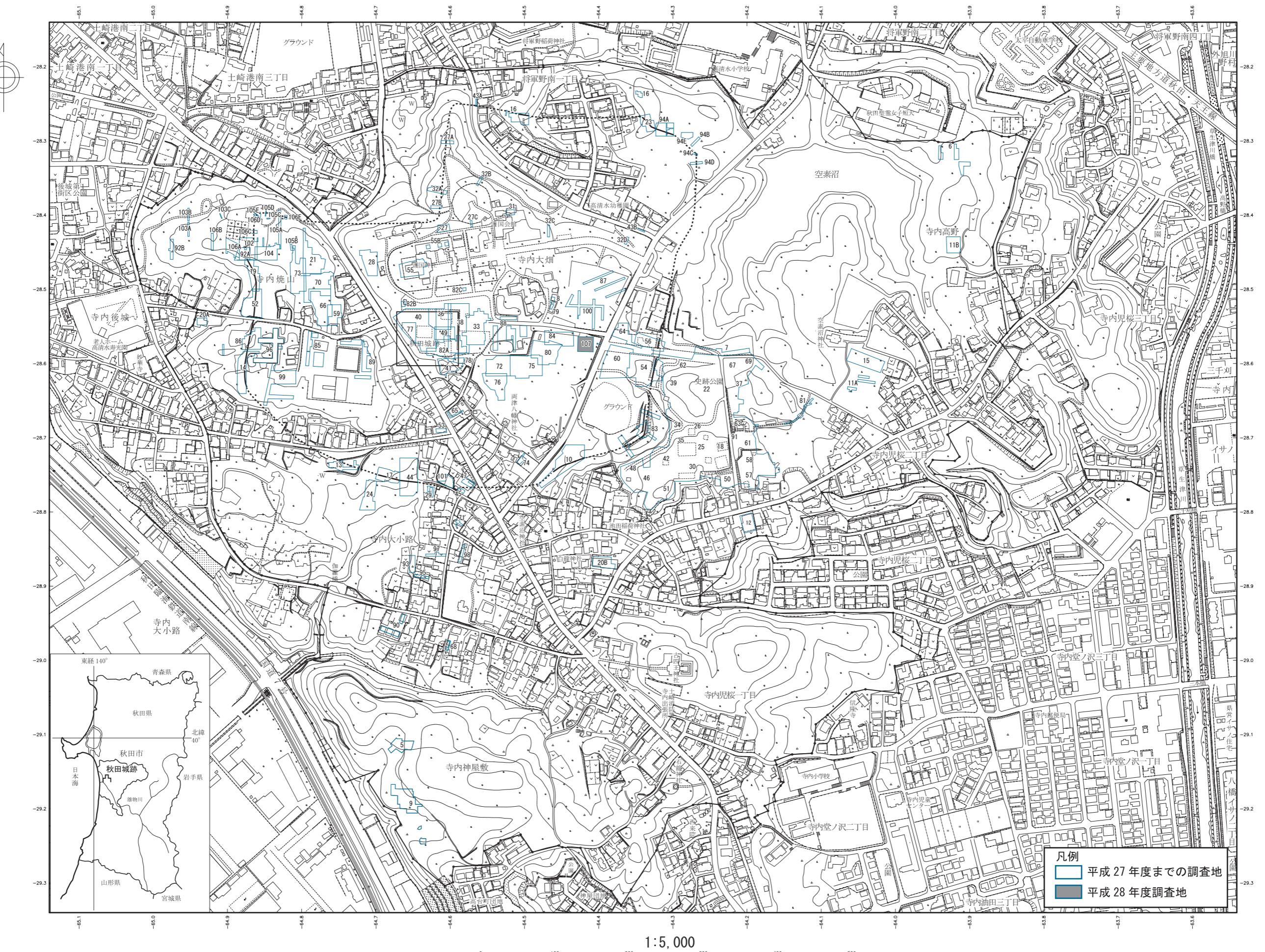
凡　　例

遺　物

- 1 土器の断面を黒く塗りつぶしたのが須恵器である。
- 2 土器の性格、表面付着物の相違については、下記のスクリーントーンで表現した。
黑色処理  転用硯  煤  漆 
- 3 土器の調整技術や切り離し等の表記は、下記のとおりである。
 - ・回転利用ケズリは、ケズリ調整と記載。ケズリ調整以外の調整はその都度別記。
 - ・ロクロ等広い意味の回転を利用したカキ目調整は、ロクロ利用のカキ目調整と記載。
 - ・切り離し、粘土紐、タタキ痕跡等、成形時痕跡の消滅を目的としない軽度な器面調整痕跡は、軽いナデ調整と記載。成形時痕跡の摩滅を目的とし、痕跡が一部残るものをナデ調整、ほとんど痕跡を残さないものを丁寧なナデ調整と記載。
 - ・底部回転ヘラ切りによる切り離しは、ヘラ切りと記載。底部回転糸切りによる切り離しは、糸切りと記載。底部回転以外の切り離しはその都度別記。
 - ・遺物実測図の縮尺は、瓦は1/4、石器・銭貨1/2、その他の遺物は1/3とし、それぞれ各図面に縮尺を示した。写真の縮尺は瓦約1/4、石器約1/2、その他の遺物は約2/5とした。

方位・測量原点

文章中および図面の方位と方向を示す東西南北は、遺跡全域に設定された発掘基準線に基づく真東、真西、真南、真北を示す。遺跡の測量原点は、外郭範囲内のほぼ中央にあたる政庁正殿東の任意点に埋標されている。その原点から真北を求めた南北基準線を定め、これに直交する東西基準線を定めて、座標軸を設定している。報告においてE・W・S・Nと共に示された数値は、測量原点からの座標上の位置、東西南北の距離を示す。測量原点は世界測地系座標で、X = -28,562.592、Y = -64,607.889である。



第1図 秋田城跡発掘調査位置図

I 調査の計画と実施状況

平成28年度の秋田城跡発掘調査は、第107次調査を実施した（第1図）。

発掘調査事業費は、総事業費（本体額）700万円のうち国庫補助額3,500,000円（50%）、県費補助額700,000円（10%）、市費2,800,000円（40%）である。調査計画は、下記表1のように立案した。

表1 発掘調査計画

調査次数	調査地区	発掘調査面積m ² (坪)	調査予定期間
第107次	大畠地区東部	500m ² (151.52)	5月9日～10月14日
計		500m ² (151.52)	

発掘調査に伴う現状変更許可申請について、平成28年2月3日付け教文第390号で申請し、平成28年3月11日付け27受庁財第4号の1954で許可された。

平成28年度の発掘調査は、大畠地区東部の1箇所を調査対象とした。

第107次調査地は大畠地区東部、政庁の東約220mの地点で、秋田城跡出土品収蔵庫があった場所である。平成28年4月に開館した「秋田城跡歴史資料館」の整備に伴い、昭和39年に設置され、出土品の展示施設として機能していた秋田城跡出土品収蔵庫が平成27年度に撤去されたため、本地点が調査可能となった。周辺からは第60次・84次・88次調査地において、政庁東門から外郭東門へ延びる城内東大路が発見されている。第107次調査地もこの城内東大路上に位置することが予想され、今後の城内東大路の遺構の遺存状況の把握と環境整備事業に向けた基礎データを得るために、調査を実施した。調査の結果、奈良時代から平安時代にかけての6時期の道路面を確認し、城内東大路の詳細な変遷と実態を把握することができた。

古代道路遺構面は、第Ⅲ層から第Ⅷ層の6面で確認された。第Ⅲ層面では、柱列跡4条、溝跡4条、竪穴建物跡2軒、土坑16基、道路遺構1面が検出された。第Ⅳ層面では、溝跡2条、土坑4基、土手状遺構1基、道路遺構1面が検出された。第Ⅴ層面では、溝跡2条、土坑9基、道路遺構1面が検出された。第Ⅵ層面では掘立柱建物跡1棟、材木埠跡1条、溝跡4条、土坑5基、道路遺構1面が検出された。第Ⅶ層面では溝跡2条、柱掘り方1基、土坑5基、道路遺構1面が検出された。第Ⅷ層面では溝跡4条、土坑4基、道路遺構1面が検出された。第Ⅸ層面の地山飛砂層では溝跡2条が検出された。

平成28年8月27日に第107次調査の現地説明会を開催し、140名の参加があった。平成28年7月28日～29日に多賀城跡調査研究所 須田良平所長、平成28年9月8日に文化庁記念物課 近江俊秀調査官の現地指導を受けた。平成28年11月8日に文化庁記念物課 五島昌也調査官の指導を受けた。

平成28年度の発掘調査実施状況は下記表2のとおりである。

表2 発掘調査実施状況

調査次数	調査地区	発掘調査面積m ² (坪)	調査予定期間
第107次	大畠地区東部	423m ² (128.18)	5月16日～9月21日
計		423m ² (128.18)	

II 第107次調査報告

1) 調査経過

第107次調査は大畠地区東部を対象に、平成28年5月16日から9月21日まで調査を実施した。調査面積は423m²である。

調査地は政庁の東約220mの地点で、政庁と外郭東門の間に位置している（第1・2図）。周辺では政庁東門から外郭東門へ延びる城内東大路が発見されており、第107次調査地もこの城内東大路上に位置することが予想された。また、この城内東大路周辺の大畠地区には生産施設が広がっていることがこれまでの調査で判明している。

政庁の東側では、第84次調査（平成16年度）と第88次調査（平成18年度）で城内東大路が確認された。第84次調査では、政庁Ⅰ期～Ⅶ期の変遷と対応する道路面が6面確認され、基本的には平安時代（政庁Ⅲ～Ⅴ期）は幅約9mの道路であり、奈良時代（政庁Ⅰ・Ⅱ期）は幅約12mの道路であることが確認されている。道路の区画については基本的には素掘りの側溝であるが、政庁Ⅱ期は南側が一本柱列塀、政庁Ⅲ期の旧段階は南側が材木列塀であることも確認されている。また、政庁Ⅲ期には一時期道路幅が約7.5mであったことも指摘されている。第88次調査では、奈良時代（政庁Ⅰ・Ⅱ期）の道路硬化面と平安時代（政庁Ⅲ期）の道路側溝も発見されている。これらの遺構の検出から、奈良時代は幅約12m、平安時代は幅約9mの道路であることが推定されている。なお、9世紀のある段階で道路幅が6mに縮小していることが指摘されている。また、9世紀代の平安時代になると道路北側には、鍛冶工房などの生産施設が発見されており、生産施設が展開することも分かっている。奈良時代には平安時代にみられるような生産施設は発見されず、大路周辺に利用規制があったことが指摘されている。外郭東門に近い第60次調査（平成5年度）では、道路硬化面は削平により検出できなかったが、道路側溝と考えられる溝跡が最下層の地山飛砂層面で検出されており、道路遺構が存在したことが推定されている。この溝跡の間は幅約11mと幅約6.7mであり、道路幅6.7mの溝跡からは赤褐色土器片が出土していることから平安時代の道路側溝であると考えられる。

その他、城内東大路周辺の調査をみると第87次調査（平成17年度）では9世紀以降の鍛冶関係遺構が発見されており、その最盛期は9世紀第2四半期から第3四半期であると指摘されている。第100次調査（平成24年度）では9世紀第2四半期から10世紀代の鍛冶関連の竪穴建物跡などの生産施設が発見されている。第80次調査（平成14年度）では大型の竪穴状鍛冶工房が発見されており、9世紀初め頃から鍛冶工房が継続して操業している。第75次調査（平成11年度）では漆紙文書が出土し、周辺からは竪穴建物跡などが発見されており、漆工房があったことが推定されている。出土した漆紙文書は第26号漆紙文書であり、文書の内容は秋田城に集められた武器を管理する帳簿で「器杖帳様文書」と呼ばれているものである。第72次調査（平成10年度）では8世紀末頃から9世紀代にかけて竪穴状鍛冶工房が継続的に操業していることがわかった。また、多数の漆紙文書が発見され、9世紀前半のものと考えられる第16号漆紙文書「死亡帳様文書」、第18号漆紙文書「俘囚計帳」などが発見されている。また、9世紀前半の鍛冶工房と考えられる竪穴建物の床面から非鉄製小札甲が出土している。これらのことから、鍛冶工房とともに漆工房が存在していたと考えられる。以上のことから、第107次調査周辺の大畠地区は、9世紀以降の平安時代に鍛冶工房や漆工房の生産施設が展開していた地区といえる。

今回調査を行った第107次調査地は、昭和30年代に設置された秋田城跡出土品収蔵庫があった場所で



第2図 第107次調査地周辺地形図

ある。平成28年4月に開館した「秋田城跡歴史資料館」の整備に伴い、昭和39年に設置されこれまで出土品の展示施設として機能していた秋田城跡出土品収蔵庫（以下、収蔵庫と呼ぶ）が平成27年度に解体されたため、本地点が調査可能となった。今後の城内東大路の環境整備事業に向けた基礎データを得るために、調査を実施した。

旧地形は、基本的に北から南に、西から東に向かって傾斜している。調査区を東西21m×南北20mの長方形に設定した。また、今後の環境整備に必要なデータを得るために、調査区の東側に拡張トレンチ1として1.5×1.5m、拡張トレンチ2として1m×0.5mのトレンチを設定した（第3・4図）。調査の方法は面的調査とトレンチ調査を併用して行った。すなわち、第Ⅲ層面と第Ⅳ層面までは調査区全体に対して面的な調査を行い、第V層面以下は、調査区中央のベルト西側と調査区東端に、東西2m程度のトレンチを設定し各層まで掘り下げた。第V層面は中央ベルト西側部分と調査区東端、第VI層面は中央ベルト西側北側部分と東端、第VII・VIII層面は、調査区東端でのみ深掘りを行った。下層遺構追求のため上層遺構が完全になくなってしまう範囲を最小限に留め、遺構の保存に留意しながら調査を行った。下層遺構を追求する必要がある部分については、半裁・記録化後、全掘し記録を取りながら掘り下げていった。なお、V層以下のトレンチ調査に切り替えてからは、調査区東端では各層厚が見学者に理解しやすいように、深掘りトレンチの西側に幅20cm残しながら下層遺構を追求していった。なお、拡張トレンチ1・2では、古代遺構の最上層面である第Ⅲ層上面まで確認して終了している。

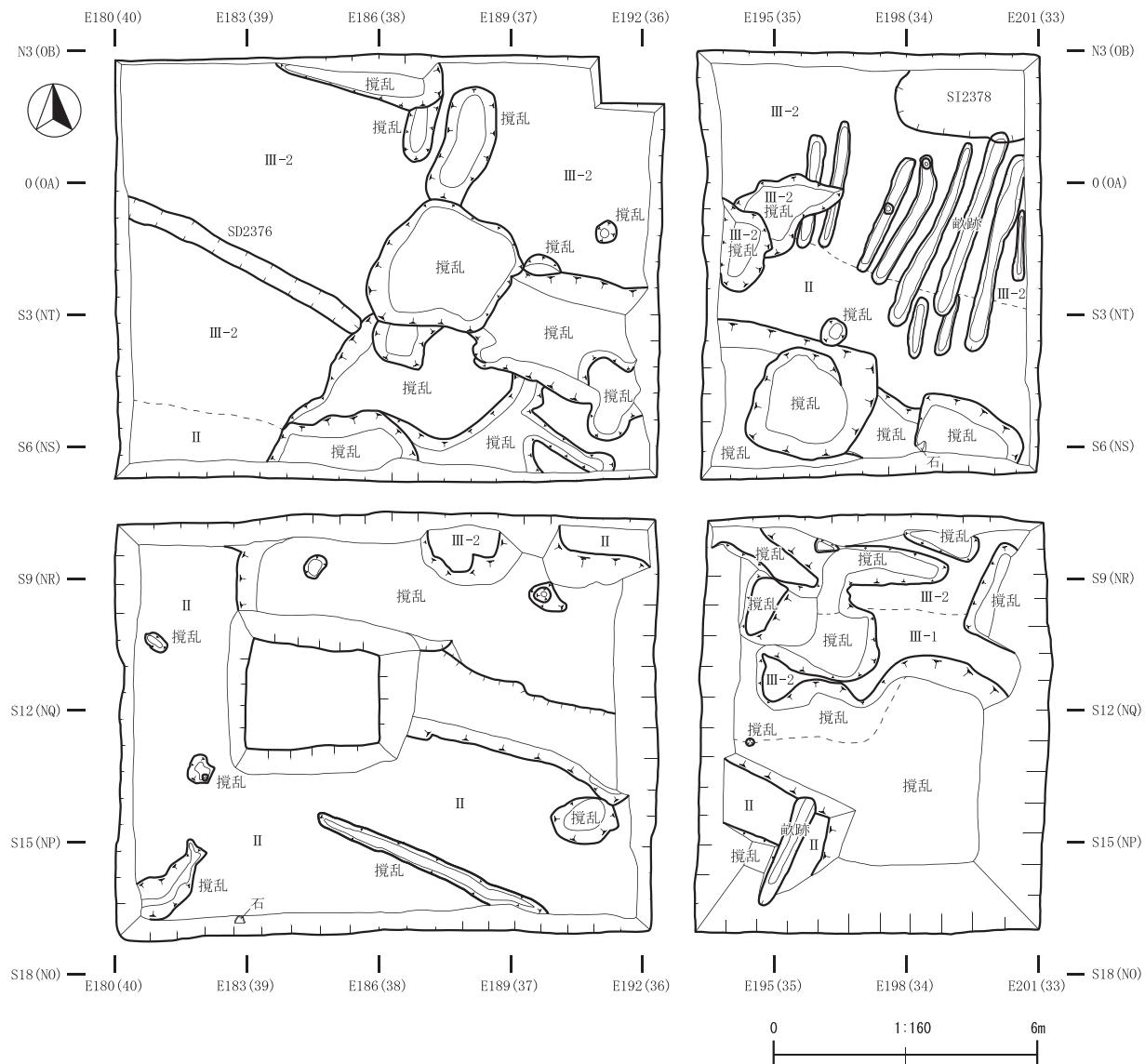
調査は基準杭測量、調査区の設定後、重機による第I層表土除去を行った（5月16日～20日）。調査区中央部では収蔵庫の基礎により搅乱されており、この搅乱部分を手掘りで除去した。第II層面で平面精査を行い、北東部、南東部で畑として利用していた頃の畝状遺構が検出され、記録化を行っている（第3図、5月23日～6月13日）。北西部では第II層の堆積が薄く、第III層面が既に検出されており、SD2376が発見されている。

第II層を除去し、第III層面の精査を行い、SA2370～SA2373、SD2374・SD2375・SD2377、SI2378・SI2379、SK2380～SK2395を発見した（6月14日～6月21日）。これらの遺構の半裁・記録化を行った（6月22日～29日）。SD2374とSD2375A～Dの側溝間は6.0～6.5mで、SX2396道路遺構であると考えられた。

第III層面は、収蔵庫の基礎による搅乱が激しかったため、第III層は調査区全面で除去し、下層遺構の検出を目指した（6月30日～7月11日）。第III層下から第IV層面が検出され、SD2397・SD2398、SK2399～SK2402、SX2403を発見した（7月12日～15日）。これらの第IV層面の半裁・記録化を行った（7月15～21日）。SD2397とSD2398の側溝間は8.5～9.0mで、SX2404道路遺構であると考えられた。

中央ベルト西側、調査区東端で幅約2mの調査トレンチを設定し、トレンチ内の第IV層を除去し、第V層面を検出した。SD2405A・B・SD2406A・B、SK2407～SK2415を発見した（7月22日～27日）。これらの第V層面検出遺構の半裁・記録化を行った（7月29日～8月3日）。SD2405A・BとSD2406A・Bの側溝間は8.5～8.8mでSX2416道路遺構であると考えられた。

調査区東端において、V層を除去しVI層面を検出した。SB2417、SA2418、SD2419A、SD2420～SD2422、SK2423・SK2424・SK2426・SK2427を発見した（8月4日）。SB2417が西側に展開しないか確認するために、VI層面を検出する北東調査トレンチを部分的に西側に広げた（8月5日）。また、中央ベルト西側北側も一部第VI層面まで掘り下げ、SB2417が柱列跡として西側へ延びていないか確認した。その結果、SB2417は東側の調査区外に展開することが判明し、新たに掘り下げた部分からSK2425と



第3図 第107次調査地第II層面検出遺構全体図

SD2419Bを発見した。これらの第VI層面検出遺構の半裁・記録化を行った（8月8日～18日）。SD2419とSD2421の側溝間は7.5mでSX2428A道路遺構、SD2419とSD2422・SA2418の側溝間は8.6～8.9mでSX2428B道路遺構であると考えられた。

調査区東端において、第VII層を除去し、第VIII層面を検出した。SD2429・SD2430、SKP2431、SK2432～SK2436を発見した（8月18日）。これらのVII層面検出遺構の半裁・記録化を行った（8月19日～8月25日）。SD2429とSD2430の側溝間は12.1mでSX2437道路遺構であると考えられた。

調査区東端において、第VII層を除去し、第VIII層面を検出した。SD2438～SD2441、SK2442～SK2445を発見した（8月29日）。これらの遺構の半裁・記録化を行った（8月31日～9月2日）。SD2438とSD2439の側溝間は12.2mでSX2446道路遺構と考えられた。

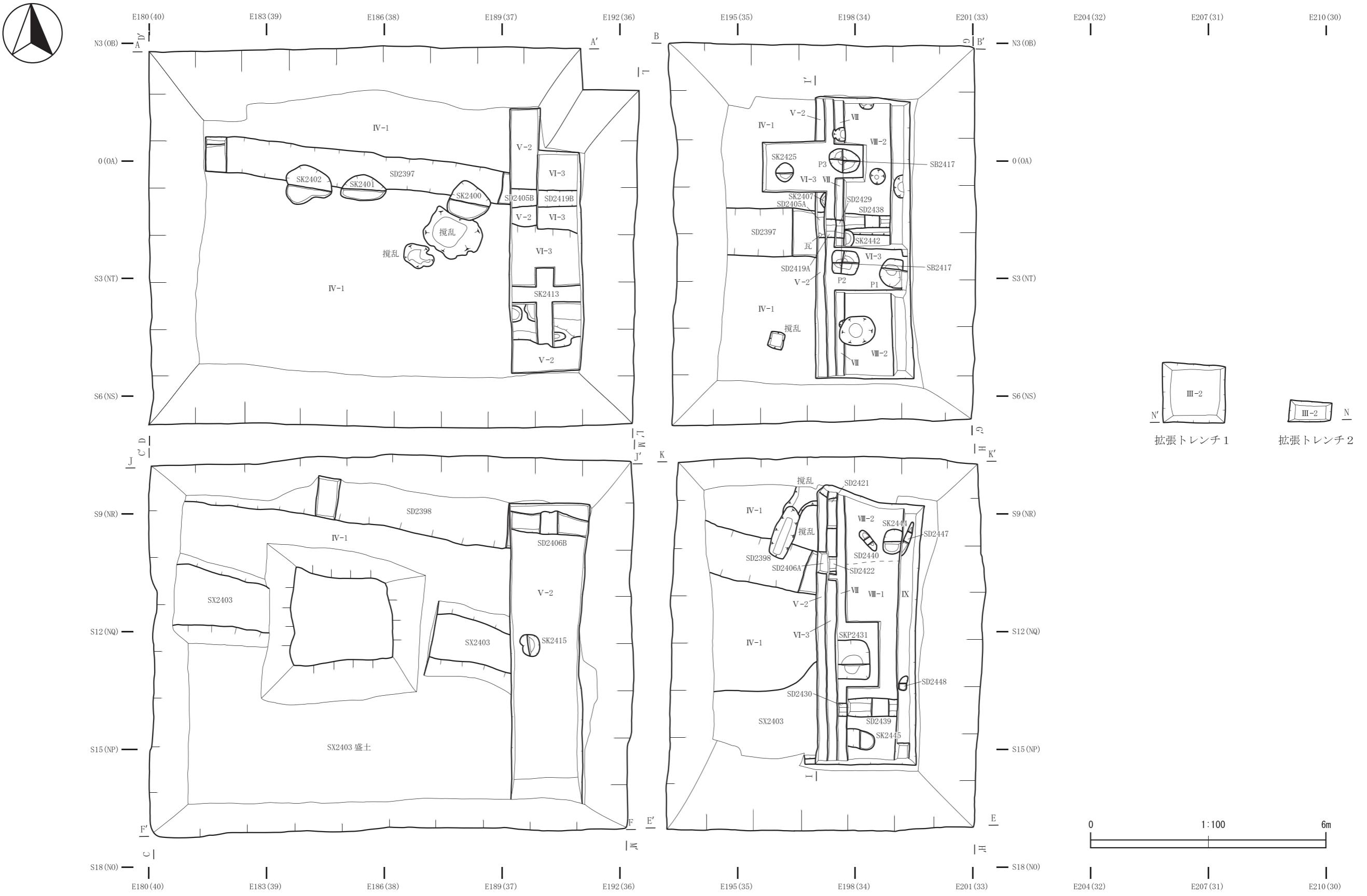
調査区東端において、幅30cmのサブトレンチを設定し、第VIII層を除去し、第IX層地山飛砂層を確認した。SD2447・SD2448を発見した（9月5日）。これらの遺構の半裁・記録化を行った（9月5日）。調査区の壁断面図を作成し（9月6・7日）、拡張トレンチ1・2を調査東側に設定し、第III層上面まで

II 第107次調査報告

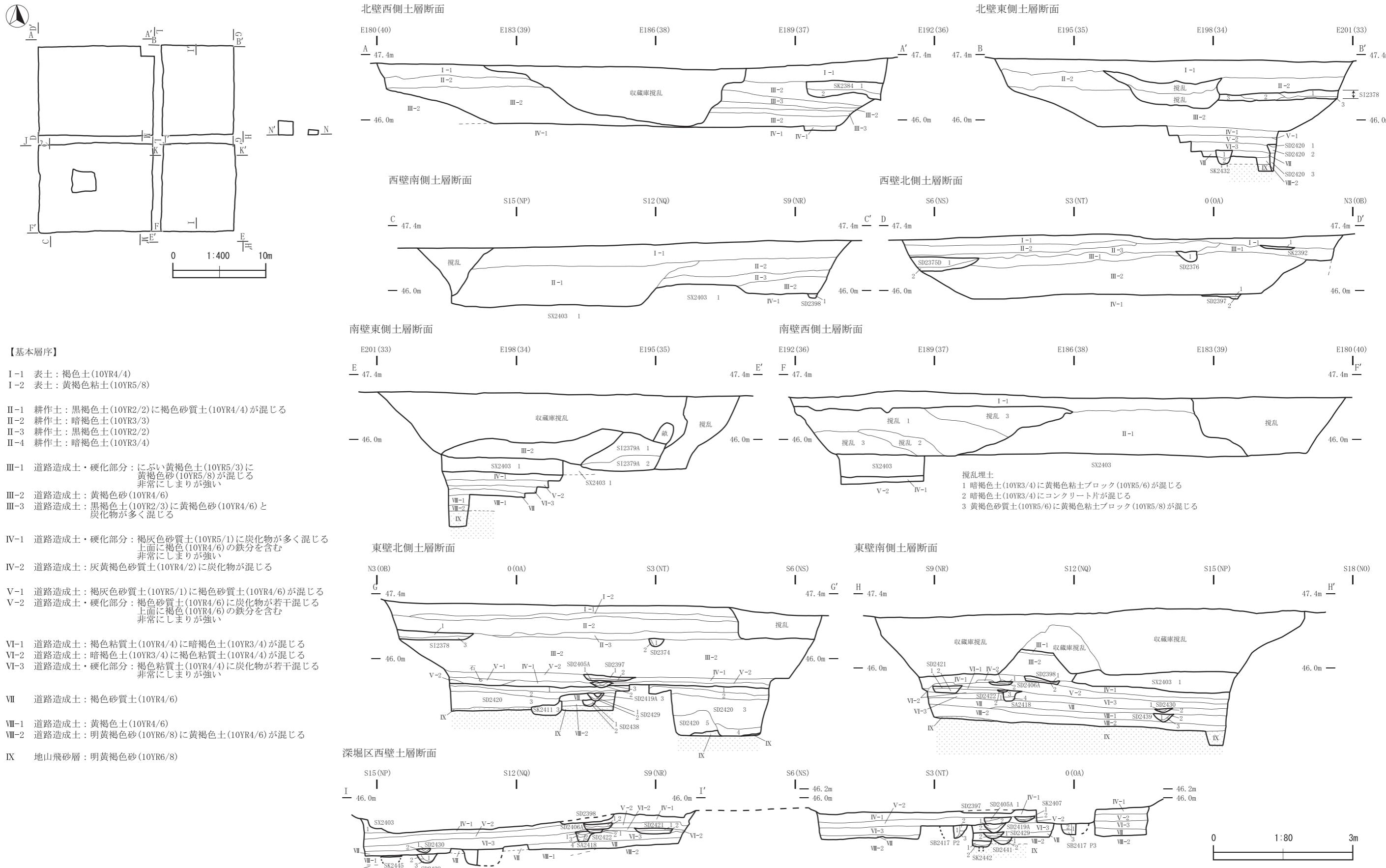
検出し、記録化を行った（9月8日・9日）。

全調査区の記録化の後、機材撤収およびバックホーと人手による埋め戻しを行い調査が終了した（9月12日～9月21日）。

なお、平成28年8月27日に第107次調査の現地説明会を開催し、140名の参加があった。平成28年7月26日に文化庁記念物課（史跡部門）山下信一郎調査官、平成28年7月29日に多賀城跡調査研究所 須田良平所長、平成28年9月7日に文化庁記念物課 大西啓介課長、平成28年9月8日に文化庁記念物課（埋蔵部門）近江俊秀調査官の現地指導を受けた。また、調査終了後の平成28年11月8日、今後の大路復元の整備の観点から、文化庁記念物課（整備部門）五島昌也調査官の指導を受けた。

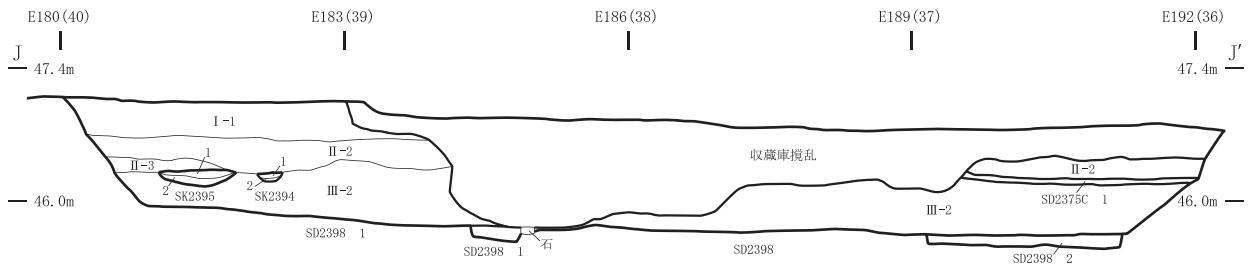


第4図 第107次調査地検出遺構全体図（最終調査面）

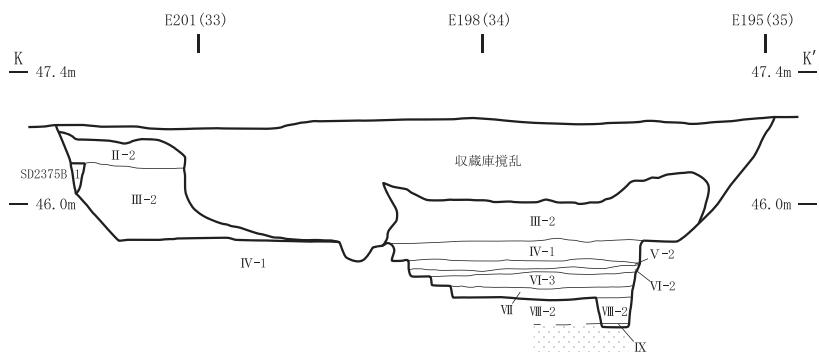


第5図 第107次調査地土層断面図(1)

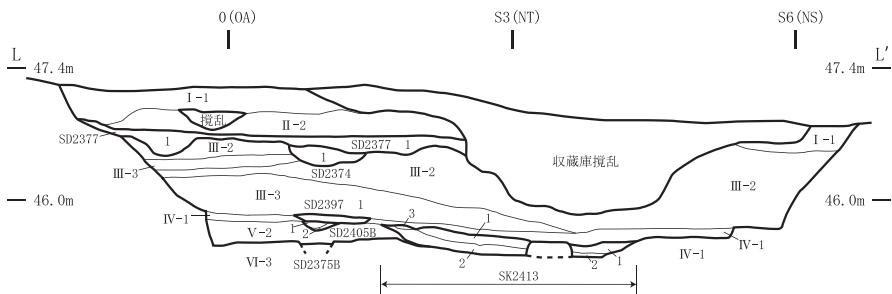
中央ベルト南壁西側土層断面



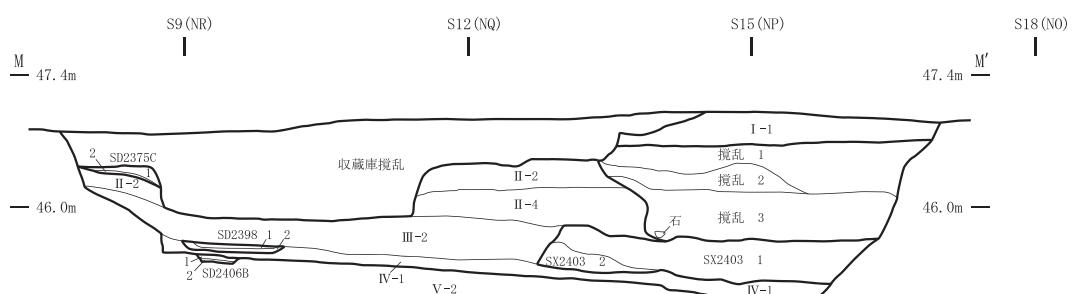
中央ベルト南壁東側土層断面



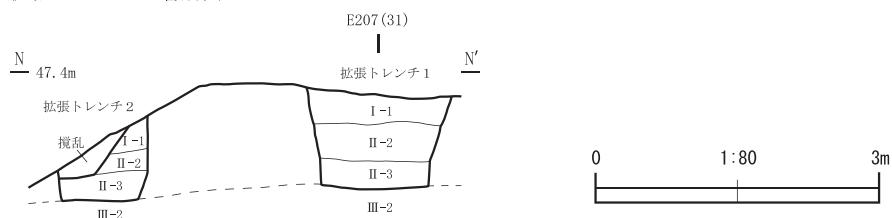
中央ベルト西壁北側土層断面



中央ベルト西壁南側土層断面



拡張トレンチ土層断面



第6図 第107次調査地土層断面図(2)

2) 検出遺構と出土遺物

調査区からは全体で、柱列跡4条、材木塀跡1条、掘立柱建物跡1棟、溝跡20条、竪穴建物跡2軒、柱掘り方1基、土坑43基、土手状遺構1基、道路遺構6面が検出された（第4～6図）。各遺構は、第III～IX層の各上面で検出されている。いずれも古代遺構であると考えられる。以下、遺構が検出された各層ごとに遺構・遺物の記述を行う。

①第III層面検出遺構と出土遺物（第7図）

第III層面からは、柱列跡4条、溝跡4条、竪穴建物跡2軒、土坑16基、道路遺構1面が発見された。

S A2370柱列跡（第7・8図、図版3）

調査区北東区の第III-2層面で検出された東西方向の区画施設である。東西2間（西から2.0m+1.9m）で、西で21°北に振れる。柱掘り方は直径30～40cmの円形、深さ30～40cm、柱痕跡は不明である。

S A2371柱列跡（第7・8図、図版3）

調査区北東区の第III-2層面で検出された東西方向の区画施設で、調査区外の東へ延びる。東西2間（西から1.2m+2.0m）で、西で19°北に振れる。柱掘り方は直径40～50cmの円形、深さ20～30cm、柱痕跡は不明である。

S A2372柱列跡（第7・8図、図版3）

調査区北西区の第III-1・2層面で検出された東西方向の区画施設である。東西6間（西から1.0m+1.1m+1.0m+0.9m+0.9m+1.1m）で、西で21°北に振れる。柱掘り方は直径35～60cmの円形、深さ15～35cm、柱痕跡は不明である。

S A2373柱列跡（第7・8図、図版3）

調査区北東区の第III-2層面で検出された東西方向の区画施設である。東西2間（西から2.35m+2.3m）で、西で2°北に振れる。柱掘り方は30～50cmの円形、深さ30～55cm、柱痕跡は不明である。

SD2376と重複し、これより新しい。

S D2374溝跡（第7図、図版3）

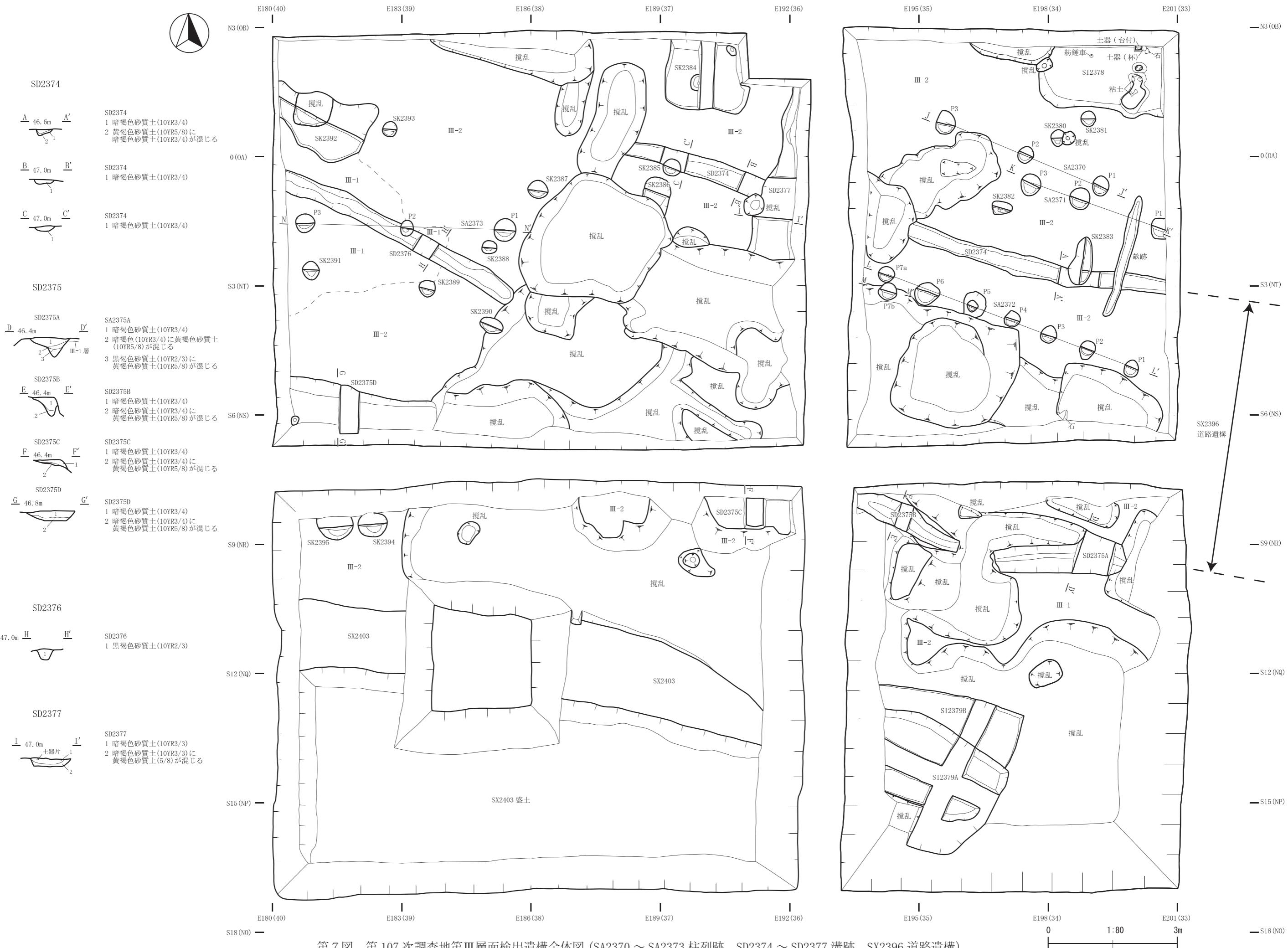
調査区北の第III-2層面で検出された。幅35～50cm、深さ10～15cm、長さ13m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の東へ延びる。断面は皿状ないしU字形を呈し、西で10～16°北に振れる。後述するSX2396道路遺構の北側側溝と考えられる。

SD2377・SK2383・SK2385と重複し、これらより古い。

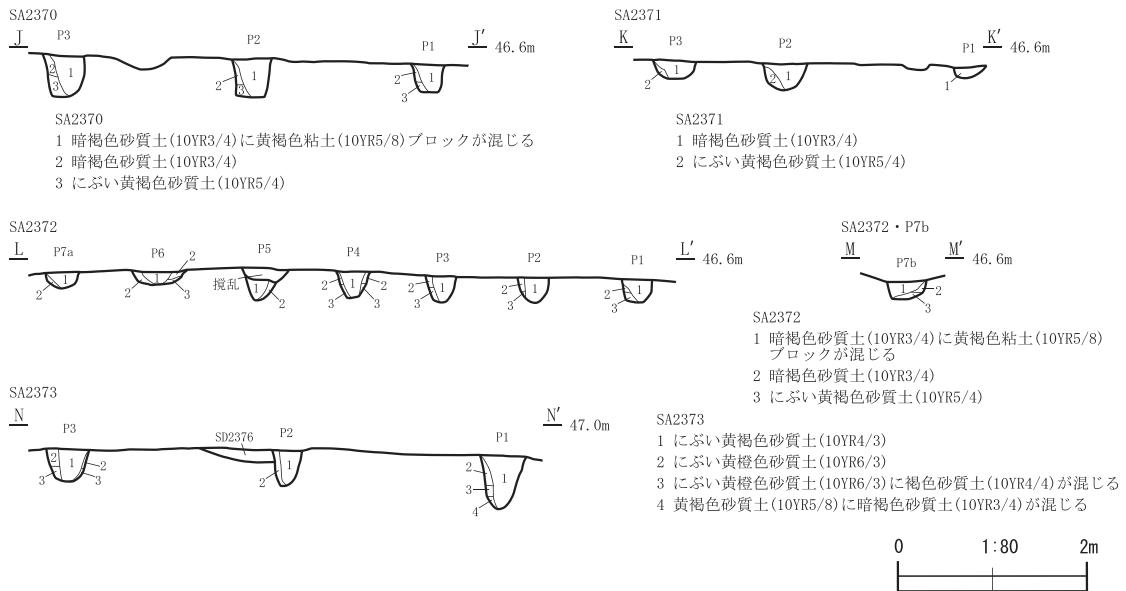
S D2375A・B・C・D溝跡（第7図、図版4）

調査区中央の第III-1、III-2層面で検出された。SD2375溝跡は搅乱により分断される形で検出され、東からA・B・C・Dとした。

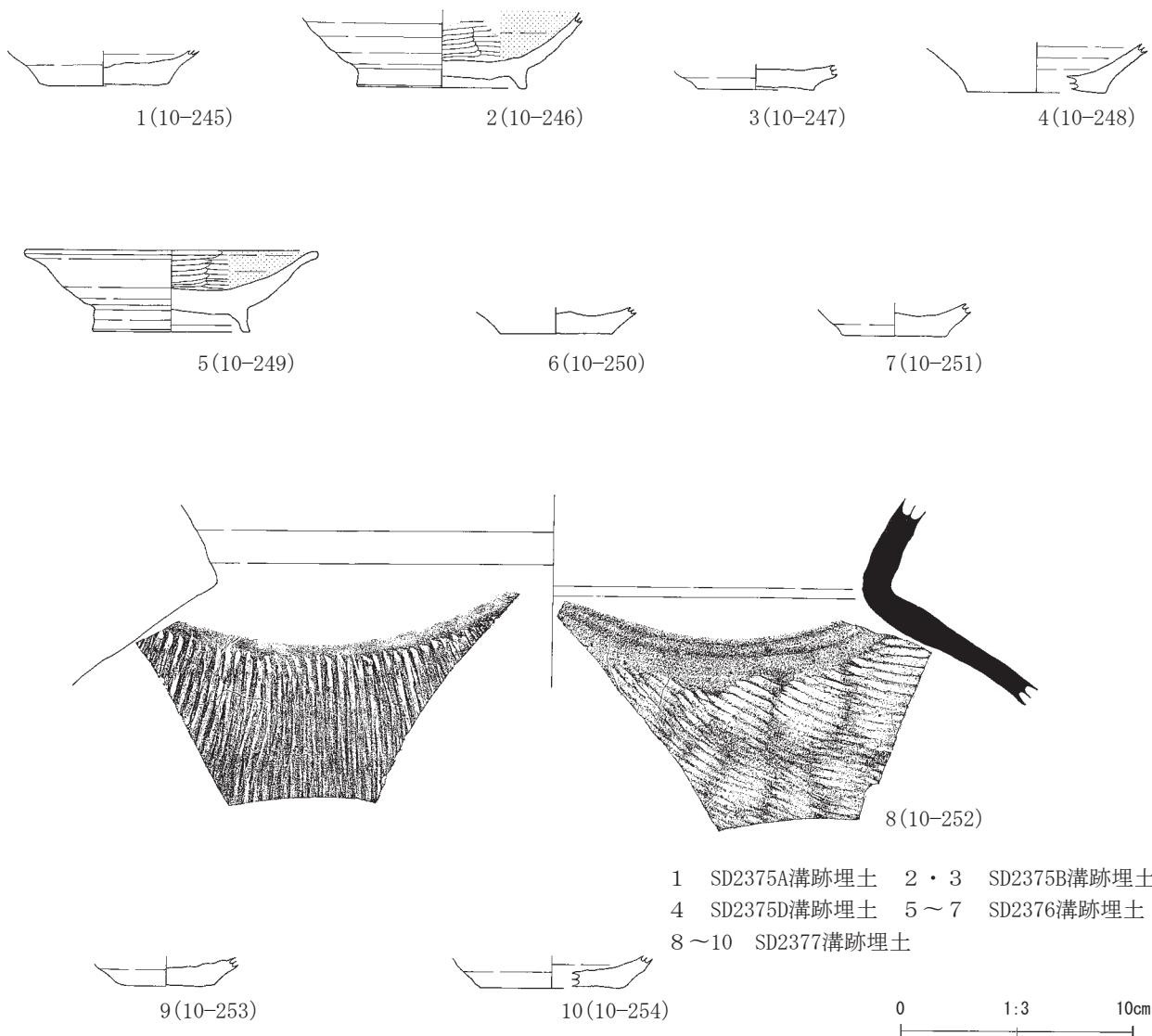
SD2375Aは、幅100cm、深さ40～50cm、長さ3m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の東へ延びる。断面V字形を呈し、西で10°北に振れる。SD2375Bは、幅70cm、深さ40cm、長さ2.5m以上の東西方向の溝跡である。断面はV字形を呈し、西で25°北に振れる。SD2375Cは、幅60cm、深さ20cm、長さ2.0m以



第7図 第107次調査地第III層面検出遺構全体図 (SA2370～SA2373柱列跡、SD2374～SD2377溝跡、SX2396道路遺構)



第8図 第Ⅲ層面検出遺構 SA2370～SA2373 柱列跡断面図



第9図 第Ⅲ層面検出 SD2375A・SD2375B・SD2375D・SD2376・SD2377 溝跡出土遺物

上の東西方向の溝跡である。溝跡の立ち上がり部分が削平を受けていて、断面は不明である。西で10°北に振れる。SD2375Dは、幅110cm、深さ25cm、長さ3.5m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の西へ延びる。断面は皿状で、西で7°北に振れる。いずれも後述するSX2396道路遺構の南側側溝と考えられる。

S D2375A・B・D溝跡出土遺物（第9図、図版13）

土師器（第9図2）：SD2375B溝跡埋土出土の台付壺の底部破片である。内面は横方向のミガキが施されている。

赤褐色土器（第9図1・3・4）：1がSD2375A溝跡、3がSD2375B溝跡、4がSD2375D溝跡出土である。1・3・4は壺の底部破片である。いずれも糸切り無調整である。

S D2376溝跡（第7図、図版4）

調査区北西区の第III-1・2層面で検出された。幅40cm、深さ25cm、長さ6m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の西へ延びる。断面はU字形を呈し、西で27°北に振れる。

SA2373と重複し、これより古い。

S D2376溝跡出土遺物（第9図、図版13）

土師器（第9図5）：台付皿で、内面に横方向の丁寧なミガキが施されている。口縁部は外反している。

赤褐色土器（第9図6・7）：6・7は壺の底部破片である。いずれも糸切り無調整である。

S D2377溝跡（第7図、図版4）

調査区北西区の第III-2層面で検出された。幅100cm、深さ20cm、長さ4m以上の南北方向の溝跡で、調査区外の北へ延びる。断面は皿状を呈し、北で12°東に振れる。

SD2374と重複し、これより新しい。

S D2377溝跡出土遺物（第9図、図版4）

須恵器（第9図8）：大甕の頸部破片である。内面に平行の当て具痕、外面に平行叩き痕がみられる。

赤褐色土器（第9図9・10）：9・10は壺の底部破片である。いずれも糸切り無調整である。

S I2378竪穴建物跡（第10図、図版4）

調査区北東区の第III-2層面で検出された。一辺2.8m以上の方形を呈し、調査区外の北東へ広がる。カマドは南側に設置されたと考えられるが、破壊されている。壁高は約20cmで、南壁は西で6°北に振れる。床面から紡錘車が直立した状態で出土した。

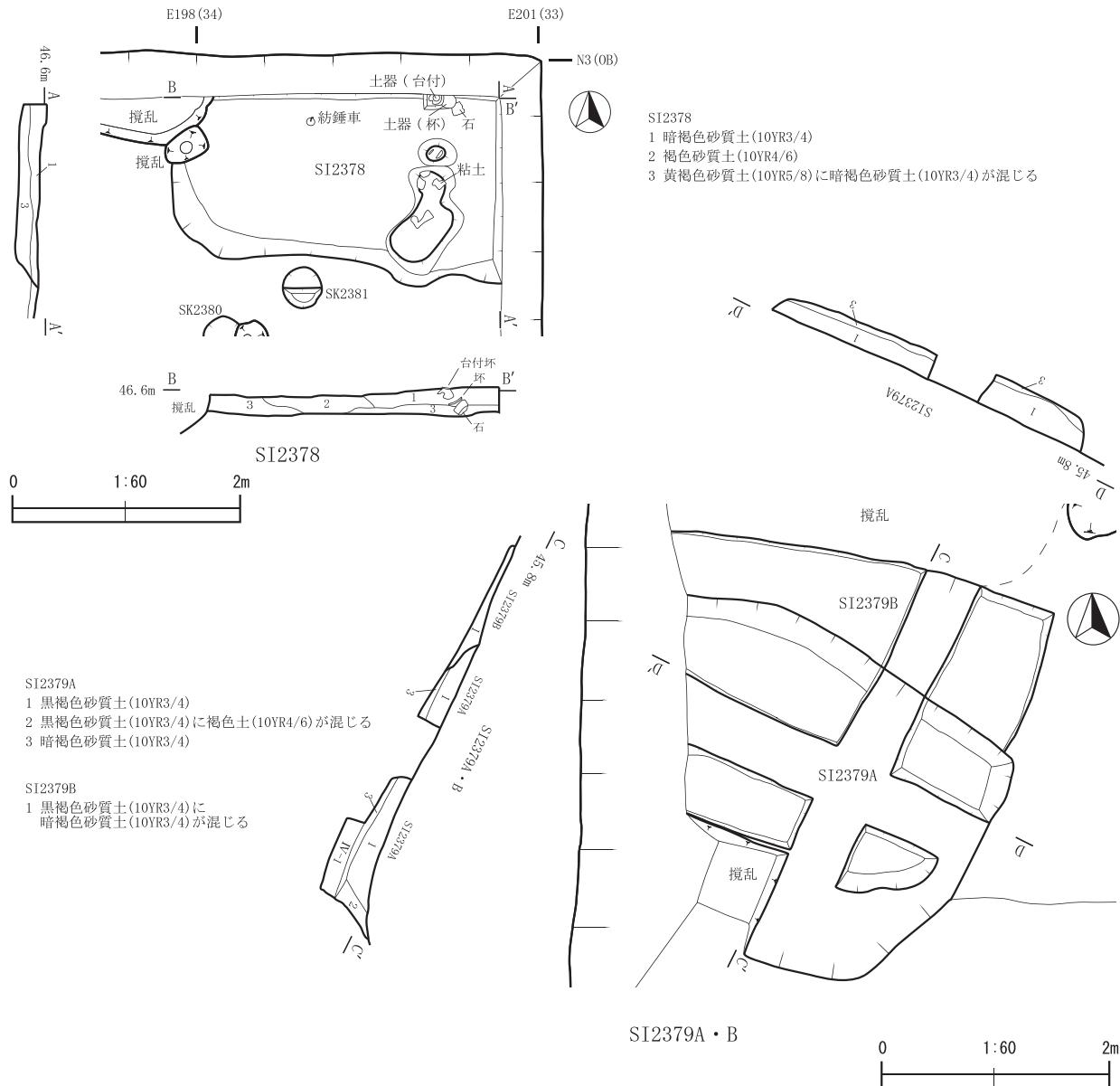
S I2378竪穴建物跡出土遺物（第11図、図版13）

赤褐色土器（第11図1・2）：1は床面直上、2は埋土出土である。1は糸切り無調整の壺である。2は台付壺である。

鉄製品（第11図3）：床面直上で出土した紡錘車である。紡輪と紡茎軸とともに鉄製である。紡輪径は5.5cmで、紡茎は折れ曲がっているが、伸ばしたとすれば紡茎長は16.5cmである。

S I2379A・B竪穴建物跡（第10図、図版5）

調査区南東区の第III-2層面で検出された。SI2379は新旧2時期あり、同位置で建て替えが行われている。新しい方をSI2379A、古い方をSI2379Bとした。SI2379Aは、一辺3m以上の方形で、カマドの有



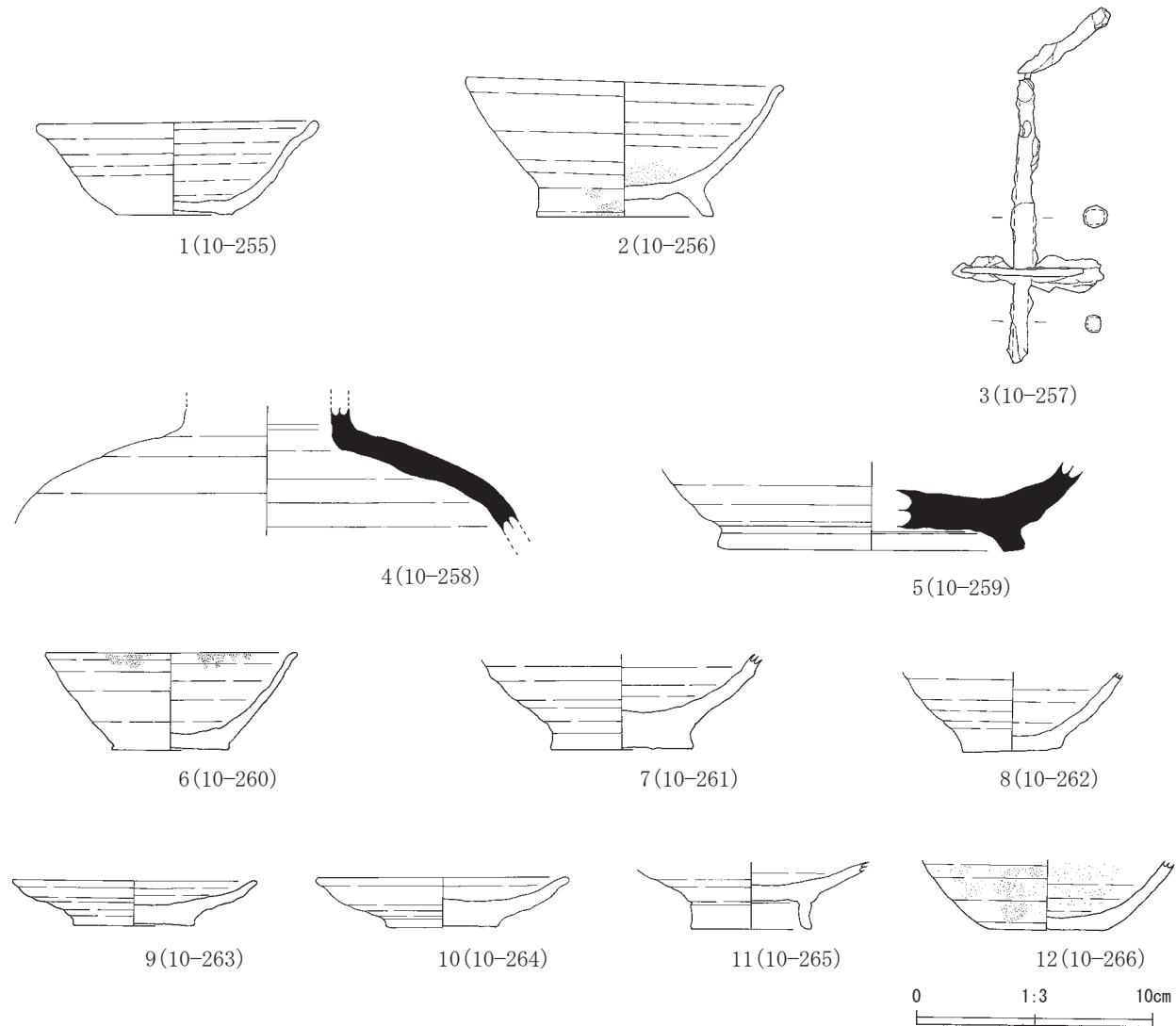
第10図 第III層面検出遺構 SI2378、SI2379A・SI2379B 壓穴住居跡

無は不明、壁高は25～30cmである。東壁は北で25°東に振れる。SI2379Bは一辺3m以上の方形で、カマドの有無は不明、壁高は約10cmである。東壁は北で18°東に振れる。大半はSI2379Aにより大きく削平を受けている。SI2379Aの建て替えは、SI2379Bよりも50cm～1m南で行われている。

S I 2379 A ・ B 壓穴建物跡出土遺物 (第11図、図版13)

須恵器 (第11図4・5)：いずれもSI2379A壓穴建物跡出土である。4は壺の肩部破片である。5は甕の底部破片である。

赤褐色土器 (第11図6～12)：6～11はSI2379A壓穴建物跡、12はSI2379B壓穴建物跡出土である。6～8・12は糸切り無調整の壺である。7は底部が柱状高台となっている。8は底部切り離しが雑である。9・10は糸切り無調整の皿である。11は台付皿である。



1～3 SI2378堅穴建物跡埋土 4～11 SI2379A堅穴建物跡埋土 12 SI2379B堅穴建物跡埋土
(1・3は床面直上出土)

第11図 第III層面検出 SI2378・SI2379A・SI2379B 堅穴建物跡出土遺物

S K2380土坑（第12図）

調査区北東区の第III-2層面で検出された。直径40cm、深さ10cm、円形を呈する。

S K2381土坑（第12図）

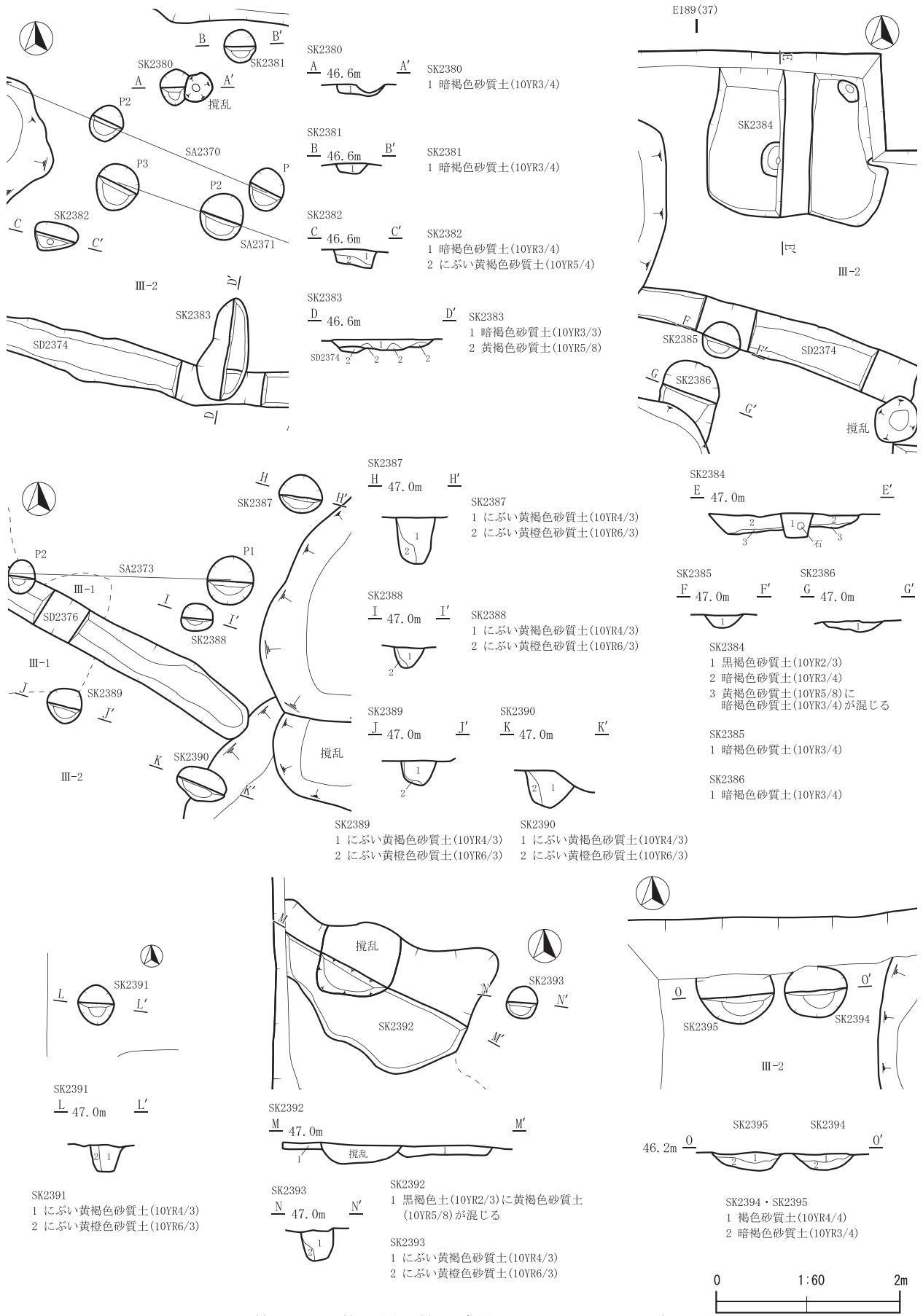
調査区北東区の第III-2層面で検出された。直径35cm、深さ10cm、円形を呈する。

S K2382土坑（第12図）

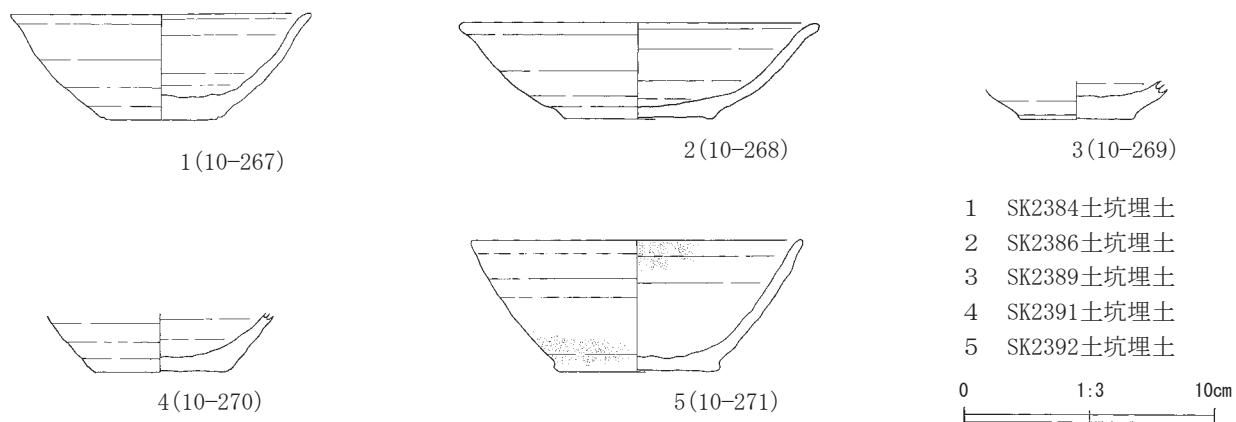
調査区北東区の第III-2層面で検出された。長軸50cm、短軸30cm、深さ20cm、橢円形を呈する。

S K2383土坑（第12図）

調査区北東区の第III-2層面で検出された。長軸110cm、短軸50cm、深さ10cm、橢円形を呈する。
SD2374と重複し、これより新しい。



第12図 第III層面検出遺構 SK2380～2395 土坑



第13図 第III層面検出 SK2384・SK2386・SK2389・SK2391・SK2392 土坑出土遺物

S K2384土坑（第12図、図版5）

調査区北西区の第III-2層面で検出された。長軸200cm、短軸150cm以上、深さ20～25cm、隅丸方形を呈する。調査区外の北へ広がる。

S K2384土坑出土遺物（第13図、図版13）

赤褐色土器（第13図1）：糸切り無調整の坏である。

S K2385土坑（第12図）

調査区北西区の第III-2層面で検出された。直径40cm、深さ10cm、円形を呈する。

SD2374と重複し、これより新しい。

S K2386土坑（第12図）

調査区北西区の第III-2層面で検出された。長軸80cm以上、短軸60cm、深さ10cm、楕円形を呈する。

S K2386土坑出土遺物（第13図、図版13）

赤褐色土器（第13図2）：糸切り無調整の坏である。器高が低く、扁平なタイプである。

S K2387土坑（第12図）

調査区北西区の第III-2層面で検出された。直径40cm、深さ50cm、円形を呈する。

S K2388土坑（第12図）

調査区北西区の第III-2層面で検出された。直径30cm、深さ20cm、円形を呈する。

S K2389土坑（第12図）

調査区北西区の第III-2層面で検出された。直径40cm、深さ25cm、円形を呈する。

S K2389土坑出土遺物（第13図、図版13）

赤褐色土器（第13図3）：糸切り無調整の坏の底部破片である。

S K 2390土坑（第12図）

調査区北西区の第Ⅲ-2層面で検出された。長軸50cm、短軸30cm、深さ40cm、橢円形を呈する。

S K 2391土坑（第12図）

調査区北西区の第Ⅲ-1層面で検出された。直径40cm、深さ30cm、円形を呈する。

S K 2391土坑出土遺物（第13図、図版14）

赤褐色土器（第13図4）：糸切り無調整の壺の底部破片である。

S K 2392土坑（第12図）

調査区北西区の第Ⅲ-2層面で検出された。長軸220cm以上、短軸120cm、深さ10cm、不整形を呈し、調査区外の西へ広がる。

S K 2392土坑出土遺物（第13図、図版14）

赤褐色土器（第13図5）：糸切り無調整の壺である。底部切り離しが雑である。内外面煤状炭化物が付着し、被熱している。

S K 2393土坑（第12図）

調査区北西区の第Ⅲ-2層面で検出された。直径30cm、深さ30cm、円形を呈する。

S K 2394土坑（第12図）

調査区南西区の第Ⅲ-2層面で検出された。長軸70cm、短軸50cm、深さ20cm、橢円形を呈する。

S K 2395土坑（第12図）

調査区南西区の第Ⅲ-2層面で検出された。長軸80cm、短軸60cm以上、深さ20cm、橢円形を呈する。

S X 2396道路遺構（第7図、図版1）

調査区北半の第Ⅲ-1層であるにぶい黄褐色土の硬化面と、第Ⅲ-2層である黄褐色砂、第Ⅲ-3層である黒褐色土の造成土からなる東西方向の道路遺構である。第Ⅲ-1層の硬化面は、調査区北西部と南東部で一部みられるのみで、大部分は削平を受けている。硬化面である第Ⅲ-1層の厚さは5～20cmである。SD2374溝跡が北側側溝、SD2375A～D溝跡が南側側溝と考えられ、これらによって区画されており、西で10°～16°北に振れる。SD2374・SD2375A～D溝跡の方向に沿って東西21m以上にわたり確認される。道路側溝間の距離は、道路側溝に直交する方向で計測すると溝芯々で6.0m～6.5mである。調査区外の東西に延びる。

S X 2396道路遺構出土遺物

SX2396道路遺構を構成するのは基本層序の第Ⅲ層（第Ⅲ-1～3層）であり、「3）基本層序および各層出土遺物」で後述する。

(2)第IV層面検出遺構と出土遺物（第14図）

第IV層面からは、溝跡2条、土坑4基、土手状遺構1基、道路遺構1面が発見された。

S D2397溝跡（第14図、図版5）

調査区北の第IV-1層面で検出された。幅80～120cm、深さ10cm、長さ18m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の東西へ延びる。断面は皿状を呈し、西で7～8°北に振れる。後述するSX2404道路遺構の北側側溝と考えられる。

SK2400・SK2401・SK2402と重複し、これより古い。

S D2397溝跡出土遺物（第16図、図版14）

赤褐色土器（第16図1～4）：1～3は壺の底部破片である。いずれも糸切り無調整である。4は小型甕の底部破片である。

S D2398溝跡（第14図、図版6）

調査区南の第IV-1層面で検出された。幅120～130cm、深さ10～15cm、長さ19m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の東西へ延びる。断面は皿状を呈し、西で8～9°北に振れる。後述するSX2404道路遺構の南側側溝と考えられる。

S D2398溝跡出土遺物（第16図、図版14）

土師器（第16図5）：台付壺の底部破片である。底部外面に墨痕がある。

赤褐色土器（第16図6）：糸切り無調整の壺である。

S K2399土坑（第15図）

調査区北東区の第IV-1層面で検出された。長軸100cm、短軸70cm、深さ5cm、橢円形を呈する。

S K2399土坑出土遺物（第16図、図版14）

土製品（第16図7）：フイゴ羽口の破片である。

S K2400土坑（第15図）

調査区北西区の第IV-1層面で検出された。長軸100cm、短軸90cm、深さ10cm、不整形を呈する。

SD2397と重複し、これより新しい。

S K2400土坑出土遺物（第16図、図版14）

赤褐色土器（第16図8）：糸切り無調整の壺である。内外面煤状炭化物が付着している。

S K2401土坑（第15図）

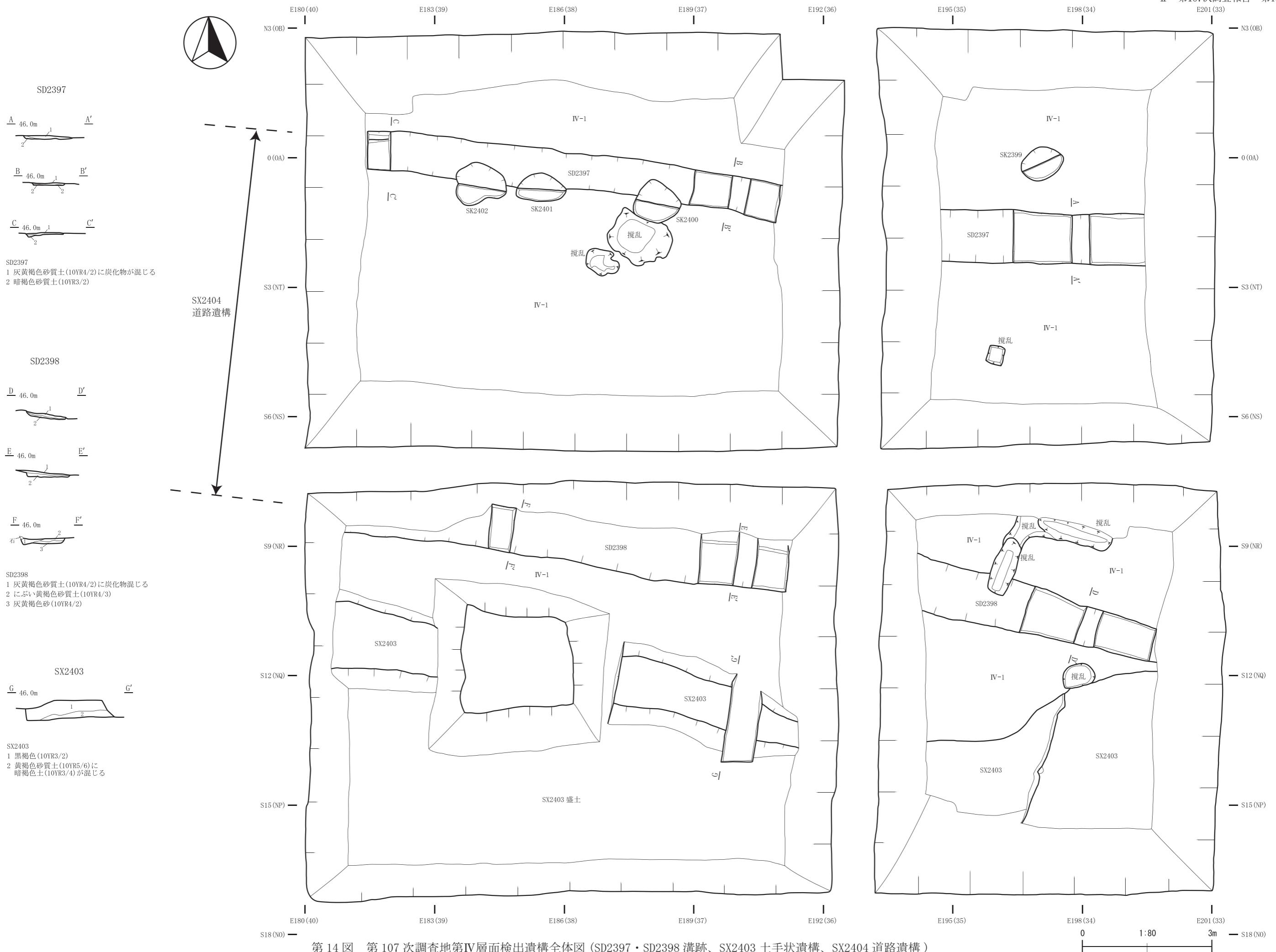
調査区北西区の第IV-1層面で検出された。長軸110cm、短軸60cm、深さ3cm、橢円形を呈する。

SD2397と重複し、これより新しい。

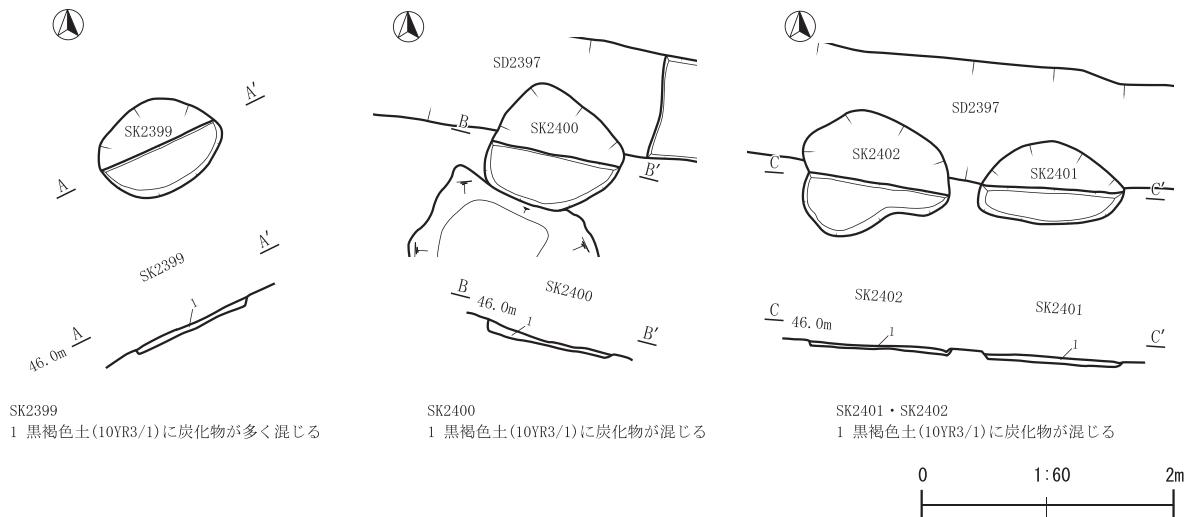
S K2402土坑（第15図）

調査区北西区の第IV-1層面で検出された。長軸110cm、短軸100cm、深さ3cm、不整円形を呈する。

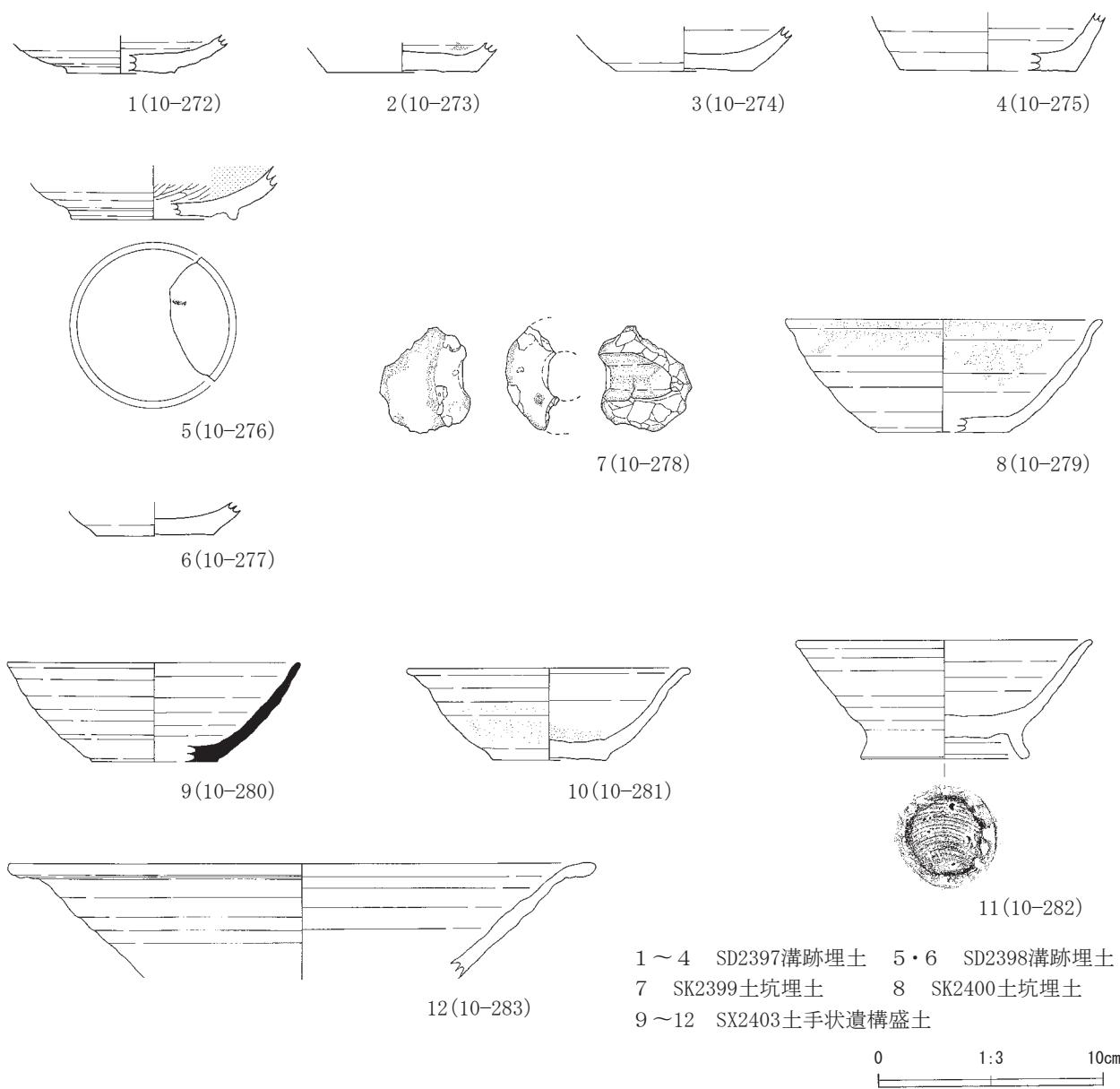
SD2397と重複し、これより新しい。



第14図 第107次調査地第IV層面検出遺構全体図 (SD2397・SD2398溝跡、SX2403土手状遺構、SX2404道路遺構)



第15図 第IV層面検出遺構 SK2399～SK2402 土坑



第16図 第IV層面検出 SD2397・SD2398 溝跡、SK2399・SK2400 土坑、SX2403 土手状遺構出土遺物

S X2403土手状遺構（第14図、図版6）

調査区南の第IV-1層面で検出された。頂部幅5.0m以上、高さ40～50cm、長さ19.2m以上の東西方向の土手状遺構で、調査区外の東西へ延びる。特に幅1.7～2.0mの幅で盛土がみられる。調査区は第IV-1層面が南側に向かって傾斜しており、その傾斜部分にもこのSX2403土手状遺構の盛土の堆積がみられる。

S X2403土手状遺構出土遺物（第16図、図版14）

須恵器（第16図9）：盛土部分出土で、糸切り無調整の坏である。椀形を呈する器形である。

赤褐色土器（第16図10～12）：いずれも盛土部分出土である。10は糸切り無調整の坏である。口縁部が外反している。11は台付坏で、底部外面に浅く短い菊花状の工具痕がみられる。12は鍋で、内面に煤状炭化物が付着している。

S X2404道路遺構（第14図、図版1）

調査区の中央部の第IV-1層である褐色砂質土の硬化面と、第IV-2層である灰黄褐色砂質土の造成土からなる東西方向の道路遺構である。道路遺構を構成する硬化面および造成土には、炭化物が多く含まれている。第IV-1層の硬化面の厚さは、10～15cmである。SD2397溝跡が北側側溝、SD2398溝跡が南側側溝と考えられ、これらによって区画されており、西で7～8°北に振れる。道路側溝間の距離は、道路側溝に直交する方向で計測すると溝芯々で8.5～9.0mである。調査区外の東西に延びる。

S X2404道路遺構出土遺物

SX2404道路遺構を構成するのは基本層序の第IV層（第IV-1・2層）であり、「3）基本層序および各層出土遺物」で後述する。



第17図 第107次調査地第V層面検出遺構全体図 (SD2405A・SD2405B・SD2406A・SD2406B溝跡、SX2416道路遺構)

③第V層面検出遺構と出土遺物（第17図）

第V層面からは、溝跡2条、土坑9基、道路遺構1面が発見された。

S D2405 A・B 溝跡（第17図、図版7）

調査区の北東区および北西区の第V-2層面で検出された。北東区でSD2405A溝跡、北西区でSD2405B溝跡が検出されたが、位置関係からみて一連の溝跡であると考えられる。

SA2405A溝跡は、幅60cm、深さ10cm、長さ2.3m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の東西へ延びる。断面は皿状を呈し、西で5°北に振れる。SA2405B溝跡は、幅40cm、深さ10cm、長さ1.7m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の東西へ延びる。断面は皿状を呈し、西で5°北に振れる。いずれも、後述するSX2416道路遺構の北側側溝と考えられる。

SD2405A溝跡はSK2408と重複し、これよりも古い。

S D2405 A・B 溝跡出土遺物（第19図、図版14）

須恵器（第19図1・4）：1はSD2405A溝跡、4はSD2405B溝跡埋土出土である。1は蓋で、天井部内面を硯に転用している。4は糸切り無調整の壺で、底部はやや上げ底となっている。

土師器（第19図2）：SD2405A溝跡出土である。糸切り無調整の壺である。内面は横ミガキが施される。

瓦（第19図3）：SD2405A溝跡出土である。一枚作りの平瓦で、凸面に縄目の叩き痕、凹面に布目圧痕が認められ、黄灰色、硬質で、焼成良好である。糸切り痕は摩滅により不明である。

S D2406 A・B 溝跡（第17図、図版7・8）

調査区の南東区および南西区の第V-2層面で検出された。南東区でSD2406A溝跡、南西区でSD2406B溝跡が検出されたが、位置関係からみて、一連の溝跡であると考えられる。

SD2406A溝跡は、幅50cm、深さ10cm、長さ2.5m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の東西へ延びる。断面は皿状を呈し、西で6°北に振れる。SD2406B溝跡は、幅50cm、深さ5cm、長さ2.0m以上の東西方向の溝跡で調査区外の東西へ延びる。断面は皿状を呈し、西で6°北に振れる。いずれも後述するSX2416道路遺構の南側側溝と考えられる。

S D2406 A 溝跡出土遺物（第19図、図版14）

須恵器（第19図5）：糸切り無調整の壺の底部破片である。

S K2407土坑（第18図）

調査区の北東区の第V-2層面で検出された。直径40cm、深さ10cm、円形を呈する。

S K2407土坑出土遺物（第19図、図版14）

赤褐色土器（第19図6）：台付壺の底部破片である。

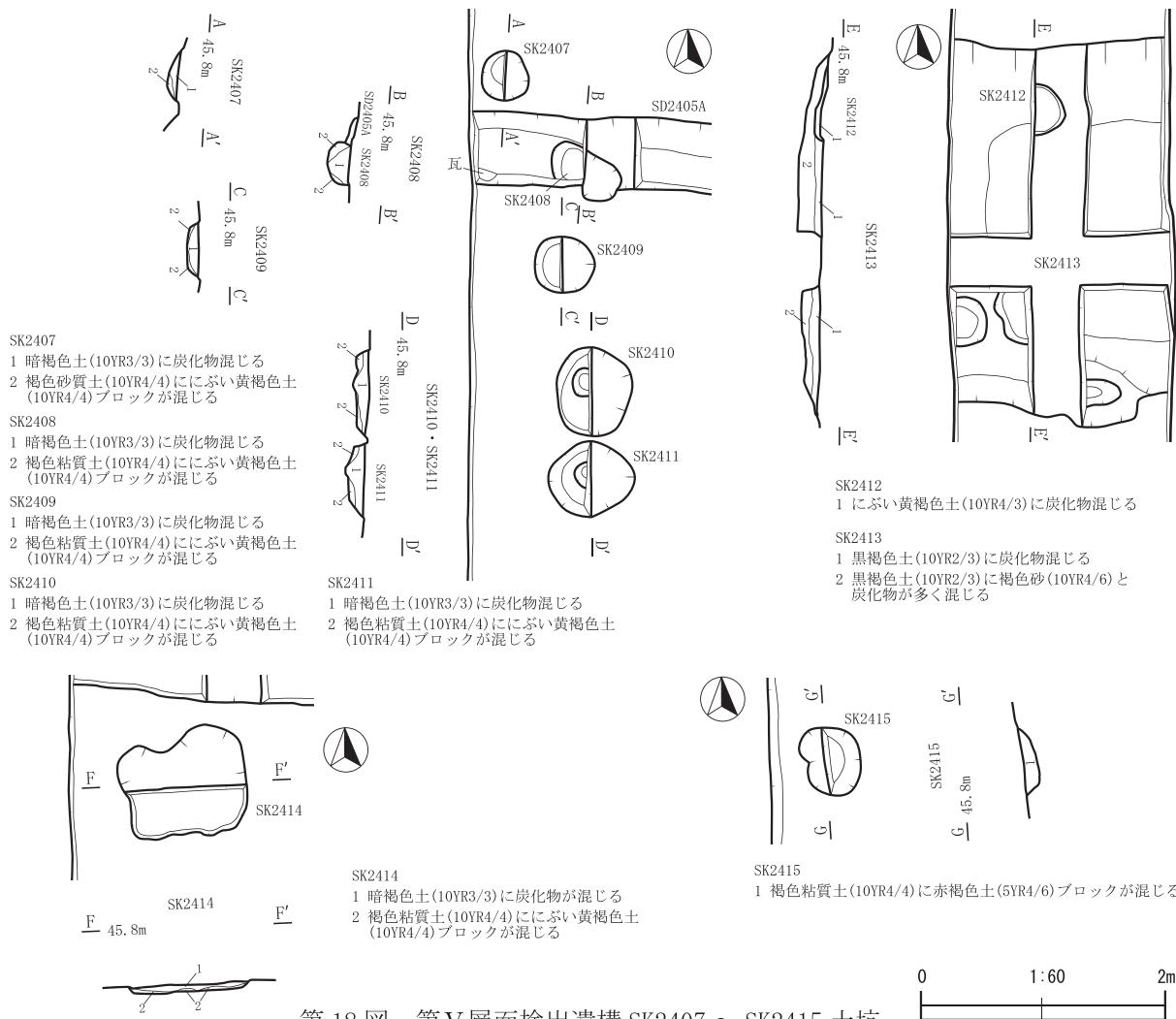
S K2408土坑（第18図）

調査区の北東区の第V-2層面で検出された。長軸60cm、短軸30cm、深さ20cm、橢円形を呈する。

SD2405Aと重複し、これより新しい。

S K2409土坑（第18図）

調査区の北東区の第V-2層面で検出された。直径50cm、深さ10cm、円形を呈する。



第18図 第V層面検出遺構 SK2407～SK2415 土坑

S K2410土坑（第18図）

調査区の北東区の第V-2層面で検出された。長軸80cm、短軸60cm、深さ12cm、橢円形を呈する。

S K2411土坑（第18図）

調査区の北東区の第V-2層面で検出された。長軸70cm、短軸60cm、深さ18cm、橢円形を呈する。

S K2411土坑出土遺物（第19図、図版15）

赤褐色土器（第19図7）：坏で、全体的に摩滅しており、切り離しは不明である。

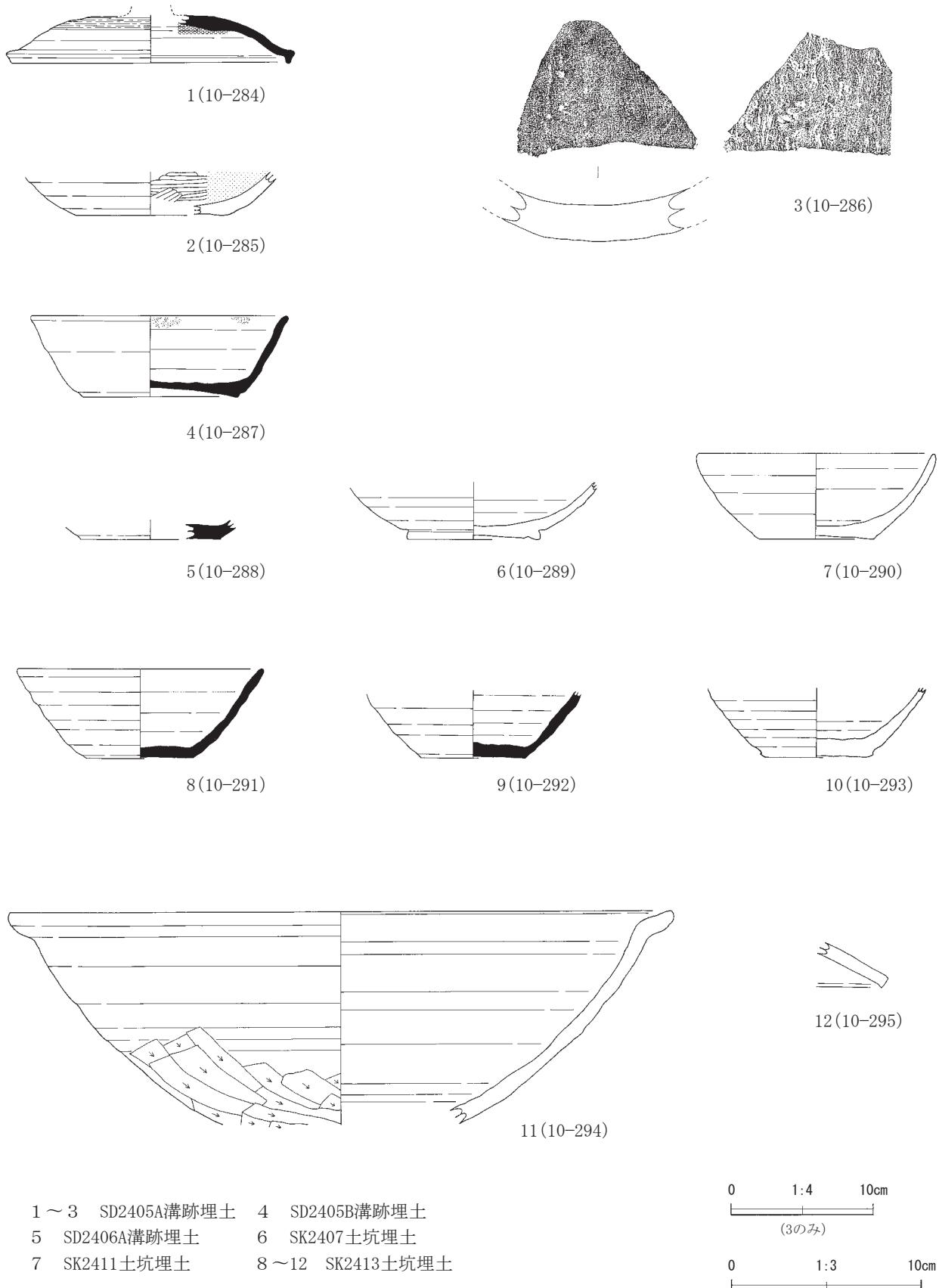
S K2412土坑（第18図）

調査区の北西区の第V-2層面で検出された。直径40cm、深さ5cm、円形を呈する。

SK2413と重複し、これより新しい。

S K2413土坑（第18図、図版8）

調査区の北西区の第V-2層面で検出された。長軸300cm、短軸180cm、深さ20cm、平面形不明で、調査区外の東西に広がる。埋土に炭化物を多く含み、廃棄土坑であると考えられる。



第19図 第V層面検出 SD2405A・SD2405B・SD2406A 溝跡、SK2407・SK2411・SK2413 土坑出土遺物

SK2412と重複し、これより古い。

S K2413土坑出土遺物 (第19図、図版15)

須恵器 (第19図8・9) : 8・9は糸切り無調整の壺である。いずれも楕形を呈する器形である。9は内面に煤状炭化物が付着している。

赤褐色土器 (第19図10・11) : 10は糸切り無調整の壺である。11は鍋で、体部下半にヘラケズリ調整が施される。

緑釉陶器 (第19図12) : 蓋の破片である。

S K2414土坑 (第18図)

調査区の南東区の第V-2層面で検出された。長軸100cm、短軸90cm、深さ10cm、不整円形を呈する。

S K2415土坑 (第18図)

調査区の南東区の第V-2層面で検出された。長軸50cm、短軸40cm、深さ10cm、橢円形を呈する。

S X2416道路遺構 (第17図、図版1)

調査区の中央部の第V-2層である褐色砂質土の硬化面からなる東西方向の道路遺構である。第V-2層には、炭化物が若干混じる。第V-2層の硬化面の厚さは、10～20cmである。SD2405A・B溝跡が北側側溝、SD2406A・B溝跡が南側側溝と考えられ、これらによって区画されており、西で5～6°北に振れる。道路側溝間の距離は、道路側溝に直行する方向で計測すると溝芯々で8.5～8.8mである。調査区外の東西方向に延びる。

S X2416道路遺構出土遺物

SX2416構成するのは基本層序の第V層（第V-1・2層）であり、「3）基本層序および各層出土遺物」で後述する。



第20図 第107次調査地第VI層面検出遺構全体図 (SB2417 掘立柱建物跡、SA2418 材木列壙跡、SD2419～SD2422 溝跡、SX2428A・B 道路遺構)

④第VI層面検出遺構と出土遺物（第20図）

第VI層面からは、掘立柱建物跡1棟、材木塀跡1条、溝跡4条、土坑5基、道路遺構1面が検出された。

S B 2417掘立柱建物跡（第20図、図版8）

調査区の北東区の第VI-3層面で検出された。梁間1間（2.6m）、桁行2間以上（1.3m+…）の東西棟の掘立柱建物である。建物方位は桁行南側柱筋で、西で3°北に振れる。柱掘り方は、直径60～70cmの隅丸方形もしくは橢円形であり、柱痕跡はP1・2・3で直径約10cm、抜き取りを受けている。埋土には炭化物が混じる。

SD2420と重複し、これより古い。

S B 2417掘立柱建物跡出土遺物（第22図、図版15）

赤褐色土器（第22図1）：P1の柱掘り方埋土出土で、糸切り無調整の坏である。

瓦（第22図2）：P1の柱掘り方埋土出土で、一枚作りの平瓦である。凸面に縄目の叩き痕、凹面にナデ調整が認められる。灰色で硬質、焼成は堅緻である。ナデ調整により糸切り痕は不明である。

S A 2418材木塀跡（第20図、図版9）

調査区の南東区の第VI-3層面で検出された。布掘り溝幅40cm、深さ20cm、長さ2.3m以上の東西方向の区画施設である。断面はU字形で、西で3°北に振れる。布掘り溝底面に柱痕跡があり、直径12cmである。抜き取り痕がみられた。布掘りの深さが20cmと浅いことから、上部が削平を受けているとすれば、溝内に密に材木を立て並べた構造の材木列塀跡であると考えられる。上部が削平を受けていないとすれば、立体的な区画施設というよりは、土留めのような構造であった可能性も考えられる。

S D 2419A・B溝跡（第20図、図版9）

調査区の北東区および北西区の第VI-3層面で検出された。北東区でSD2419A溝跡、北西区でSD2419B溝跡が検出されたが、位置関係からみて、一連の溝跡であると考えられる。

SD2419A溝跡は、幅40cm、深さ24cm、長さ2.6m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の東西へ延びる。断面はU字形を呈し、西で4°北に振れる。SD2419B溝跡は、幅40cm、長さ1m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の東西へ延びる。西で3°北に振れる。いずれもSX2428の北側側溝と考えられる。

SD2419AはSD2420と重複し、これより古い。

S D 2420溝跡（第20図、図版9）

調査区の北東区の第VI-3層面で検出された。幅30cm以上、深さ20cm～100cm、長さ7m以上の南北方向の溝跡で、調査区外の北へ延びる。方位は真北方向である。埋土には炭化物が混じる。

SB2417とSD2419Aと重複し、これらより新しい。

S D 2420溝跡出土遺物（第22図、図版15）

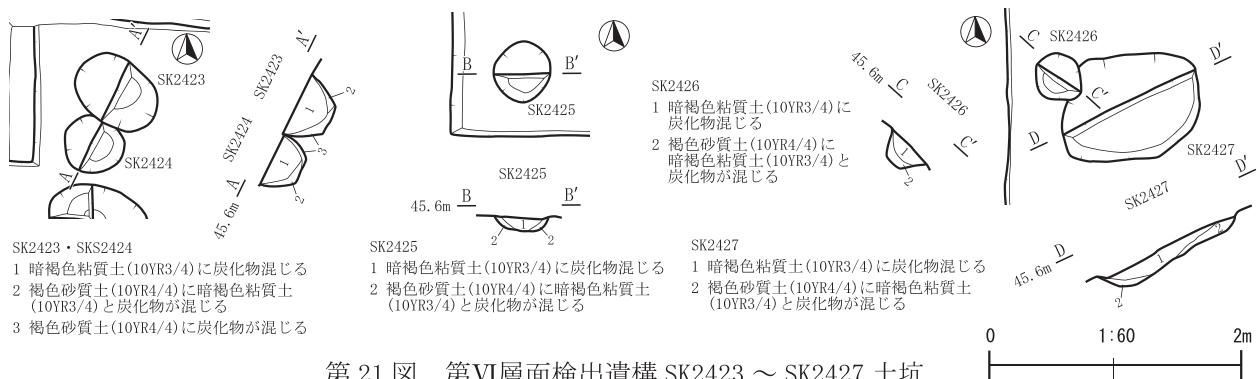
須恵器（第22図3）：蓋の破片で、天井部外面にケズリ調整が施される。

土師器（第22図4）：台付坏の底部破片で内外面黒色処理が施される。内面はミガキ調整が認められる。

赤褐色土器（第22図5）：坏の底部破片で、全体的に摩滅しており、切り離しは不明である。

S D 2421溝跡（第20図、図版9）

調査区の南東区の第IV-1層面で検出された。幅50～60cm、深さ5～12cm、長さ2.4m以上の東西方



第21図 第VI層面検出遺構 SK2423～SK2427 土坑

向の溝跡で、調査区外の東西へ延びる。断面は皿状を呈し、西で5°北に振れる。後述するSX2428Aの南側側溝と考えられる。

S D2421溝跡出土遺物（第22図、図版15）

須恵器（第22図6）：壺の底部破片で、体部下半にケズリ調整、底部は回転ヘラ切りである。

赤褐色土器（第22図7）：高台壺の底部破片で、体部下半にケズリ調整が施される。

鉄製品（第22図8）：刀子で、茎部が欠損している。

S D2422溝跡（第20図、図版9）

調査区の南東区の第IV-2層面で検出された。幅20cm、深さ5～10cm、長さ2.4m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の東西へ延びる。断面は皿状を呈し、西で4°北に振れる。後述するSX2428Bの南側側溝と考えられる。

S K2423土坑（第21図）

調査区の北東区の第IV-3層面で検出された。長軸70cm、短軸50cm、深さ20cm、橢円形を呈する。

SK2424と重複し、これより古い。

S K2424土坑（第21図）

調査区の北東区の第IV-3層面で検出された。直径50cm、深さ20cm、円形を呈する。

SK2423と重複し、これより新しい。

S K2425土坑（第21図）

調査区の北東区の第IV-3層面で検出された。直径40cm、深さ10cm、円形を呈する。

S K2426土坑（第21図）

調査区の北東区の第IV-3層面で検出された。直径30cm、深さ20cm、円形を呈する。

SK2427と重複し、これより新しい。

S K2426土坑出土遺物（第21図、図版15）

須恵器（第22図9）：台付壺の底部破片である。

S K2427土坑（第21図）

調査区の北東区の第IV-3層面で検出された。長軸120cm、短軸90cm、深さ15cm、橢円形を呈する。

SK2426と重複し、これより古い。

S X2428A・B 道路遺構（第20図、図版2）

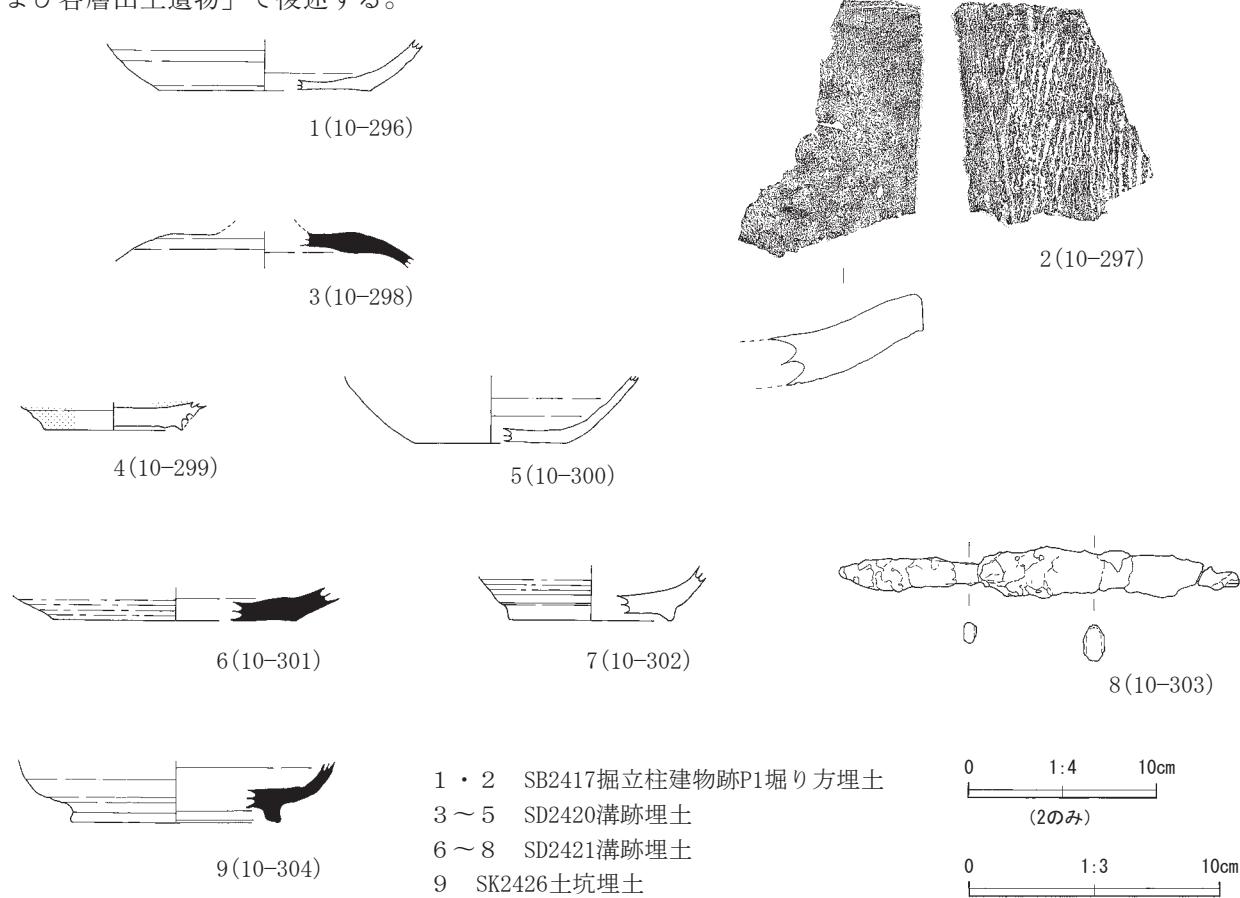
調査区中央部の第VI-3層である褐色粘質土の硬化面からなる東西方向の道路遺構である。第VI-3層の硬化面の厚さは、10～20cmである。SD2421・SD2422溝跡周辺には第IV-1層の暗褐色土混じりの褐色粘質土と第IV-2層の褐色粘質土が混じる暗褐色土の道路造成土が堆積している。この第IV-1層と第IV-2層の厚さは、約10cmである。

SX2428A道路遺構は、SD2419A・B溝跡が北側側溝、SD2421溝跡が南側側溝と考えられ、これらによって区画されており、西で4～5°北に振れる。道路側溝間の距離は、道路側溝に直交する方向で計測すると溝芯々で道路幅約7.5mである。調査区外の東西方向に延びる。SX2428A道路遺構は、南側側溝であるSD2421が第IV-1層面検出であり、後述のSX2428B道路遺構よりも新しいと考えられる。

SX2428B道路遺構は、SD2419A・B溝跡が北側側溝、SD2422溝跡とSA2418材木埠跡が南側道路側溝・区画施設と考えられ、これらによって区画されており、西で3～4°北に振れる。道路側溝間・区画施設の距離は、道路側溝・区画施設に直交する方向で計測すると、溝芯々でSD2419～SD2422間では8.6m、SD2419～SA2418間では8.9mである。SX2428B道路遺構の南側側溝・区画施設と考えられるSD2422溝跡・SA2418材木埠跡は、それぞれ第VI-2層面、第VI-3層面で、SX2428Aの南側側溝であるSD2421溝跡より下位で検出されている。したがって、道路幅8.6～8.9mのSX2428B道路遺構から道路幅7.5mのSX2428A道路遺構という変遷があると考えられる。

S X2428 A・B 道路遺構出土遺物

SX2428A・B道路遺構を構成するのは基本層序の第VI層（第VI-1～3層）であり、「3）基本層序および各層出土遺物」で後述する。



第22図 第VI層面検出 SB2417 掘立柱建物跡、SD2420・SD2421 溝跡、SK2426 土坑出土遺物

⑤第VII層面検出遺構と出土遺物（第24図）

第VII層面からは、溝跡2条、柱掘り方1基、土坑5基、道路遺構1面が発見された。

S D2429溝跡（第24図、図版10）

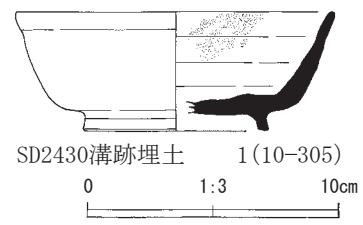
調査区の北東区の第VII層面で検出された。幅40cm、深さ10cm、長さ1.7m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の東西へ延びる。断面はU字形を呈し、西で3°北に振れる。後述するSX2437の北側側溝と考えられる。

S D2430溝跡（第24図、図版10）

調査区の南東区の第VII層面で検出された。幅40cm、深さ15cm、長さ1.8m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の東西へ延びる。断面は皿状を呈し、西で2°北に振れる。後述するSX2437の南側側溝と考えられる。

S D2430溝跡出土遺物（第23図、図版15）

須恵器（第23図1）：台付壺で、底部回転ヘラ切り後、ナデ調整を施している。内面に煤状炭化物が付着している。



第23図 第VII層面検出SD2430
溝跡出土遺物

S K P2431柱掘り方（第24図、図版10）

調査区の南東区の第VII層面で検出された。南北100cm、東西80cm以上、深さ32cm、隅丸方形を呈する。抜き取り痕がみられる。柱痕跡は不明である。単なる土坑ではなく、埋土の状況から柱掘り方と判断した。類似した柱掘り方は南北方向には展開しないため、東西方向の一本柱列の掘り方の一つであると考えられる。

S K2432土坑（第25図）

調査区の北東区の第VII層面で検出された。長軸40cm、短軸20cm以上、深さ25cm、円形を呈し、調査区外の北へ広がる。

S K2433土坑（第25図）

調査区の北東区の第VII層面で検出された。直径40cm、深さ20cm、円形を呈する。

S K2434土坑（第25図）

調査区の北東区の第VII層面で検出された。長軸100cm、短軸40cm以上、深さ40cm、橢円形を呈し、調査区外の東へ広がる。

S K2435土坑（第25図）

調査区の北東区の第VII層面で検出された。長軸90cm、短軸80cm、深さ20cm、不整円形を呈する。

S K2436土坑（第25図、図版10）

調査区の南東区の第VII層面で検出された。直径70cm、深さ10cm、不整円形を呈する。



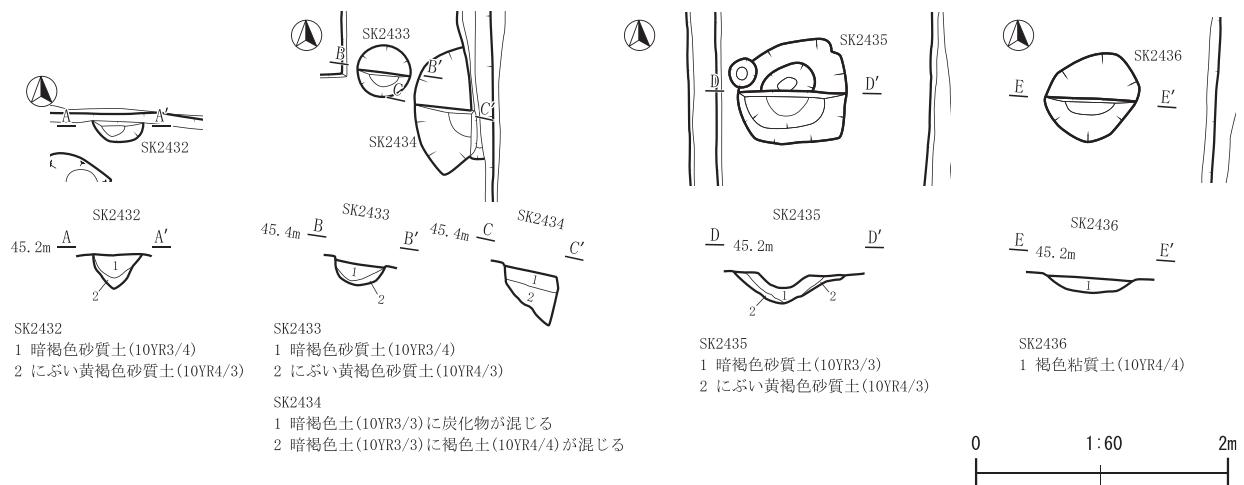
第24図 第107次調査地第VII層面検出遺構全体図 (SD2429・SD2430溝跡、SKP柱掘り方、SX2437道路遺構)

S X 2437道路遺構（第24図、図版2）

調査区の中央部の第VII層である褐色砂質土からなる東西方向の道路遺構である。第VII層の道路造成土の厚さは、10～20cmである。SD2429溝跡が北側側溝、SD2430溝跡が南側側溝と考えられ、これらによって区画されており、西で2～3°北に振れる。道路側溝間の距離は、道路側溝に直行する方向で計測すると溝芯々で12.1mである。調査区外の東西方向に延びる。

S X 2437道路遺構出土遺物

SX2437道路遺構を構成するのは基本層序の第VII層であり、「3) 基本層序および各層出土遺物」で後述する。



第25図 第VII層面検出遺構 SK2432～SK2436 土坑

⑥第VIII層面検出遺構と出土遺物（第26図）

第VIII層面からは、溝跡4条、土坑4基、道路遺構1面が検出された。

S D2438溝跡（第26図、図版11）

調査区の北東区の第VIII-2層面で検出された。幅40cm、深さ18cm、長さ1.5m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の東西へ延びる。断面はU字形を呈し、西で3°北に振れる。SX2446道路遺構の北側側溝と考えられる。

S D2439溝跡（第26図、図版11）

調査区の北東区の第VIII-1層面で検出された。幅45cm、深さ20cm、長さ1.6m以上の東西方向の溝跡で、調査区外の東西へ延びる。断面はU字形を呈し、西で2°北に振れる。SX2446道路遺構の南側側溝と考えられる。

S D2440溝跡（第26図、図版11）

調査区の南東区の第VIII-2層面で検出された。幅20cm、深さ10cm、長さ70cmの南北方向の溝跡である。断面はU字形を呈し、北で38°西へ振れる。

S D2441溝跡（第26図、図版11）

調査区の南東区の第VIII-2層面で検出された。幅20cm以上、深さ20cm以上、長さ1.3m以上の南北方向の溝跡で、調査区の北東へ延びる。断面はU字形を呈し、北で10°東に振れる。

S K2442土坑（第27図）

調査区の北東区の第VIII-2層面で検出された。長軸40cm、短軸20cm以上、深さ10cm、円形を呈する。

S K2443土坑（第27図）

調査区の北東区の第VIII-2層面で検出された。長軸80cm以上、短軸30cm以上、深さ30cm、橢円形を呈する。

S K2444土坑（第27図）

調査区の南東区の第VIII-2層面で検出された。長軸60cm、短軸40cm、深さ14cm、橢円形を呈する。

S K2445土坑（第27図）

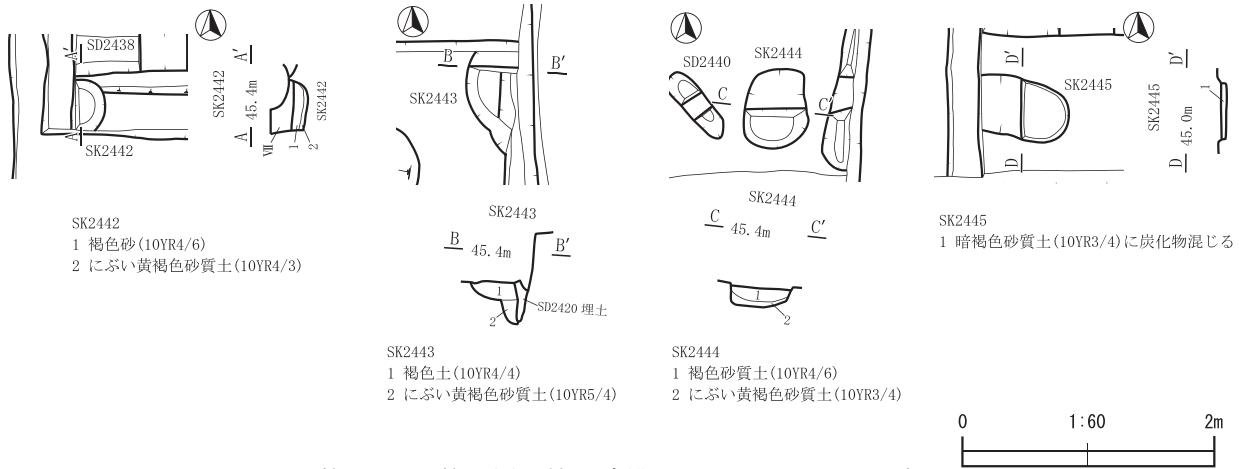
調査区の南東区の第VIII-1層面で検出された。長軸50cm、短軸40cm、深さ5cm、橢円形を呈する。

S X2446道路遺構（第26図、図版2）

調査区の中央部の第VIII-1層である黄褐色土と、第VIII-2層である黄褐色土が混じる明黄褐色砂からなる東西方向の道路遺構である。第VIII-1層の厚さは10～20cm、第VIII-2層は約20cmである。第VIII-1層は調査区南側にのみ堆積している。SD2438溝跡が北側側溝、SD2439溝跡が南側側溝と考えられ、これらによって区画されており、西で2～3°北に振れる。道路側溝間の距離は、道路側溝に直行する方



第26図 第107次調査地第VIII・IX層面検出遺構全体図 (SD2438～SD2441・SD2447・SD2448溝跡、SX2446道路遺構)



第27図 第VIII層面検出遺構 SK2442～SK2445 土坑

向で計測すると溝芯々で12.2mである。調査区外の東西方向に延びる。

S X 2446道路遺構出土遺物

SX2446道路遺構を構成するのは基本層序の第VIII層（第VIII-1・2層）であり、「3）基本層序および各層出土遺物」で後述する。

⑦第IX層面検出遺構と出土遺物（第26図）

第IX層（地山飛砂層）面からは、溝跡2条が検出された。

S D 2447溝跡（第26図、図版12）

調査区の南東区の第IX層（地山飛砂層）面で検出された。幅12cm、深さ28cm、長さ90cm以上の南北方向の溝跡で、調査区外の北東へ延びる。断面はU字形を呈し、北で19°東に振れる。

S D 2448溝跡（第26図、図版12）

調査区の南東区の第IX層（地山飛砂層）面で検出された。幅20cm、深さ5cm、長さ30cm、南北方向の溝跡である。断面は皿状を呈し、北で6°東に振れる。

3) 基本層序および各層出土遺物

第107次調査地の現地形は、北から南、西から東に向けて傾斜している。かつて収蔵庫があり、その基礎により大きく削平を受けている部分がある。

第107次調査地の基本層序をまとめると以下のようになる。

第I層 表土:現表土。第I-1層(褐色土(10YR4/4))、第I-2層(黄褐色粘土(10YR5/8))がある。

第I-1層は調査地全体を覆い、第I-2層は北東部のみ堆積している。

第II層 耕作土:旧耕作土。第II-1層(耕作土:黒褐色土(10YR2/2)に褐色砂質土(10YR4/4)が混じる)、第II-2層(耕作土:暗褐色土(10YR3/3))、第II-3層(耕作土:黒褐色土(10YR2/2))、第II-4層(耕作土:暗褐色土(10YR3/4))がある。

第III層 古代整地層(道路造成土):古代の整地層で、SX2396道路遺構を構成する造成土である。以下のように細分される。

第III-1層 道路造成土・硬化部分:にぶい黄褐色土(10YR5/3)に黄褐色砂(10YR5/8)が混じる非常にしまりが強く硬化している。調査区の北西部と南東部に確認された。SD2375A・SD2376、SK2391が検出されている。

第III-2層 道路造成土:黄褐色砂(10YR4/6)。SA2370～SA2373、SD2374～2377、SI2378・SI2379A・SI2379B、SK2380～SK2390・SK2392～SK2395が検出された。

第III-3層 道路造成土:黒褐色土(10YR2/3)に黄褐色砂(10YR4/6)と炭化物が多く混じる。北西調査区において、第III-2層と互層となって堆積している。出土遺物が多く、製鉄関連遺物が混じることから、周辺の生産施設からの廃棄物が混入しているものと考えられる。

第IV層 古代整地層(道路造成土):古代の整地層で、SX2404道路遺構を構成する造成土である。以下のように細分される。

第IV-1層 道路造成土・硬化部分:褐灰色砂質土(10YR5/1)に炭化物が多く混じる。上面に褐色(10YR4/6)の鉄分を含む。非常にしまりが強く硬化している。調査区全体に広がる。SD2397・SD2398、SK2399～SK2402、SX2403・SX2404が検出された。

第IV-2層 道路造成土:灰黄褐色砂質土(10YR4/2)に炭化物が混じる。北東部にのみ分布する。

第V層 古代整地層(道路造成土):古代の整地層で、SX2416道路遺構を構成する造成土である。以下のように細分される。

第V-1層 道路造成土:褐灰色砂質土(10YR5/1)に褐色砂質土(10YR4/6)が混じる。北東部のみに分布する。

第V-2層 道路造成土・硬化部分:褐色砂質土(10YR4/6)に炭化物が若干混じる。上面に褐色(10YR4/6)の鉄分を含む。非常にしまりが強く、硬化している。調査区全体に広がる。SD2405A・SD2405B・SD2406A・SD2406B、SK2407～SK2415が検出されている。

第VI層 古代整地層(道路造成土):古代の整地層で、SX2428A・B道路遺構を構成する造成土である。以下のように細分される。

第VI-1層 道路造成土:褐色粘質土(10YR4/4)に暗褐色土(10YR3/4)が混じる。SD2421・SD2422周辺にのみ堆積している。SD2421が検出されている。

第VI-2層 道路造成土:暗褐色土(10YR3/4)に褐色粘質土(10YR4/4)が混じる。SD2421・

SD2422周辺にのみ堆積している。SD2422が検出されている。

第VI-3層 道路造成土・硬化部分：褐色粘質土（10YR4/4）に炭化物が若干混じる。非常にしまりが強く硬化している。調査区全体に広がる。SB2417、SA2418、SD2419A・SD2419B・SD2420、SK2423～SK2427が検出されている。

第VII層 古代整地層（道路造成土）：褐色砂質土（10YR4/6）。SX2437道路遺構を構成する造成土である。調査区南側で部分的に硬化した面がみられる。SD2429・SD2430、SKP2431、SK2432～SK2436が検出されている。

第VIII層 古代整地層（道路造成土）：古代の整地層で、SX2446道路遺構を構成する造成土である。以下のように細分される。

第VIII-1層 道路造成土：黄褐色土（10YR4/6）。調査区南側のみ堆積している。SD2439・SK2445が検出されている。

第VIII-2層 道路造成土：明黄褐色砂（10YR6/8）に黄褐色土（10YR4/6）が混じる。SD2438・SD2440・SD2441、SK2442～SK2444・SK2446が検出されている。

第IX層 地山飛砂層：明黄褐色砂（10YR6/8）。SD2447・SD2448が検出されている。

各層出土遺物

第I層・搅乱 出土遺物（第28図1～5、図版16）

第28図1は第I層出土、2～5は搅乱出土である。

磁器（第28図1・4）：肥前系磁器染付皿で、蛇ノ目凹形高台である。4は肥前系染付碗で見込みに草花文を染付ける。

須恵器（第28図2）：擬宝珠状のつまみを有する蓋で、天井部内面を硯に転用している。

緑釉陶器（第28図3）：碗の体部破片である。

銭貨（第28図5）：天禧通寶（北宋・初鑄1017年）である。銭文が不鮮明で、本邦の模鋳銭と判断される。

第II層 出土遺物（第28図6～13、図版16）

土師器（第28図6）：台付壺で、内面に横・斜め方向のミガキ調整が認められる。

赤褐色土器（第28図7～10）：7～9は糸切り無調整で、柱状高台の壺である。10は台付皿である。

陶器（第28図11・12）：11・12はいずれも肥前系陶器皿である。外面は高台無釉で、内面に灰釉を施し、胎土目積みの痕跡がみられる。

磁器（第28図13）：13は肥前系磁器皿で、内面に二重格子文を染付け、蛇ノ目釉剥ぎがみられる。

第III層 出土遺物（第28図14～第31図6、図版16～19）

第III-2層 出土遺物（第28図14～第29図6、図版16・17）

土師器（第28図14）：14は糸切り無調整で、柱状高台の壺である。

赤褐色土器（第28図15～18、第29図1～3）：第28図15・16は糸切り無調整の壺である。第28図17は壺の口縁部破片で、「上」の墨書がみられる。第28図18は糸切り無調整の皿である。第29図1は台付皿で高台内部の底部に菊花状の工具痕がみられる。被熱しており、内部には煤状付着物がみられる。第29図2は小型甕の口縁部～体部上半の破片である。第29図3は大型甕の口縁部破片で、体部上半の内外面にカキ目調整を施す。

灰釉陶器（第29図4）：碗の底部破片である。

鉄製品（第29図5）：鉄鎌で、頭部が欠損している。

石器（第29図6）：珪質頁岩製の石匙である。

第III-3層 出土遺物（第29図7～第31図6、図版17～19）

須恵器（第29図7・8）：7は長頸壺である。外面体部下半にナタケズリ調整、内面体部下半にカキ目調整を施している。底部は砂底風である。8は大甕の口縁部破片である。外面に平行の叩き痕、内面に平行の当て具痕がみられる。

土師器（第30図1）：台付坏で、内面に横方向のミガキ調整を施している。

赤褐色土器（第30図2～20）：2～14は坏である。2には体部外面に「吉」の墨書、3には体部外面に「大」の墨書がみられる。3～10、12～14は糸切り無調整である。6と11の内面には漆が付着している。5は被熱しており、14は内面に煤状炭化物が付着している。15～17は糸切り無調整の皿である。18は台付坏で、内外面に煤状炭化物が付着している。19は小型甕の口縁部破片で、内外面に煤状炭化物が付着している。20は大型甕で、外面に煤状炭化物が付着している。

白磁（第31図1）：玉縁口縁の白磁の碗の口縁部破片である。

灰釉陶器（第31図2～4）：2は灰釉陶器碗の口縁部破片である。3は灰釉陶器の台付碗である。高台部および底部無釉である。4は灰釉陶器碗の体部破片である。

土製品（第31図5・6）：5・6はフイゴ羽口の破片である。

第IV層 出土遺物（第31図7～18、図版19）

須恵器（第31図7～10）：7・8は坏である。7の内面に煤状炭化物が付着している。9・10は台付坏で、10は底部内面を硯に転用している。

土師器（第31図11・12）：11は碗で、内面横ミガキ調整を施しており、内面に煤状炭化物が付着している。12は台付坏で、内面にミガキ調整を施している。

赤褐色土器（第31図13～18）：13～15は糸切り無調整の坏である。16は坏の口縁部破片で、体部外面に「五」カの墨書がみられる。17は糸切り無調整の皿である。18は小型甕の口縁部破片である。口縁部内面に煤状炭化物が付着している。

第V層 出土遺物（第31図19～第32図2、図版19・20）

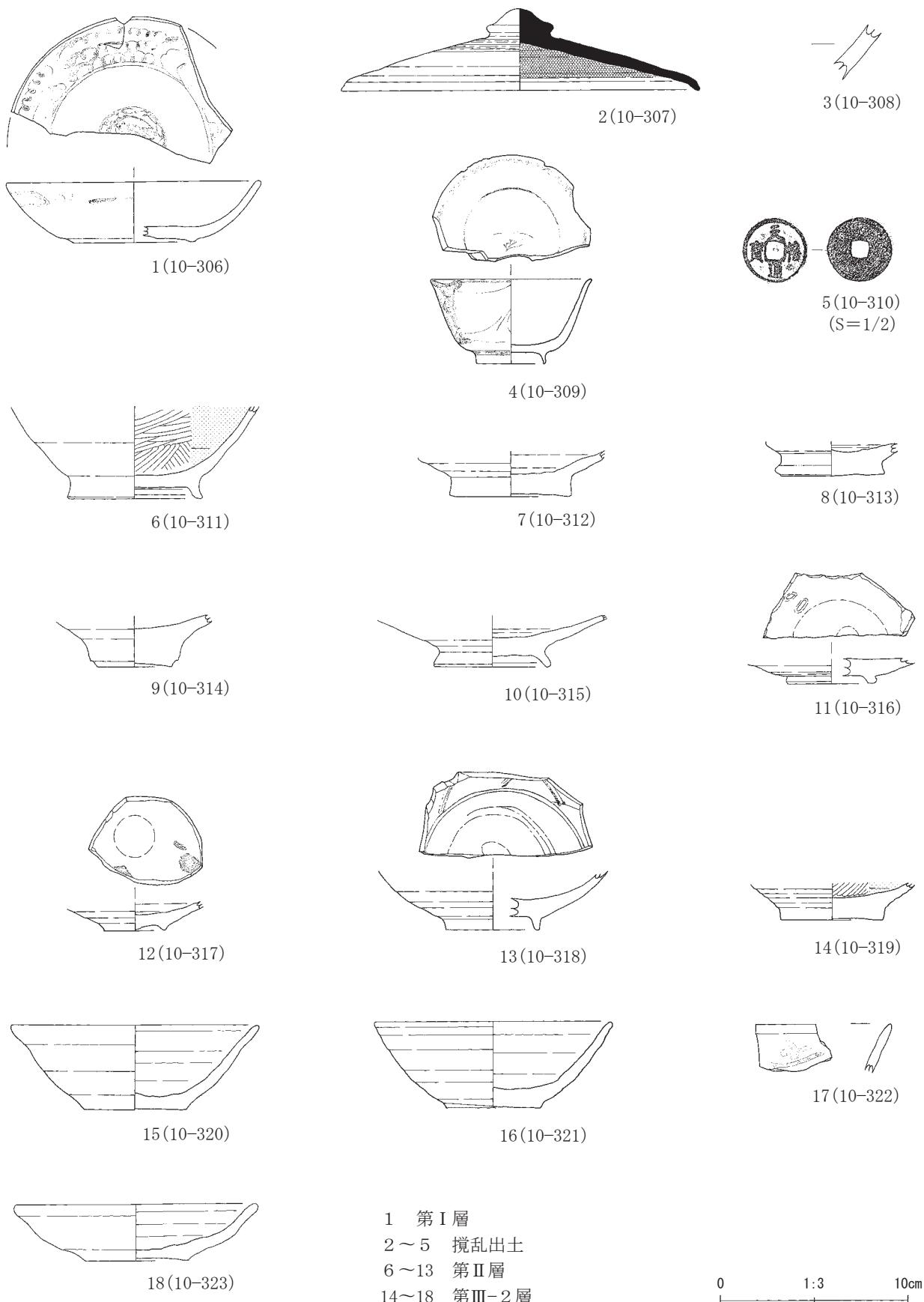
須恵器（第31図19～22）：19は坏で、ヘラ切り後、軽いナデ調整を施す。焼成は不良である。20は糸切り後底部立ち上がり部分にケズリ調整を施す。内面を硯に転用している。21は扁平なつまみを有する蓋の破片である。天井部内面を硯に転用している。22は天井部に屈曲をもつ蓋である。つまみ部は欠損している。

赤褐色土器（第31図23・第32図1）：第31図23は糸切り無調整の坏である。第32図1は坏の口縁部破片で、外面に判読不明の墨書がみとめられる。

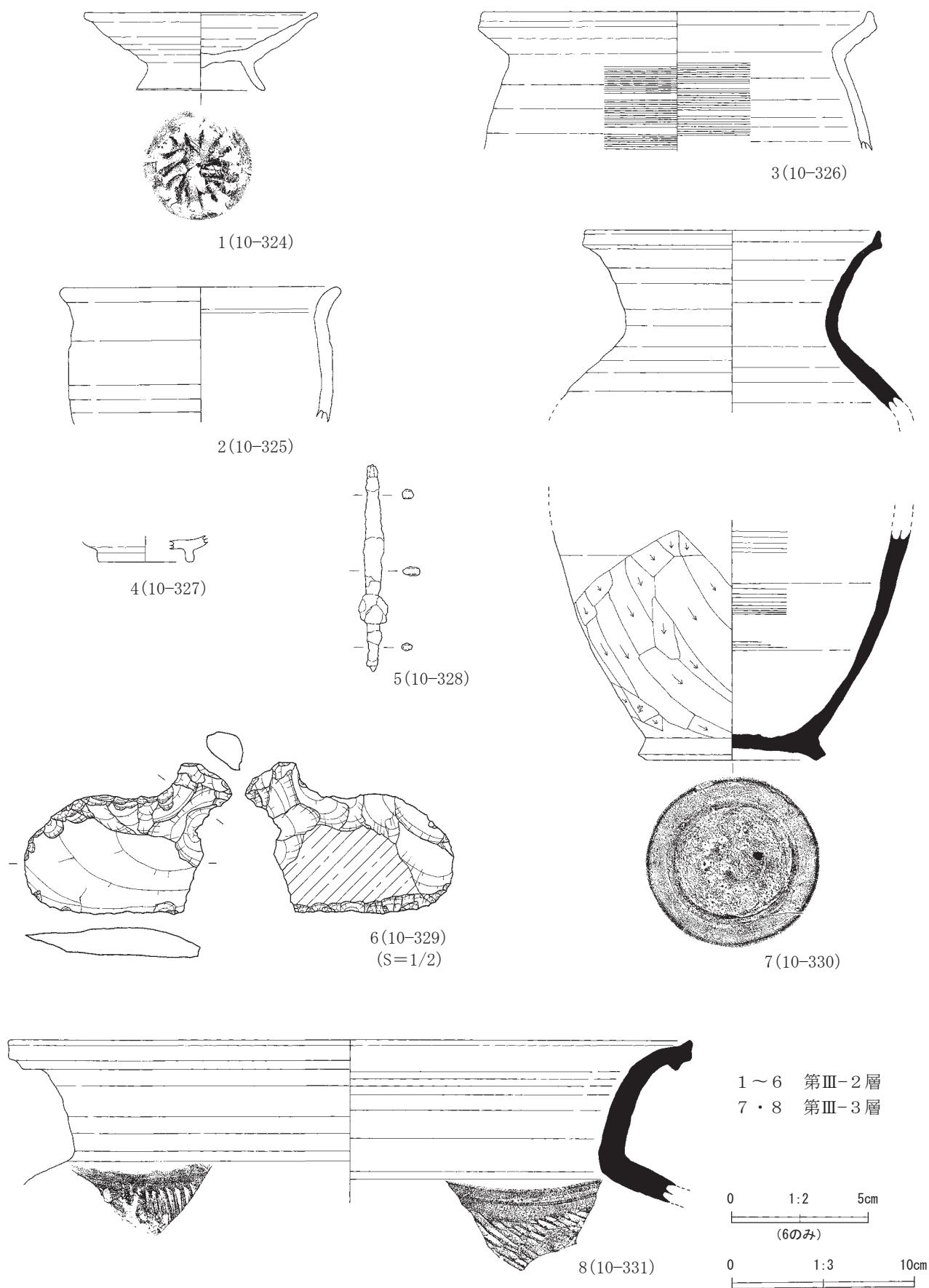
瓦（第32図2）：一枚作りの平瓦で、凸面に縄目の叩き痕、凹面に布目圧痕が認められる。糸切り痕が確認され、広端部を上にした場合、糸切り方向は左上から右下である。灰色、硬質、焼成良好である。

第VI層 出土遺物（第32図3～9、図版20）

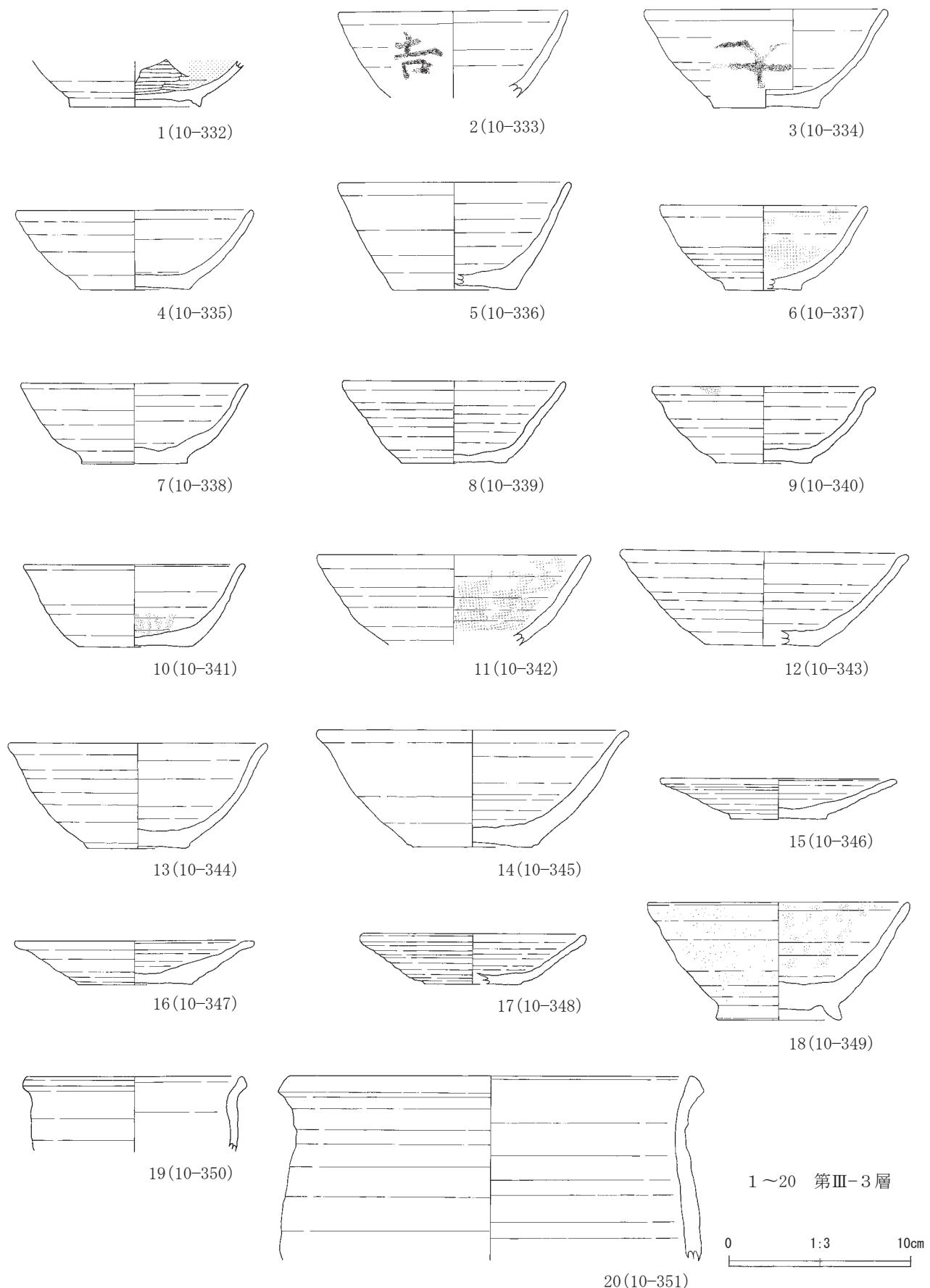
須恵器（第32図3～7）：3～6は坏である。3はヘラ切り後、軽いナデ調整を施す。4は糸切り無調整である。5は糸切り後、周縁部にケズリ調整を施す。6は高台坏の底部破片である。7は蓋で、天井部に屈曲がみられるが、つまみ部は欠損している。



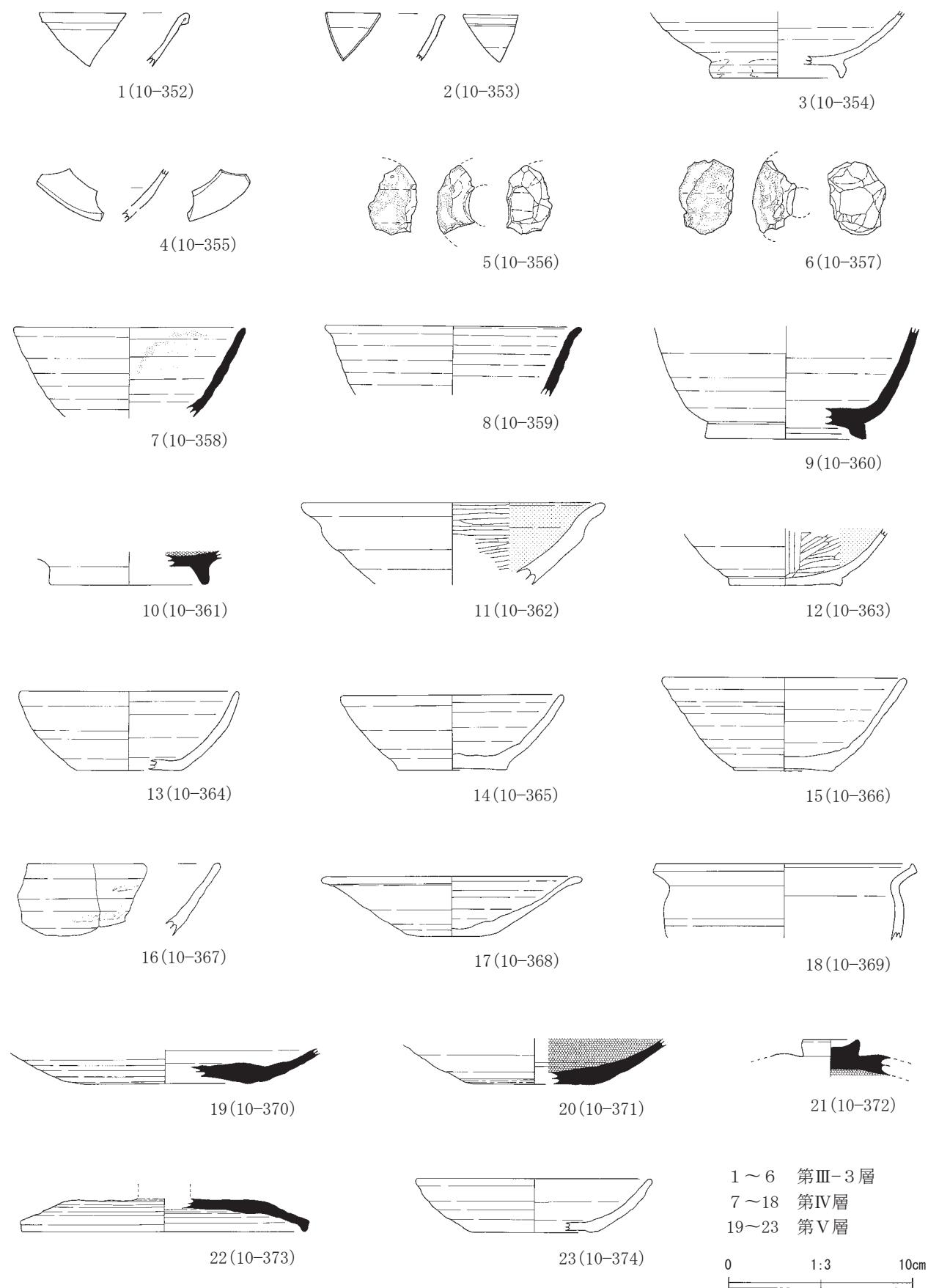
第28図 第I~III-2層 出土遺物



第29図 第III-2・III-3層 出土遺物



第30図 第III-3層 出土遺物



第31図 第III-3～V層 出土遺物

赤褐色土器（第32図8・9）：8は壺で体部下半にケズリ調整がみられる。いわゆる「赤褐色土器壺B」である。9は台付壺である。台部貼付後ナデ調整を施す。

第VII層 出土遺物（第32図10、図版20）

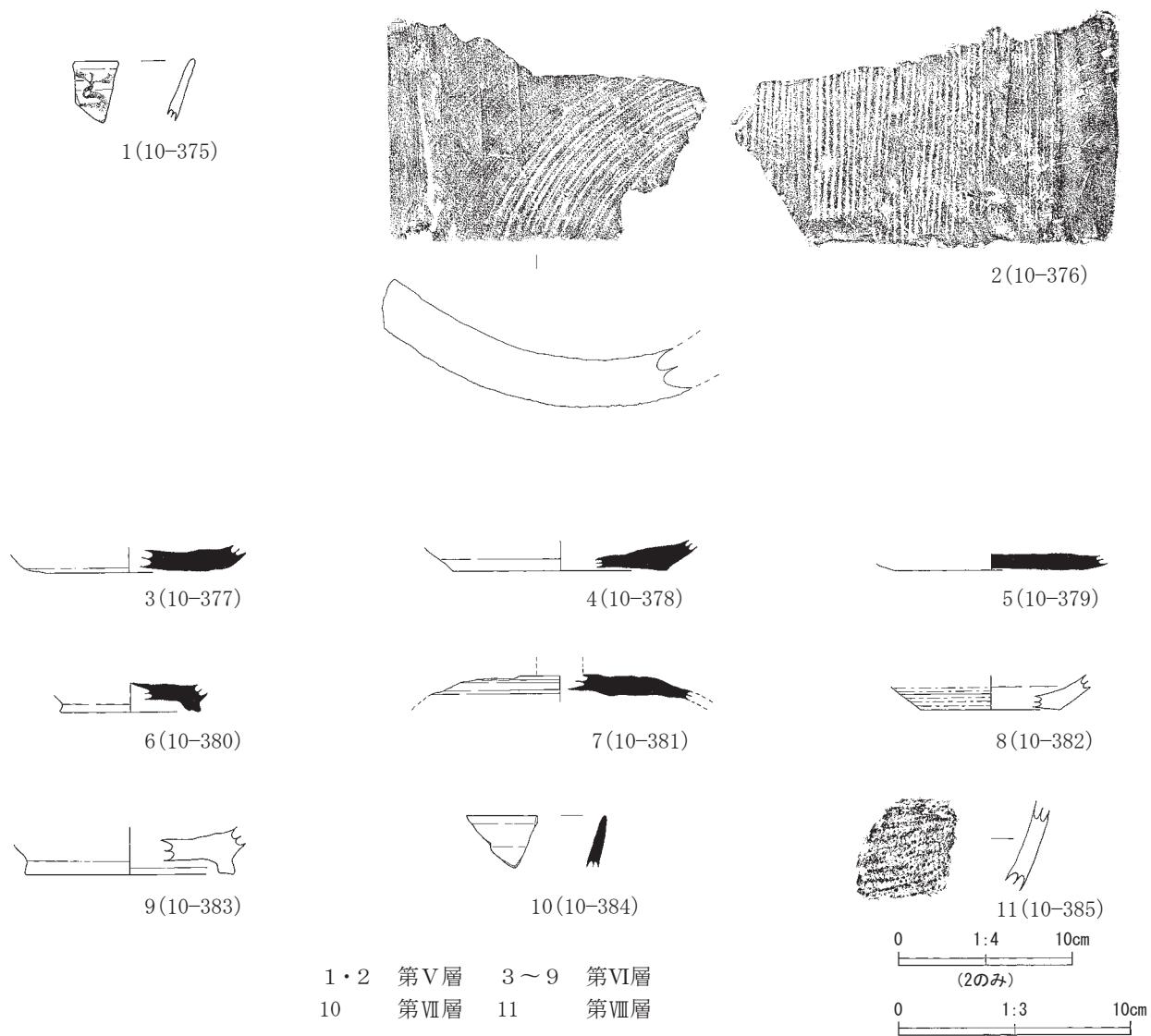
須恵器（第32図10）：壺の口縁部破片である。

第VIII層 出土遺物（第32図11、図版20）

縄文土器（第32図11）：縄文原体L Rの深鉢形土器の体部破片である。

その他製鉄関連遺物（表8、図版20）

各基本層序や各層検出の遺構内から鉄滓が出土している（表8）。第Ⅲ層～第VII層で出土しており、出土料は、第Ⅲ層で19点（1,112.5 g）、第Ⅳ層と第Ⅴ層面検出遺構内で12点（1,475.3 g）、第Ⅵ層および第Ⅶ層面検出遺構内で5点（307.3 g）、第Ⅷ層面検出遺構内で1点（15.1 g）、第VII層で1点（9.5 g）となっている。いずれも鍛冶滓、椀形鍛冶滓である。これらは調査地周辺における鍛冶関連の生産活動により生じた鉄滓が本調査区に混じったものと考えられる。第V層で出土量が増え、第Ⅲ・Ⅳ層で出土量が著しく増えている。これは、周辺の鍛冶関連生産活動量の時期的変遷が反映されているものと考えられる。



第32図 第V～VII層 出土遺物

表3 第107次調査地検出遺構一覧(1)

遺構No.	図面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備考
SA2370	第7・8図	III-2	古代		東西2間(西から2.0m+1.9m)。西で21°北に振れる。柱掘り方直径30~40cmの円形。深さ30~40cm。柱痕跡不明。
SA2371	第7・8図	III-2	古代		東西2間(西から1.2m+2.0m)。西で19°北に振れる。柱掘り方直径40~50cmの円形。深さ20~30cm。柱痕跡不明。
SA2372	第7・8図	III-1・2	古代		東西6間(西から1.0m+1.1m+1.0m+0.9m+0.9m+1.1m)。西で21°北に振れる。柱掘り方直径35~60cmの円形。深さ15~35cm。柱痕跡不明。
SA2373	第7・8図	III-2	古代	SD2376→	東西2間(西から2.35m+2.3m)。西で2°北に振れる。柱掘り方30~50cmの円形。深さ30~55cm。柱痕跡不明。
SD2374	第7図	III-2	古代	→SD2377・SK2383・SK2385	幅35~50cm、深さ10~15cm、長さ13m以上。東西方向。断面皿状ないしU字形。西で10~16°北に振れる。SX2396道路遺構の北側側溝。
SD2375A	第7図	III-1・2	古代		幅100cm、深さ40~50cm、長さ3m以上。東西方向。断面V字形。西で10°北に振れる。SX2396道路遺構の南側側溝。
SD2375B	第7図	III-2	古代		幅70cm、深さ40cm、長さ2.5m以上。東西方向。断面V字形。西で25°北に振れる。SX2396道路遺構の南側側溝。
SD2375C	第7図	III-2	古代		幅60cm、深さ20cm、長さ2.0m以上。東西方向。西で10°北に振れる。SX2396道路遺構の南側側溝。
SD2375D	第7図	III-2	古代		幅110cm、深さ25cm、長さ3.5m以上。東西方向。断面皿状。西で7°北に振れる。SX2396道路遺構の南側側溝。
SD2376	第7図	III-1・2	古代	→SA2373	幅40cm、深さ25cm、長さ6m以上。東西方向。断面U字形。西で27°北に振れる。
SD2377	第7図	III-2	古代	SD2374→	幅100cm、深さ20cm、長さ4m以上。南北方向。断面皿状。北で12°東に振れる。
SI2378	第10図	III-2	古代		一辺2.8m以上の方形。カマドは南側に設置されたと考えられるが、破壊されている。壁高は約20cm。南壁は西で6°北に振れる。床面から紡錘車が直立した状態で出土。
SI2379A	第10図	III-2	古代	SI2379B→	一辺3m以上の方形。カマドの有無は不明。壁高は25~30cm。東壁は北で25°東に振れる。
SI2379B	第10図	III-2	古代	→SI2379A	一辺3m以上の方形。カマドの有無は不明。壁高は約10cm。東壁は北で18°東に振れる。上部は削平を受けている。
SK2380	第12図	III-2	古代		直径40cm、深さ10cm、円形。
SK2381	第12図	III-2	古代		直径35cm、深さ10cm、円形。
SK2382	第12図	III-2	古代		長軸50cm、短軸30cm、深さ20cm、楕円形。
SK2383	第12図	III-2	古代	SD2374→	長軸110cm、短軸50cm、深さ10cm、楕円形。
SK2384	第12図	III-2	古代		長軸200cm、短軸150cm以上、深さ20~25cm、隅丸方形。
SK2385	第12図	III-2	古代	SD2374→	直径40cm、深さ10cm、円形。
SK2386	第12図	III-2	古代		長軸80cm以上、短軸60cm、深さ10cm。楕円形。
SK2387	第12図	III-2	古代		直径40cm、深さ50cm、円形。
SK2388	第12図	III-2	古代		直径30cm、深さ20cm、円形。
SK2389	第12図	III-2	古代		直径40cm、深さ25cm、円形。
SK2390	第12図	III-2	古代		長軸50cm、短軸30cm、深さ40cm、楕円形。
SK2391	第12図	III-1	古代		直径40cm、深さ30cm、円形。
SK2392	第12図	III-2	古代		長軸220cm以上、短軸120cm、深さ10cm、不整形。
SK2393	第12図	III-2	古代		直径30cm、深さ30cm、円形。
SK2394	第12図	III-2	古代		長軸70cm、短軸50cm、深さ20cm、楕円形。
SK2395	第12図	III-2	古代		長軸80cm、短軸60cm以上、深さ20cm、楕円形。
SX2396	第7図	III-2	古代		道路幅6.0~6.5m。西で10~16°北に振れる。
SD2397	第14図	IV-1	古代	→SK2400・SK2401・SK2402	幅80~120cm、深さ10cm、長さ18m以上。東西方向。断面皿状。西で7~8°北に振れる。SX2404の北側側溝。
SD2398	第14図	IV-1	古代		幅120~130cm、深さ10~15cm、長さ19m以上。東西方向。断面皿状。西で8~9°北に振れる。SX2404の南側側溝。
SK2399	第15図	IV-1	古代		長軸100cm、短軸70cm、深さ5cm、楕円形。
SK2400	第15図	IV-1	古代	SD2397→	長軸100cm、短軸90cm、深さ10cm、不整形。
SK2401	第15図	IV-1	古代	SD2397→	長軸110cm、短軸60cm、深さ3cm、楕円形。
SK2402	第15図	IV-1	古代	SD2397→	長軸110cm、短軸100cm、深さ3cm、不整形。
SX2403	第14図	IV-1	古代		頂部幅5.0m以上、高さ40~50cm、長さ19.2m以上。特に幅1.7~2.0mの幅で盛土が見られる。
SX2404	第14図	IV-1	古代		道路幅8.5~9.0m。西で7~8°北に振れる。
SD2405A	第17図	V-2	古代	→SK2408	幅60cm、深さ10cm、長さ2.3m以上。東西方向。断面皿状。西で5°北に振れる。SX2416の北側側溝。
SD2405B	第17図	V-2	古代		幅40cm、深さ10cm、長さ1.7m以上。東西方向。断面皿状。西で5°北に振れる。SX2416の北側側溝。
SD2406A	第17図	V-2	古代		幅50cm、深さ10cm、長さ2.5m以上。東西方向。断面皿状。西で6°北に振れる。SX2416の南側側溝。
SD2406B	第17図	V-2	古代		幅50cm、深さ5cm、長さ2.0m以上。東西方向。断面皿状。西で6°北に振れる。SX2416の南側側溝。

表4 第107次調査地検出遺構一覧(2)

遺構No.	図面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備考
SK2407	第18図	V-2	古代		直径40cm、深さ10cm、円形。
SK2408	第18図	V-2	古代	SD2405A→	長軸60cm、短軸30cm、深さ20cm、楕円形。
SK2409	第18図	V-2	古代		直径50cm、深さ10cm、円形。
SK2410	第18図	V-2	古代		長軸80cm、短軸60cm、深さ12cm、楕円形。
SK2411	第18図	V-2	古代		長軸70cm、短軸60cm、深さ18cm、楕円形。
SK2412	第18図	V-2	古代	SK2413→	直径40cm、深さ5cm、円形。
SK2413	第18図	V-2	古代	→SK2412	長軸300cm、短軸180cm、深さ20cm。平面形不明。埋土に炭化物を多く含む。
SK2414	第18図	V-2	古代		長軸100cm、短軸90cm、深さ10cm、不整円形。
SK2415	第18図	V-2	古代		長軸50cm、短軸40cm、深さ10cm、楕円形。
SX2416	第17図	V-2	古代		道路幅8.5～8.8m。西で5～6°北に振れる。
SB2417	第20図	VI-3	古代	→SD2420	梁間1間(2.6m)、桁行2間以上(1.3m+…).東西棟。桁行南側柱筋で、西で3°北に振れる。掘り方60～70cmの隅丸方形もしくは楕円形。柱痕跡直径約10cm(P1・2・3)。抜き取り痕あり。埋土に炭化物混じる。
SA2418	第20図	VI-3	古代		布掘り溝幅40cm、深さ20cm、長さ2.3m以上。東西方向。断面U字形。西で3°北に振れる。柱痕跡直径12cm。抜き取り痕あり。材木列壠跡。
SD2419A	第20図	VI-3	古代	→SD2420	幅40cm、深さ24cm、長さ2.6m以上。東西方向、断面U字形。西で4°北に振れる。SX2428A・Bの北側側溝。
SD2419B	第20図	VI-3	古代		幅40cm、長さ1m以上。東西方向。西で3°北に振れる。SX2428A・Bの北側側溝。
SD2420	第20図	VI-3	古代	SB2417・SD2419A→	幅30cm以上、深さ20cm～100cm、長さ7m以上。南北方向。真北方向。埋土に炭化物混じる。
SD2421	第20図	VI-1	古代		幅50～60cm、深さ5～12cm、長さ2.4m以上。東西方向。断面皿状。西で5°北に振れる。SX2428Aの南側側溝。
SD2422	第20図	VI-2	古代		幅20cm、深さ5～10cm、長さ2.4m以上。東西南方向。断面皿状。西で4°北に振れる。SX2428Bの南側側溝。
SK2423	第21図	VI-3	古代	→SK2424	長軸70cm、短軸50cm、深さ20cm、楕円形。
SK2424	第21図	VI-3	古代	SK2423→	直径50cm、深さ20cm、円形。
SK2425	第21図	VI-3	古代		直径40cm、深さ10cm、円形。
SK2426	第21図	VI-3	古代	SK2427→	直径30cm、深さ20cm、円形。
SK2427	第21図	VI-3	古代	→SK2426	長軸120cm、短軸90cm、深さ15cm、楕円形。
SX2428A	第20図	VI-1・3	古代	SX2428B→	SD2419A・B-SD2421間で7.5m。西で4～5°北に振れる。SD2419-SD2422間で8.6m、SD2419-SA2418間で8.9m。西で3～4°北に振れる。
SX2428B	第20図	VI-2・3	古代	→SX2428A	SD2419-SD2422間で8.6m、SD2419-SA2418間で8.9m。西で3～4°北に振れる。
SD2429	第24図	VII	古代		幅40cm、深さ10cm、長さ1.7m以上。東西方向。断面U字形。西で3°北に振れる。SX2437の北側側溝。
SD2430	第24図	VII	古代		幅40cm、深さ15cm、長さ1.8m以上。東西方向。断面皿状。西で2°北に振れる。SX2437の南側側溝。
SKP2431	第24図	VII	古代		南北100cm、東西80cm以上、深さ32cm、隅丸方形。抜き取り痕がみられる。柱痕跡は不明。
SK2432	第25図	VII	古代		長軸40cm、短軸20cm、深さ25cm、円形か。
SK2433	第25図	VII	古代		直径40cm、深さ20cm、円形。
SK2434	第25図	VII	古代		長軸100cm、短軸40cm以上、深さ40cm、楕円形か。
SK2435	第25図	VII	古代		長軸90cm、短軸80cm、深さ20cm、不整円形。
SK2436	第25図	VII	古代		直径70cm、深さ10cm、不整円形。
SX2437	第24図	VII	古代		幅12.1m。西で2～3°北に振れる。
SD2438	第26図	VII-2	古代		幅40cm、深さ18cm、長さ1.5m以上。東西方向。断面U字形。西で3°北に振れる。SX2446の北側側溝。
SD2439	第26図	VII-1	古代		幅45cm、深さ20cm、長さ1.6m以上。東西方向。断面U字形。西で2°北に振れる。SX2446の南側側溝。
SD2440	第26図	VII-2	古代		幅20cm、深さ10cm、長さ70cm、南北方向。断面U字形。北で38°西へ振れる。
SD2441	第26図	VII-2	古代		幅20cm以上、深さ20cm以上、長さ1.3m以上。南北方向。断面U字形。北で10°東に振れる。
SK2442	第27図	VII-2	古代		長軸40cm、短軸20cm以上、深さ10cm、円形か。
SK2443	第27図	VII-2	古代		長軸80cm以上、短軸30cm以上、深さ30cm、楕円形か。
SK2444	第27図	VII-2	古代		長軸60cm、短軸40cm、深さ14cm、楕円形。
SK2445	第27図	VII-1	古代		長軸50cm、短軸40cm、深さ5cm、楕円形か。
SX2446	第26図	VII-2	古代		幅12.2m、西で2～3°北に振れる。
SD2447	第26図	IX	古代		幅12cm、深さ28cm、長さ90cm以上。南北方向。断面U字形。北で19°東に振れる。
SD2448	第26図	IX	古代		幅20cm、深さ5cm、長さ30cm、南北方向。断面皿状。北で6°東に振れる。

II 第107次調査報告 遺構・遺物一覧表

表5 第107次調査地出土遺物属性表(1)

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 ・層位	グリッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
10-245	第9図1	図版13-1	SD2375A埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	-	5.6	-	底部回転糸切り無調整、横方向のミガキ。
10-246	第9図2	図版13-2	SD2375B埋土	Ⅲ層	土師器	台付壺	-	高台径 7.2	-	底部回転糸切り。
10-247	第9図3	図版13-3	SD2375B埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	-	5.0	-	底部回転糸切り無調整。
10-248	第9図4	図版13-4	SD2375D埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	-	6.0	-	底部回転糸切り無調整。
10-249	第9図5	図版13-5	SD2376埋土	Ⅲ層	土師器	台付皿	11.4	高台径 6.7	3.5	底部回転糸切り無調整。
10-250	第9図6	図版13-6	SD2376埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	-	4.8	-	底部回転糸切り無調整。
10-251	第9図7	図版13-7	SD2376埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	-	4.6	-	底部回転糸切り無調整。
10-252	第9図8	図版13-8	SD2377埋土	Ⅲ層	須恵器	大甕	-	-	-	内面平行当て具痕、外面平行叩き痕。
10-253	第9図9	図版13-9	SD2377埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	-	4.1	-	底部回転糸切り無調整。
10-254	第9図10	図版13-10	SD2377埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	-	6.2	-	底部回転糸切り無調整。
10-255	第11図1	図版13-11	SI2378埋土 床面直上	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	11.8	5.0	4.0	底部回転糸切り無調整。
10-256	第11図2	図版13-12	SI2378埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	台付壺	13.4	7.4	5.9	底部回転糸切り。内外面に煤状炭化物付着、被熱している。
10-257	第11図3	図版13-13	SI2378埋土 床面直上	Ⅲ層	鉄製品	紡錘車	-	-	-	紡輪径5.5cm、紡茎長16.5cm。
10-258	第11図4	図版13-14	SI2379A埋土	Ⅲ層	須恵器	壺	-	-	-	
10-259	第11図5	図版13-15	SI2379A埋土	Ⅲ層	須恵器	甕	-	高台径 13.0	-	
10-260	第11図6	図版13-16	SI2379A埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	10.6	5.0	4.1	底部回転糸切り無調整。
10-261	第11図7	図版13-17	SI2379A埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	-	5.9	-	底部回転糸切り無調整、柱状高台。
10-262	第11図8	図版13-18	SI2379A埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	-	4.2	-	底部回転糸切り無調整。底部切り離し雑。
10-263	第11図9	図版13-19	SI2379A埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	皿	10.3	5.1	1.9	底部回転糸切り無調整。
10-264	第11図10	図版13-20	SI2379A埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	皿	10.4	4.8	2.1	底部回転糸切り無調整。
10-265	第11図11	図版13-21	SI2379A埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	台付皿	-	高台径 5.0	-	底部回転糸切り。
10-266	第11図12	図版13-22	SI2379B埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	-	5.2	-	底部回転糸切り無調整。
10-267	第13図1	図版13-23	SK2384埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	12.0	4.5	4.2	底部回転糸切り無調整。
10-268	第13図2	図版13-24	SK2386埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	14.0	6.0	3.8	底部回転糸切り無調整。
10-269	第13図3	図版13-25	SK2389埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	-	4.4	-	底部回転糸切り無調整。
10-270	第13図4	図版14-1	SK2391埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	-	5.2	-	底部回転糸切り無調整。
10-271	第13図5	図版14-2	SK2392埋土	Ⅲ層	赤褐色土器	壺	13.2	6.2	5.2	底部回転糸切り無調整。底部切り離し雑。内外面煤状炭化物付着、被熱している。
10-272	第16図1	図版14-3	SD2397埋土	IV層	赤褐色土器	壺	-	4.8	-	底部回転糸切り無調整。
10-273	第16図2	図版14-4	SD2397埋土	IV層	赤褐色土器	壺	-	6.6	-	底部回転糸切り無調整。
10-274	第16図3	図版14-5	SD2397埋土	IV層	赤褐色土器	壺	-	6.0	-	底部回転糸切り無調整。
10-275	第16図4	図版14-6	SD2397埋土	IV層	赤褐色土器	小型甕	-	7.8	-	底部回転糸切り。
10-276	第16図5	図版14-7	SD2398埋土	IV層	土師器	台付壺	-	7.4	-	底部外面墨痕あり。
10-277	第16図6	図版14-8	SD2398埋土	IV層	赤褐色土器	壺	-	5.2	-	底部回転糸切り無調整。
10-278	第16図7	図版14-9	SK2399埋土	IV層	土製品	フイゴ羽口	-	-	-	
10-279	第16図8	図版14-10	SK2400埋土	IV層	赤褐色土器	壺	14.6	6.0	5.0	底部回転糸切り無調整、内外面煤状炭化物付着。
10-280	第16図9	図版14-11	SX2403盛土	IV層	須恵器	壺	12.9	5.6	5.3	底部回転糸切り無調整。
10-281	第16図10	図版14-12	SX2403盛土	IV層	赤褐色土器	壺	12.6	5.0	4.1	底部回転糸切り無調整、内面に煤状炭化物付着。
10-282	第16図11	図版14-13	SX2403盛土	IV層	赤褐色土器	台付壺	13.2	高台径 7.4	5.3	底部外面に浅く短い菊花状の工具痕がみられる。
10-283	第16図12	図版14-14	SX2403盛土	IV層	赤褐色土器	鍋	26.0	-	-	内面に煤状炭化物付着。
10-284	第19図1	図版14-15	SD2405A埋土	V層	須恵器	蓋	14.6	-	-	転用硯。
10-285	第19図2	図版14-16	SD2405A埋土	V層	土師器	壺	-	7.8	-	底部回転糸切り無調整、内面ミガキ調整。
10-286	第19図3	図版14-17	SD2405A埋土	V層	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縦目叩き痕、凹面布目圧痕。黄灰色。硬質。焼成良好。糸切り痕不明。
10-287	第19図4	図版14-18	SD2405B埋土	V層	須恵器	壺	13.6	9.0	4.2	底部回転糸切り無調整。やや上げ底。
10-288	第19図5	図版14-19	SD2406A埋土	V層	須恵器	壺	-	7.4	-	底部回転糸切り無調整。
10-289	第19図6	図版14-20	SK2407埋土	V層	赤褐色土器	台付壺	-	高台径 7.0	-	底部回転糸切り。
10-290	第19図7	図版15-1	SK2411埋土	V層	赤褐色土器	壺	12.4	6.0	4.5	摩滅している。
10-291	第19図8	図版15-2	SK2413埋土	V層	須恵器	壺	13.0	5.6	4.7	底部回転糸切り無調整。
10-292	第19図9	図版15-3	SK2413埋土	V層	須恵器	壺	-	5.5	-	底部回転糸切り無調整。内面煤状炭化物付着。
10-293	第19図10	図版15-4	SK2413埋土	V層	赤褐色土器	壺	-	5.9	-	底部回転糸切り無調整。
10-294	第19図11	図版15-5	SK2413埋土	V層	赤褐色土器	鍋	35.0	-	-	体部下半ケズリ調整。

表6 第107次調査地出土遺物属性表(2)

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 ・層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
10-295	第19図12	図版15-6	SK2413埋土	V層	綠釉陶器	蓋	-	-	-	
10-296	第22図1	図版15-7	SB2417 P1掘り方埋土	VI層	赤褐色土器	壺	-	8.4	-	底部回転糸切り無調整。
10-297	第22図2	図版15-8	SB2417 P1掘り方埋土	VI層	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目叩き痕、凹面ナデ調整。灰色。硬質。焼成堅緻。糸切り痕不明。
10-298	第22図3	図版15-9	SD2420埋土	VI層	須恵器	蓋	-	-	-	天井部ケズリ調整。
10-299	第22図4	図版15-10	SD2420埋土	VI層	土師器	台付壺	-	高台径 5.5	-	内外面黒色処理、内面ミガキ調整。
10-300	第22図5	図版15-11	SD2420埋土	VI層	赤褐色土器	壺	-	6.0	-	摩滅している。
10-301	第22図6	図版15-12	SD2421埋土	VI層	須恵器	壺	-	9.6	-	体部下半ケズリ調整。底部回転ヘラ切り。
10-302	第22図7	図版15-13	SD2421埋土	VI層	赤褐色土器	台付壺	-	高台径 6.4	-	体部下半ケズリ調整。
10-303	第22図8	図版15-14	SD2421埋土	VI層	鉄製品	刀子	-	-	-	茎部欠損。
10-304	第22図9	図版15-15	SK2426埋土	VI層	須恵器	台付壺	-	高台径 8.2	-	
10-305	第23図1	図版15-16	SD2430埋土	VII層	須恵器	台付壺	12.2	高台径 7.2	4.7	底部ヘラ切り後撫で調整。内面に煤状炭化物。
10-306	第28図1	図版16-1	I層	-	磁器	皿	13.4	6.4	3.3	染付、肥前系磁器、蛇ノ目凹形高台、肥前V期。
10-307	第28図2	図版16-2	攪乱	NP33	須恵器	蓋	19.0	-	4.4	天井部内面転用硯。
10-308	第28図3	図版16-3	攪乱	NT34	綠釉陶器	碗	-	-	-	
10-309	第28図4	図版16-4	攪乱	NO33	磁器	碗	8.6	高台径 3.7	4.5	染付、肥前系磁器、肥前IV～V期。見込みに草花文。
10-310	第28図5	図版16-5	攪乱	NP33	錢貨	天禧通寶	-	-	-	模鋳錢、北宋、初鑄1017年。外縁外径23.3mm、内郭内径6.0mm、外縁厚1.0mm、重量2.9g。
10-311	第28図6	図版16-6	II層	NO36	土師器	台付壺	-	高台径 7.0	-	底部回転糸切り、内面ミガキ調整。
10-312	第28図7	図版16-7	II層	NP37	赤褐色土器	壺	-	6.5	-	柱状高台、底部回転糸切り無調整。
10-313	第28図8	図版16-8	II層	NS39	赤褐色土器	壺	-	5.5	-	柱状高台、底部回転糸切り無調整。
10-314	第28図9	図版16-9	II層	NO39	赤褐色土器	壺	-	4.0	-	柱状高台、底部回転糸切り無調整。
10-315	第28図10	図版16-10	II層	NS38	赤褐色土器	台付皿	-	高台径 6.0	-	足高高台皿。底部回転糸切り無調整。
10-316	第28図11	図版16-11	II層	NQ33	陶器	皿	-	4.6	-	肥前系陶器。胎土目積み。外面高台露胎。内面灰釉。肥前I期。
10-317	第28図12	図版16-12	II層	NP35	陶器	皿	-	3.3	-	肥前系陶器。胎土目積み。外面高台露胎。内面灰釉。肥前I期。
10-318	第28図13	図版16-13	II層	NP39	磁器	皿	-	5.0	-	染付、肥前系磁器。蛇ノ目釉剥ぎ。内面二重格子文。肥前IV期。
10-319	第28図14	図版16-14	III-2層	OA34	土師器	壺	-	5.4	-	柱状高台、底部回転糸切り無調整。
10-320	第28図15	図版16-15	III-2層	NQ34	赤褐色土器	壺	13.0	5.5	4.5	底部回転糸切り無調整。
10-321	第28図16	図版16-16	III-2層	OA34	赤褐色土器	壺	12.6	5.0	4.6	底部回転糸切り無調整。
10-322	第28図17	図版16-17	III-2層	NS39	赤褐色土器	壺	-	-	-	口縁部破片。外面に「上」の墨書。
10-323	第28図18	図版16-18	III-2層	OA38	赤褐色土器	皿	12.8	5.5	3.0	底部回転糸切り無調整。
10-324	第29図1	図版16-19	III-2層	NQ37	赤褐色土器	台付皿	12.8	高台径 7.0	4.3	底部に菊花状の工具痕がみられる。被熱しており、内部は煤状付着物がみられる。足高高台皿。
10-325	第29図2	図版17-1	III-2層	NT38	赤褐色土器	甕	-	15.0	-	小型甕。
10-326	第29図3	図版17-2	III-2層	NS31	赤褐色土器	甕	-	21.2	-	拡張トレンチ1出土。大型甕。内外面カキ目調整。
10-327	第29図4	図版17-3	III-2層	NT38	灰釉陶器	碗	-	高台径 5.2	-	猿投窓。
10-328	第29図5	図版17-4	III-2層	NS38	鉄製品	鉄鎌	-	-	-	長さ111.4mm、幅16.2mm、厚さ7.3mm。頭部が欠損している。
10-329	第29図6	図版17-5	III-2層	NT37	石器	石匙	-	-	-	長さ55.4mm、幅76.1mm、厚さ15.4mm、46.7g、珪質岩製。
10-330	第29図7	図版17-6	III-3層	NT37	須恵器	長頸壺	16.0	9.2	(16.0)	底部破片のみIII-2層NT33出土。外面体部下半ナタケズリ調整、内部体部下半カキ目調整、底部砂底風。
10-331	第29図8	図版17-7	III-3層	NT36	須恵器	大甕	37.4	-	-	外面平行の叩き痕、内面平行の當て具痕。
10-332	第30図1	図版17-8	III-3層	NT37	土師器	台付壺	-	7.2	-	底部回転糸切り、内面ミガキ調整。
10-333	第30図2	図版17-9	III-3層	NT36	赤褐色土器	壺	12.6	-	-	体部外面「吉」の墨書。
10-334	第30図3	図版18-1	III-3層	NT37	赤褐色土器	壺	13.2	5.8	5.4	底部回転糸切り無調整。体部外面に「大」の墨書。
10-335	第30図4	図版18-2	III-3層	NT36	赤褐色土器	壺	12.9	6.0	4.4	底部回転糸切り無調整。
10-336	第30図5	図版18-3	III-3層	OA37	赤褐色土器	壺	12.6	6.8	5.9	底部回転糸切り無調整。被熱している。
10-337	第30図6	図版18-4	III-3層	NT39	赤褐色土器	壺	11.4	4.2	4.5	底部回転糸切り無調整。内面に漆付着。

II 第107次調査報告 遺構・遺物一覧表

表7 第107次調査地出土遺物属性表(3)

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 ・層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
10-338	第30図7	図版18-5	III-3層	NT37	赤褐色土器	壺	12.3	5.8	4.4	底部回転糸切り無調整。
10-339	第30図8	図版18-6	III-3層	NT37	赤褐色土器	壺	12.1	5.8	4.5	底部回転糸切り無調整。
10-340	第30図9	図版18-7	III-3層	NT37	赤褐色土器	壺	12.2	5.2	4.2	底部回転糸切り無調整。
10-341	第30図10	図版18-8	III-3層	OA36	赤褐色土器	壺	12.2	6.2	4.5	底部回転糸切り無調整。
10-342	第30図11	図版18-9	III-3層	OA36	赤褐色土器	壺	-	15.0	-	内面に漆付着。
10-343	第30図12	図版18-10	III-3層	NT37	赤褐色土器	壺	15.6	6.2	5.1	底部回転糸切り無調整。
10-344	第30図13	図版18-11	III-3層	NT37	赤褐色土器	壺	14.2	5.7	5.8	底部回転糸切り無調整。
10-345	第30図14	図版18-12	III-3層	NT39	赤褐色土器	壺	19.0	7.2	6.4	底部回転糸切り無調整。内面煤状炭化物付着。
10-346	第30図15	図版18-13	III-3層	NT37	赤褐色土器	皿	13.0	5.3	2.3	底部回転糸切り無調整。
10-347	第30図16	図版18-14	III-3層	NT36	赤褐色土器	皿	13.0	6.3	2.4	底部回転糸切り無調整。
10-348	第30図17	図版18-15	III-3層	NT37	赤褐色土器	皿	12.1	5.4	2.8	底部回転糸切り無調整。
10-349	第30図18	図版18-16	III-3層	NT36	赤褐色土器	台付壺	14.4	高台径 6.7	6.5	底部回転糸切り無調整。内外面煤状炭化物付着。
10-350	第30図19	図版18-17	III-3層	OA37	赤褐色土器	甕	12.0	-	-	内外面に煤状炭化物付着物。小型甕。
10-351	第30図20	図版19-1	III-3層	OA37	赤褐色土器	甕	22.0	-	-	外面に煤状炭化物付着物。大型甕。
10-352	第31図1	図版19-2	III-3層	NT36	白磁	碗	-	-	-	太宰府編年 I-1類。
10-353	第31図2	図版19-3	III-3層	NT37	灰釉陶器	碗	-	-	-	猿投窯。K-90号窯式かO-53窯式。
10-354	第31図3	図版19-4	III-3層	NT37	灰釉陶器	台付碗	-	高台径 7.0	-	高台部および底部無釉。猿投窯。K-90号窯式。
10-355	第31図4	図版19-5	III-3層	OA36	灰釉陶器	碗	-	-	-	猿投窯。K-90号窯式。
10-356	第31図5	図版19-6	III-3層	NT36	土製品	フイゴ羽口	-	-	-	
10-357	第31図6	図版19-7	III-3層	OA37	土製品	フイゴ羽口	-	-	-	
10-358	第31図7	図版19-8	IV層	NQ36	須恵器	壺	12.6	-	-	内面煤状炭化物付着。
10-359	第31図8	図版19-9	IV層	NS34	須恵器	壺	14.0	-	-	
10-360	第31図9	図版19-10	IV層	NP33	須恵器	台付壺	-	高台径 8.4	-	
10-361	第31図10	図版19-11	IV層	NS34	須恵器	台付壺	-	高台径 8.4	-	底部内面転用硯。
10-362	第31図11	図版19-12	IV層	NQ37	土師器	碗	16.4	-	-	内面ミガキ調整。内面煤状炭化物付着。
10-363	第31図12	図版19-13	IV層	NT36	土師器	台付壺	-	高台径 6.0	-	底部回転糸切り。内面ミガキ調整。
10-364	第31図13	図版19-14	IV層	NQ36	赤褐色土器	壺	11.7	5.6	4.3	底部回転糸切り無調整。
10-365	第31図14	図版19-15	IV層	NT34	赤褐色土器	壺	11.8	5.9	4.1	底部回転糸切り無調整。
10-366	第31図15	図版19-16	IV層	NT34	赤褐色土器	壺	13.0	5.1	5.1	底部回転糸切り無調整。
10-367	第31図16	図版19-17	IV層	OA33	赤褐色土器	壺	-	-	-	体部外面に「五」カの墨書。
10-368	第31図17	図版19-18	IV層	NT36	赤褐色土器	皿	13.6	3.8	3.3	底部回転糸切り無調整。
10-369	第31図18	図版19-19	IV層	NQ39	赤褐色土器	甕	14.0	-	-	小型甕。口縁部内面に煤状炭化物付着。
10-370	第31図19	図版19-20	V層	NS34	須恵器	壺	-	8.8	-	底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調整。焼成不良。
10-371	第31図20	図版19-21	V層	NS34	須恵器	壺	-	6.8	-	底部回転糸切り後、底部立ち上がり部分にケズリ調整。内面転用硯。
10-372	第31図21	図版20-1	V層	NS34	須恵器	蓋	-	-	-	扁平なつまみ。転用硯。内面天井部に墨付着。
10-373	第31図22	図版20-2	V層	NT36	須恵器	蓋	15.4	-	-	天井部に屈曲部をもつ。つまみ部欠損。
10-374	第31図23	図版20-3	V層	NS34	赤褐色土器	壺	12.6	7.0	2.9	底部回転糸切り無調整。
10-375	第32図1	図版20-4	V層	OA34	赤褐色土器	壺	-	-	-	外面に墨書あり。判読不明。
10-376	第32図2	図版20-5	V層	NT36	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縦目叩き痕。凹面布目圧痕。糸切り痕左上から右下。灰色。硬質。焼成良好。
10-377	第32図3	図版20-6	VI層	NQ34	須恵器	壺	-	8.8	-	底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調整。
10-378	第32図4	図版20-7	VI層	NQ33	須恵器	壺	-	9.2	-	底部回転糸切り無調整。
10-379	第32図5	図版20-8	VI層	NP33	須恵器	壺	-	8.8	-	底部回転糸切り後、周縁部ケズリ調整。
10-380	第32図6	図版20-9	VI層	NQ33	須恵器	高台壺	-	高台径 6.0	-	底部回転ヘラ切り後、台部貼付。
10-381	第32図7	図版20-10	VI層	NP33	須恵器	蓋	-	-	-	天井部屈曲。つまみ部欠損。
10-382	第32図8	図版20-11	VI層	NQ33	赤褐色土器	壺	-	6.0	-	体部下半ケズリ調整。壺B。
10-383	第32図9	図版20-12	VI層	NQ33	赤褐色土器	台付壺	-	高台径 9.0	-	底部回転ヘラ切り後、台部貼付。台部内側撫で調整。
10-384	第32図10	図版20-13	VII層	NT33	須恵器	壺	-	-	-	
10-385	第32図11	図版20-14	VII層	NQ33	繩文土器	深鉢	-	-	-	粗製深鉢。繩文原体L R。

表8 第107次調査地出土鉄滓一覧表

点数

	鍛冶滓	楕形鍛冶滓	分類不明	合計
Ⅲ層	4	14	1	19
Ⅳ層	2	9		11
Ⅳ層遺構内 (SD2397)		1		1
Ⅳ層小計	2	10		12
V層	2	2		4
V層遺構内 (SK2408)		1		1
V層小計	2	3		5
VI層遺構内 (SD2420)	1			1
VII層	1			1
搅乱		1		1
合計	10	28	1	39

重量(g)

	鍛冶滓	楕形鍛冶滓	分類不明	合計
Ⅲ層	74.5	976.7	61.3	1,112.5
Ⅳ層	26.1	1,379.3		1,405.4
Ⅳ層遺構内 (SD2397)		69.9		69.9
Ⅳ層小計	26.1	1,449.2		1,475.3
V層	51.4	237.1		288.5
V層遺構内 (SK2408)		18.8		18.8
V層小計	51.4	255.9		307.3
VI層遺構内 (SD2420)	15.1			15.1
VII層	9.5			9.5
搅乱		165.7		165.7
合計	176.6	2,847.5	61.3	3,085.4

III 考 察

第107次調査地は大畠地区東部、政庁の東約220mの地点で、城外東大路上に位置する地点である。城外東大路の遺構の遺存状況の把握と環境整備事業に向けた基礎データを得るために、調査を実施した。

調査の結果、柱列跡4条、材木塀跡1条、掘立柱建物跡1棟、溝跡20条、竪穴建物跡2軒、柱掘り方1基、土坑43基、土手状遺構1基、道路遺構6面が検出された。各遺構は、第Ⅲ～Ⅸ層の各上面で検出されている。各遺構面でみると、第Ⅲ層面では、柱列跡4条、溝4条、竪穴建物跡2軒、土坑16基、道路遺構1面が検出された。第Ⅳ層面では、溝跡2条、土坑4基、土手状遺構1基、道路遺構1面が検出された。第Ⅴ層面では、溝跡2条、土坑9基、道路遺構1面が検出された。第Ⅵ層面では掘立柱建物跡1棟、材木塀跡1条、溝跡4条、土坑5基、道路遺構1面が検出された。第Ⅶ層面では溝跡2条、柱掘り方1基、土坑5基、道路遺構1面が検出された。第Ⅷ層面では溝跡4条、土坑4基、道路遺構1面が検出された。第Ⅸ層面の地山飛砂層では溝跡2条が検出された。

これらの遺構については、出土遺物や検出層位、重複関係などから、年代や新旧関係の把握が可能である。遺物包含層や検出遺構の年代について各調査区で検討を行った上で、全体の利用状況と変遷について以下にまとめることとする。

1 各遺物包含層の年代について

層序については、第Ⅱ章3の基本層序で述べた。各層出土の年代比定資料をみていく。第Ⅰ層は18世紀末～19世紀前半に位置づけられる肥前系磁器（第28図1）が出土している（註1、以下、遺物の年代比定における「～に位置づけられる」の表記は、「～の」と表記する）。第Ⅱ層は18世紀代の肥前系磁器（第28図13）が出土している。第Ⅰ・Ⅱ層は、江戸時代以降の造成土であると考えられる。

第Ⅲ層以下は近世陶磁器・現代の遺物を含まず古代以前の遺物しか出土しないことから、古代以前の整地層であると考えられる。遺物が一定量出土するのは、第Ⅲ-2層と第Ⅲ-3層である。第Ⅲ-3層は北西調査区のみに堆積し、第Ⅲ-2層と互層となっており、基本的には年代差はないものと考えられる。第Ⅲ-2層から、土師器では柱状高台風の壺（第28図14）が出土し、赤褐色土器では底径が5cm台まで縮小した壺A（第28図15・16、註2）、皿（第28図18）、菊花状の工具痕がみられる台付皿（第29図1）、口唇部が厚ぼったい甕（第29図2・3）が出土している。こうした特徴は、秋田城土器編年の基準となるSG1031出土資料で言えば④・⑤層出土資料と類似しており、10世紀前葉の特徴を有する（註3）。また、第Ⅲ-3層においては、赤褐色土器で、底径が4～5cm台の壺A（第30図3～14）、皿（第30図15～17）、口唇部が厚ぼったい甕（第30図19・20）が出土しており、これも同様に10世紀前葉の特徴を有している。なお、この第Ⅲ層からは、灰釉陶器（第29図4、第31図2～4）が出土しており、いずれも猿投窯産と考えられる。これらはK90号窯式～O-53号窯式の範疇でとらえることができ、9世紀後半から10世紀前半に位置づけられる（註4）。また、第31図1は白磁の碗で、太宰府編年I-1類と考えられ、9世紀～10世紀第3四半期に位置づけられる（註5）。このような灰釉陶器や白磁の年代観は、上述の在地の土器の年代観と矛盾しない。

第Ⅳ層からは、椀形の須恵器壺（第31図7・8）、底径が5cm台の赤褐色土器壺A（第31図13～15）、赤褐色土器皿（第31図17）などが出土しており、9世紀第4四半期の特徴を有している。また、第Ⅳ-1・2層には炭化物が多く含む特徴がみられる。これは出土土器の年代と合わせて考えると元慶

の乱(878)の戦禍によるものと考えられ、調査地周辺における被害が甚大であったことがうかがわれる。

第V層からは、底部回転ヘラ切りの須恵器坏（第31図19）、底部立ち上がりにケズリ調整のある須恵器坏（第31図20）、須恵器蓋（第31図21・22）、扁平な赤褐色土器坏A（第31図23）が出土しており、9世紀第2～3四半期の特徴を有している。また、8世紀末～9世紀初頭以降の3-1群瓦（註6）も出土している（第32図2）。

第VI層からは、底部回転ヘラ切りの須恵器坏（第32図3）、底部回転糸切り後、周縁部にケズリ調整を施す須恵器坏（第32図5）、須恵器蓋（第32図7）、体部下半にケズリ調整のある赤褐色土器坏B（第32図8）が出土しており、8世紀末～9世紀第1四半期の特徴を有している。

第VII層からは須恵器坏の破片（第32図10）が出土しているが、詳細な年代決定を行うことはできない。

第VIII層からは縄文土器（第32図11）が出土した。第VIII層の下位は第IX層地山飛砂層であることから、第VIII層は秋田城創建期の整地層であると考えられる。

以上の出土遺物の年代についてまとめると、第III層は10世紀前葉、第IV層は9世紀第4四半期、第V層は9世紀第2～3四半期、第VI層は8世紀末～9世紀第1四半期のものが出土し、各整地層も同じ頃に堆積したものと考えられる。また、第VIII層は堆積状況から秋田城創建期である8世紀第2四半期である可能性が指摘できた。第VII層の年代比定資料は不明瞭ながら、前後の層位の堆積年代を考えると8世紀後半であると推定される。

2 各遺構の年代について

第III層面検出遺構では、SD2375A・SD2375B・SD2376・SD2377溝跡からは、底径が4～5cm台の赤褐色土器坏Aが出土している（第9図1・3・6・7・9）。これらは10世紀前葉のものと考えられる。赤褐色土器坏は9世紀第3四半期頃から大型と小型への二分化がみられ、10世紀代には顕著になっていく。SD2375D・SD2377溝跡出土の赤褐色土器は底径が6cm台の坏Aがみられるが（第9図4・10）、これらは大型のタイプの坏の底部破片であると考えられる。また、SD2376溝跡からは10世紀前葉の台坏皿が出土している。調査区北東隅で発見されたSI2378豊穴建物跡からは、10世紀前葉の赤褐色土器坏Aと台付坏が出土している（第11図1・2）。SI2379A豊穴建物跡からは、赤褐色土器で柱状高台の坏A（第11図7）、底部切り離しが雑な坏A（第11図8）、小型化した皿（第11図9・10）、高台部が発達しつつある台付皿（第11図11）が出土しており、10世紀中葉の特徴を有している。一方、SI2379A豊穴建物跡より古いSI2379B豊穴建物跡から出土した赤褐色土器坏には10世紀前葉の特徴がみられる。その他、SK2384・SK2386・SK2389・SK2391・SK2392土坑からは底径が4～6cmに縮小した10世紀前葉の赤褐色土器坏が出土している（第13図1～5）。以上のことから、第III層面検出遺構からは、10世紀前葉～中葉の遺物が出土しているといえる。

第IV層面では、SD2397・SD2398溝跡、SK2398土坑から底径が4～6cm台の赤褐色土器坏A（第16図1～3・6・8）が出土している。これらは底径が縮小化しているため9世紀第4四半期以降のものと考えられる。SX2403盛土からは楕円形の須恵器坏（第16図9）、底径5.0cmの赤褐色土器坏A（第16図10）、底部に浅く短い菊花状工具痕がみられる赤褐色土器台付坏（第16図11）、赤褐色土器鍋（第16図12）が出土している。これらの諸特徴は9世紀第4四半期のものと考えられる。以上のことから、第IV層面検出遺構からは、9世紀第4四半期、もしくはそれ以降の遺物が出土している。

第V層面では、SD2405A溝跡からは9世紀前半期までと考えられる須恵器蓋（第19図1）と8世紀末

III 考察

～9世紀初め以降の3-2群瓦（第19図3）、SD2405B溝跡からはSG1031下層スクモ層に対比される8世紀第4四半期の底部回転糸切り無調整で上げ底の須恵器坏（第19図4）が出土している。SD2406A溝跡からは9世紀第3四半期以降の糸切り無調整の椀形須恵器坏（第19図5）が出土している。SK2407土坑からは9世紀後半の赤褐色土器台付坏（第19図6）、SK2411土坑からは9世紀第3四半期の底径が6.0cmで縮小していない段階の赤褐色土器坏A（第19図7）が出土している。SK2413土坑からは、糸切り無調整の椀形の須恵器（第19図8・9）、底径が縮小していない9世紀第3四半期の赤褐色土器坏A（第19図10）、9世紀後半以降にみられる赤褐色土器鍋（第19図11）が出土している。以上のことから、第V層面検出遺構は、おおむね9世紀第3四半期の遺物であるが、SD2405A・SD2405B溝跡からは8世紀末～9世紀前半のやや古い段階の遺物が出土している。

第VI層面では、SB2417掘立柱建物跡P1掘り方埋土から、9世紀前半の赤褐色土器坏（第22図1）と8世紀末から9世紀初め以降の3-1群瓦（第22図2）が出土している。SD2420溝跡からは9世紀前半の須恵器蓋（第22図3）、底径が6.0cmで縮小していない段階の赤褐色土器坏A（第22図5）が出土している。SD2421溝跡からも9世紀第1四半期のヘラ切りでケズリ調整のある須恵器（第22図6）、体部下間にケズリ調整のある台付坏（第22図7）が出土している。SK2426土坑からは9世紀第1四半期に位置づけられる須恵器の台付坏が出土している。以上のことから、第VI層面検出遺構からは、9世紀前半、特に9世紀第1四半期の遺物が出土しているといえる。

第VII層面では、SD2430溝跡から8世紀第3四半期の須恵器台付坏が出土している（第23図1）。

以上まとめると、第III層面検出遺構からは10世紀前葉～中葉、第IV層面検出遺構からは9世紀第4四半期以降、第V層面検出遺構からは9世紀第3四半期、第VI層面検出遺構からは9世紀第1四半期、第VII層面検出遺構からは8世紀第3四半期の遺物が出土している。これは、上述の各整地層の年代とほぼ一致しており、矛盾する点はない。

先に述べた各遺物包含層出土の遺物の年代とあわせてみると、各層の検出遺構面は秋田城遺構変遷でみると政庁の6期の変遷と対応しているものと考えられる（表9）。すなわち、第VII層面検出遺構は秋田城創建期である8世紀中葉の政庁I期、第VII層面検出遺構は8世紀後半の政庁II期、第VI層面検出遺構は9世紀第1四半期の政庁III期、第V層面検出遺構は9世紀第2～3四半期の政庁IV期、第IV層面検出遺構は元慶の乱（878）後の9世紀第4四半期の政庁V期、第III層面検出遺構は10世紀前葉～中葉の政庁VI期と対応するものと考えられる。したがって、年代比定資料の出土がなかったためここで触れなかった遺構であっても、検出層により上記のような年代を与えることが可能である。

3 第107次調査地全体の利用状況の変遷について

以上の年代の検討を踏まえ、全体の利用状況と変遷についてまとめると表10のようになる。

（1）各道路遺構（城内東大路）の規模と構造の変遷について

第107次調査においては、各整地層面において政庁I～VI期の各期に対応する東西方向の道路遺構（城内東大路）が6面発見された。各道路遺構の側溝と考えられる区画溝および区画施設の組み合わせ、各道路遺構の道路幅を表11に示した。以下、各整地層面における道路遺構の規模と構造について年代の古い順に変遷を述べる。

表9 秋田城遺構変遷表

	733	750 760	800	830	850	878	900 915	950
政府	I期	II期	III期	IV A期	IV B期	V期	VII期	
政府区画施設	築地塀	築地塀 材木列塀	一本柱列塀	一本柱列塀	一本柱列塀	材木列塀	一本柱列塀	
外郭	I期	II期	III期 (小期あり) 柱列塀			IV期 (小期あり)	V期	
外郭区画施設	瓦葺き築地塀	非瓦葺き築地塀				材木列塀	大溝	
大畠地区	I期	II期 生産施設	III期 生産施設整備	IV期 生産施設充実 居住域住居数増加		V期 官衙建物		
焼山地区	I期 A類建物 A類建物倉庫	II期 B類建物 B類建物倉庫群か?	III期 (小期あり) C類建物 C類建物倉庫群			D類建物?		
鶴ノ木地区	I期	II期	III期	IV期		V期		
外郭西門	I期	II期	III期	IV期		V期	VII期	
時期	天平5年(733)～	8C後半前葉～	8C末・9C初～	9C第2四半期～	9C第3四半期～	元慶2年(878)～	10C第2四半期～10C中葉	
備考	秋田出羽柵創建期	天平宝字年間 「秋田城」改修期	第III期全体 大改修期	天長7年 (830) 大地震後 復興期	元慶の乱で 焼失	元慶の乱 (878)後 復興期	最終末期	

①第VIII層面：政庁I期（第33図）

原地形は北から南、西から東へ緩やかに傾斜する地形であり、その部分に第VIII-1・2層が第IX層地山飛砂層の上に整地される。この時、原地形が低い南側の部分にのみ第VIII-1層が堆積している。ここに政庁I期・秋田城創建期のSX2246道路遺構が構築される。SD2438溝跡とSD2439溝跡の素掘りの側溝が道路の区画と考えられ、道路幅は溝の芯々で12.2mである。なお、第VIII層の下層の第IX層地山飛砂層面から、南北方向の短いSD2447・SD2448溝跡が検出されている。これらについては、第VIII層面のSX2446道路遺構を造成する際の道路整地のための掘り込み溝の可能性がある。

②第VII層面：政庁II期（第34図）

政庁II期の第VII層面では、SX2437道路遺構が構築される。第VII層面は調査区南側で部分的に硬化面がみられる。SD2429溝跡とSD2430溝跡の素掘りの側溝が道路の区画と考えられ、道路幅は溝の芯々で12.1mである。また、SD2430溝跡のすぐ北側には直径約1m弱の柱掘り方1基(SKP2431)が発見されている。この柱掘り方は南北には展開しないことから、調査区外の東西に延びるものと考えられる。これは第84次調査の8世紀後半の政庁II期の道路面から同じような柱掘り方が1.5～2mの間隔で連続する一本柱列塀跡(SA1752)が発見されており（註7）、今回発見された柱掘り方はその延長であると考えられる。第84次調査ではこの一本柱列塀跡は道路南側側溝よりも新しいという所見がある。この時期にある段階で、立体的な構造物によって南側を遮蔽していた可能性が高い。

③第VI層面：政庁III期（第35図）

政庁III期の第VI層面では、SX2428A・B道路遺構が構築される。調査区全体を覆うVI-3層は非常に硬化している。SX2428BはSD2419A・B溝跡とSD2422溝跡の素掘りの側溝が道路の区画と考えられ、道路幅は溝の芯々で8.9mである。南側側溝であるSD2422溝跡よりも古いSA2418材木列塀跡が発見され

III 考察

表10 第107次調査遺構変遷表

層序 政庁 時期 区分	古代							近世 以降 II・I 層
	IX層 地山 飛砂	VII層	VII層	VI層	V層	IV層	III層	
政 府 I 期	政 府 II 期	政 府 III 期	政 府 IV 期	政 府 V 期	政 府 VI 期	政 府 VII 期		
道路 遺構 関係	SX2446 SD2438 SD2439 SKP2431	SX2437 SD2429 SD2430 SA2418	SX2428B SD2419A SD2419B SD2422 SD2421	SX2416 SD2405A SD2405B SD2406A SD2406B	SX2404 SD2397 SD2398	SX2396 SD2374 SD2375A～D		
その他	SD2447 SD2448 SD2441 SK2442 SK2443 SK2444 SK2445	SD2440 SD2441 SK2432 SK2433 SK2434 SK2435 SK2436	SB2417 SK2423 SK2424 SK2425 SK2426 SK2427	SD2420 SK2407 SK2408 SK2409 SK2410 SK2411 SK2412 SK2413 SK2414 SK2415	SK2400 SK2401 SK2402 SK2399 SX2403	SD2376 SA2373 SA2370 SA2371 SA2372 SI2378 SI2379B → SI2379A SK2380 SK2381 SK2382 SK2384 SK2386 SK2387 SK2388 SK2390 SK2391 SK2392 SK2393 SK2394 SK2395		

表11 第107次調査 城内東大路関連遺構一覧表

第107次道路遺構名	北側側溝(上段) 南側側溝(下段)	道路幅	検出層位	時期区分	備考
SX2396	SD2374 SD2375A～D	6.0～6.5m	III層	政 府 VI 期	
SX2404	SD2397 SD2398	8.5～9.0m	IV層	政 府 V 期	
SX2416	SD2405A・B SD2406A・B	8.5～8.8m	V層	政 府 IV 期	
SX2428A	SD2419A・B SD2421	7.5m	VI-1・3層	政 府 III 期(新)	
SX2428B	SD2419A・B SD2422/SK2418	8.9m	VI-2・3層	政 府 III 期(古)	古段階では南側区画が材木列壙(SA2418)か。
SX2437	SD2429 SD2430	12.1m	VII層	政 府 II 期	南側区画で柱掘り方1基(SKP2431)があり、一本柱列壙の可能性あり。
SX2446	SD2438 SD2439	12.2m	VIII層	政 府 I 期	

ており、一時的に南側を立体的に遮蔽するような材木列壙、もしくは土留めのようなものがあったと考えられる。柱痕跡は直径12cm程度である。このような材木列壙跡は第84次調査の政 府 III 基の道路遺構でもSD1767B溝跡として発見されている（註7）。第84次調査検出のSD1767B溝跡は底面に直径16～20cmの柱痕跡が密な間隔で検出されている。第84次調査における政 府 III 期道路遺構（SX1755C道路遺構）の南側区画は、SD1767B溝跡（材木壙跡）から素掘りのSD1727A溝跡という変遷が指摘されている。今回の第107次調査でも、政 府 III 期のSX2428B道路遺構の南側区画はSA2418材木列壙跡から素掘りのSA2422

溝跡と変遷しており、同様である。また、SD2422溝跡より上層で発見されたSD2421溝跡も一時的な道路南側側溝と考えられ、SD2419A・B溝跡とSD2421溝跡の素掘りの側溝を道路の区画とするSX2428A道路遺構が新段階に構築されたものと考えられる。SX2428A道路遺構の道路幅は溝の芯々で7.5mである。第84次調査でも、政府Ⅲ期のSX1755C道路遺構が一時的に道路幅7.5mとなったとする所見があり、これと一致している。なお、調査区の北東側では道路遺構とは無関係の配置でSD2420溝跡やSB2417掘立柱建物跡が発見されている。これらの遺構には、埋め土に特徴的に炭化物が混じり、切り合い関係は新しい。可能性としては、天長7年（830）の地震後の仮設の構造物であると考えられる。したがってこの政府Ⅲ期のSX2428A・B道路遺構から後述する政府Ⅳ期のSX2416道路遺構が造営される間に何らかの一時的構造物があったと考えておきたい。

④第V層面：政庁Ⅳ期（第36図）

政庁Ⅳ期の第V層面では、SX2416道路遺構が構築される。調査区全体に広がる第V-2層は硬化している。SD2405A・B溝跡とSD2406A・B溝跡の素掘りの側溝が道路の区画と考えられ、道路幅は溝の芯々で8.5～8.8mである。これらの遺構は政庁Ⅳ期に相当する9世紀第2四半期頃に造成されたもので、年代的に天長7年（830）の地震後に造営された道路遺構と考えられる。なお、SK2413土坑は道路遺構の中央に検出されているが、炭化物が多く検出されることから、元慶の乱（878）の直後に掘られた廃棄土坑と考えられる。

⑤第IV層面：政庁Ⅴ期（第37図）

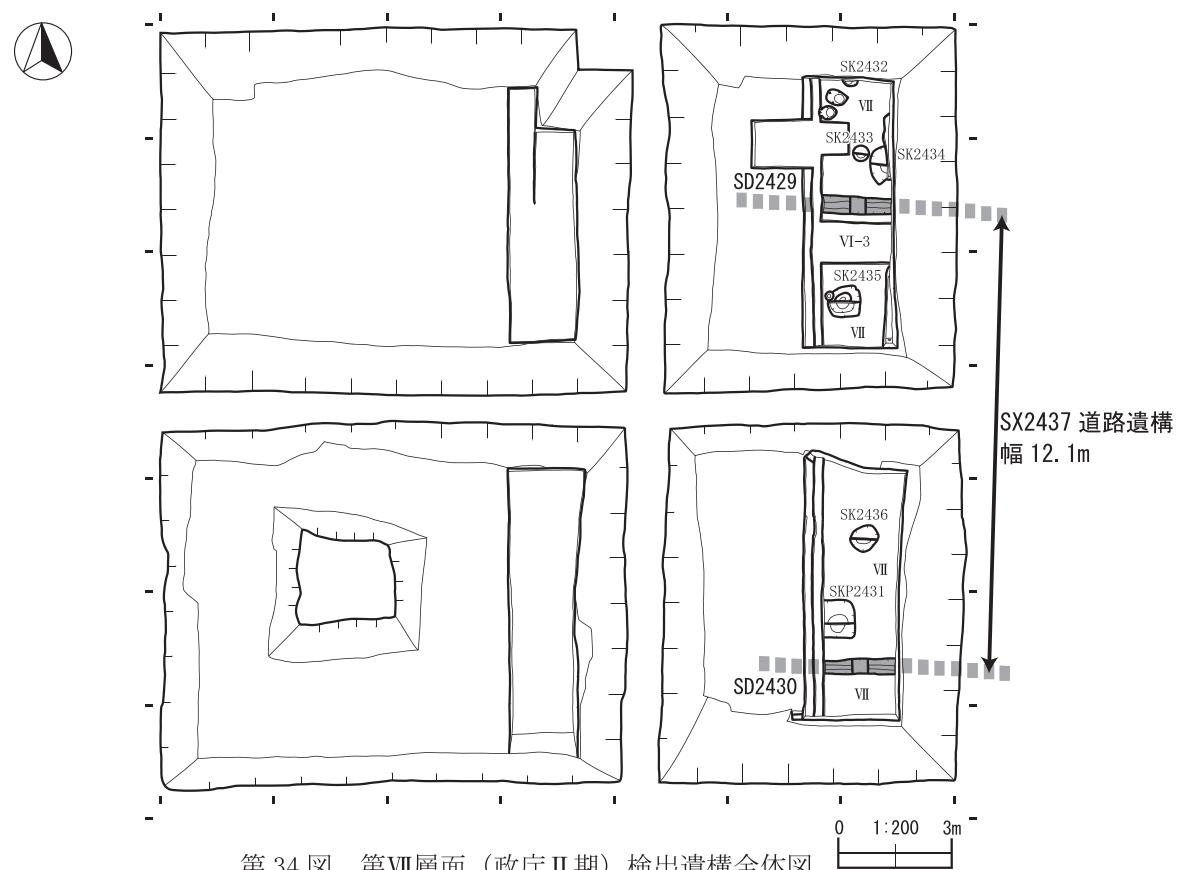
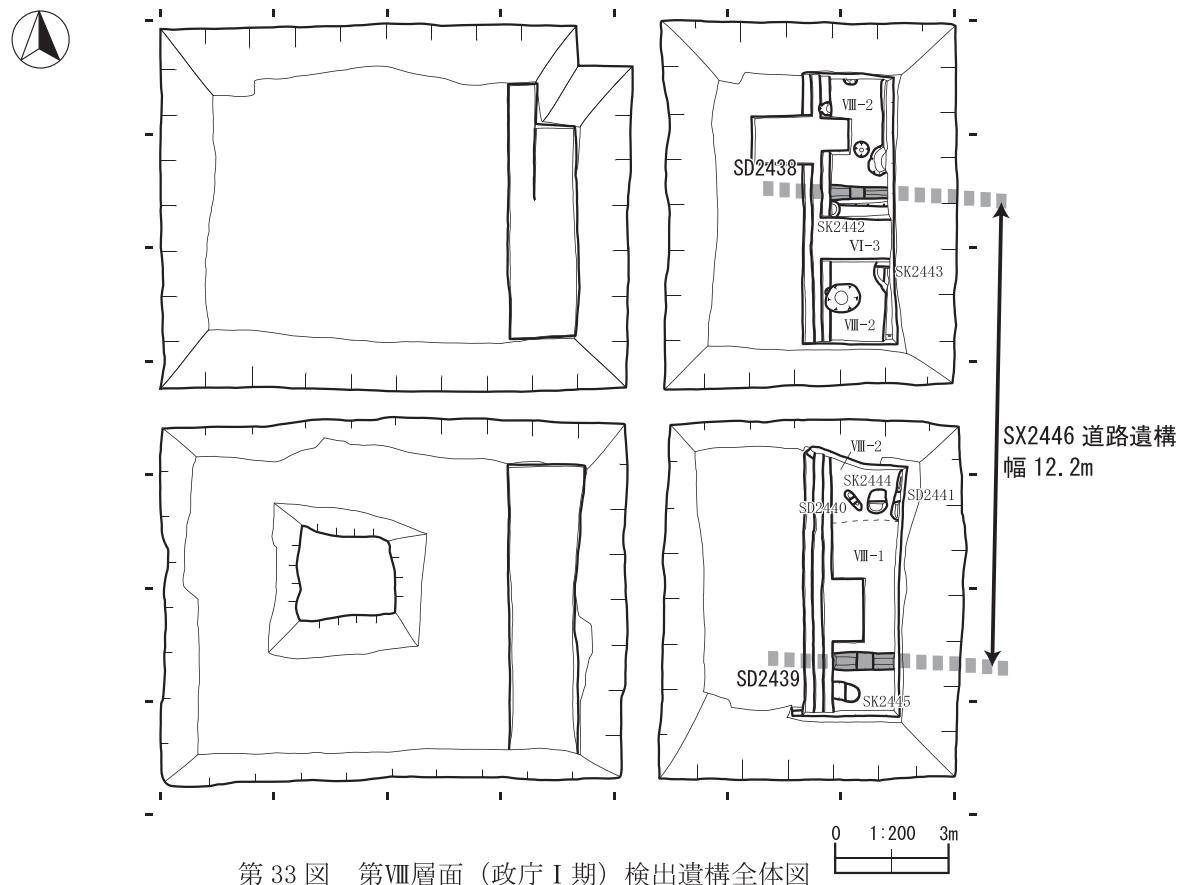
政庁Ⅴ期の第IV層面では、SX2404道路遺構が構築される。調査区全体に炭化物を多く含む硬化した第IV-1層が広がる。炭化物は元慶の乱（878）の戦禍に由来するものと推定され、調査地周辺における被害が甚大であったことがうかがわれる。SD2397溝跡とSD2398溝跡の素掘りの側溝が道路の区画と考えられ、道路幅は溝の芯々で8.5～9.0mである。SX2404道路遺構は元慶の乱後の復興道路であると考えられる。また、SX2402道路遺構の南側には土手状に盛り上がったSX2404土手状遺構が検出された。盛土の高さは40～50cmで、1.7～2.0mの幅で特に盛り上がりをみせる。このような土手状遺構は隣接地の第84次調査における政庁Ⅴ期の遺構面でも確認されており（SX1756土手状遺構）、その延長であると考えられる。

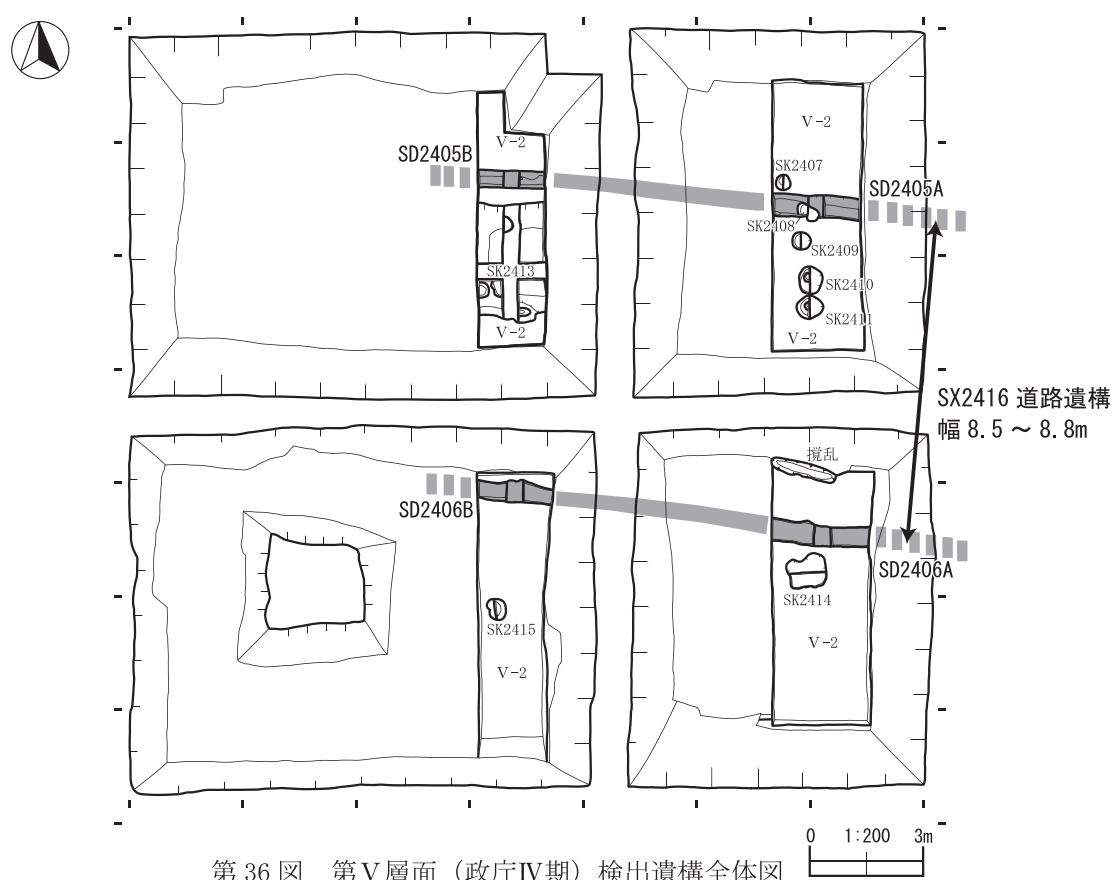
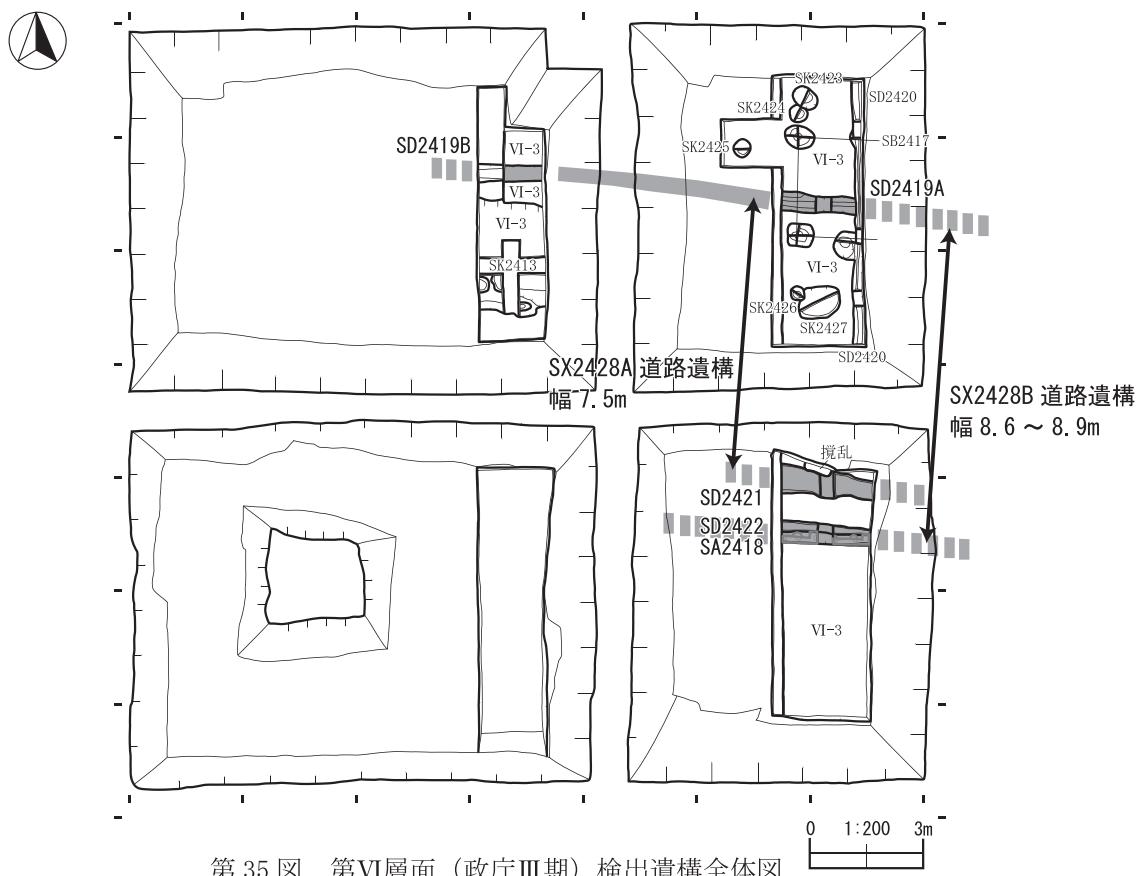
⑥第Ⅲ層面：政庁Ⅵ期（第38図）

政庁Ⅵ期の第Ⅲ層面では、SX2396道路遺構が構築される。調査区北西部と南東部に硬化した第Ⅲ-1層面が部分的に検出されている。SD2374溝跡とSD2375A～D溝跡の素掘りの側溝が道路の区画と考えられ、道路幅は溝の芯々で6.0～6.5mである。道路の北側と南側に竪穴建物跡が1棟ずつ検出されている（SI2378・SI2379A・B竪穴建物跡）。城内東大路のすぐそばに居住域が配置されていることは、当該期の道路利用規制を知る上で重要な点である。

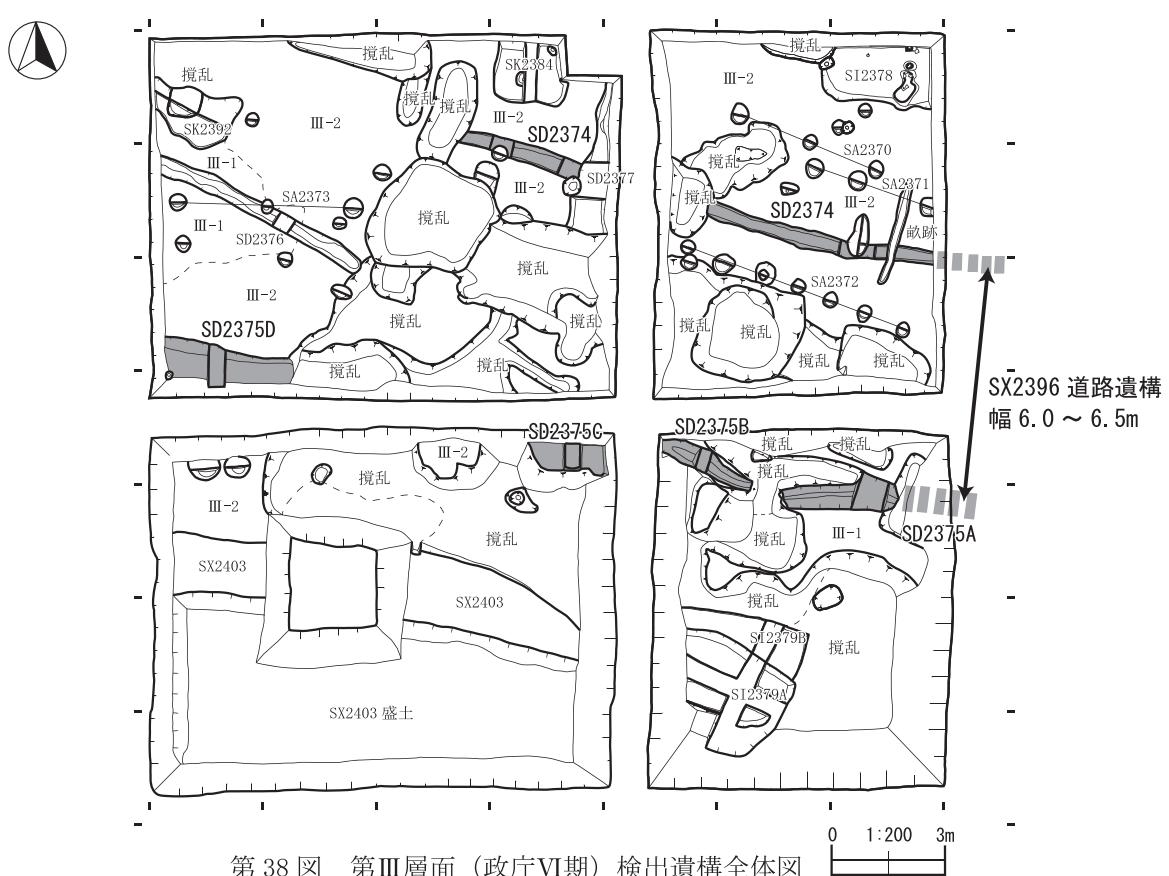
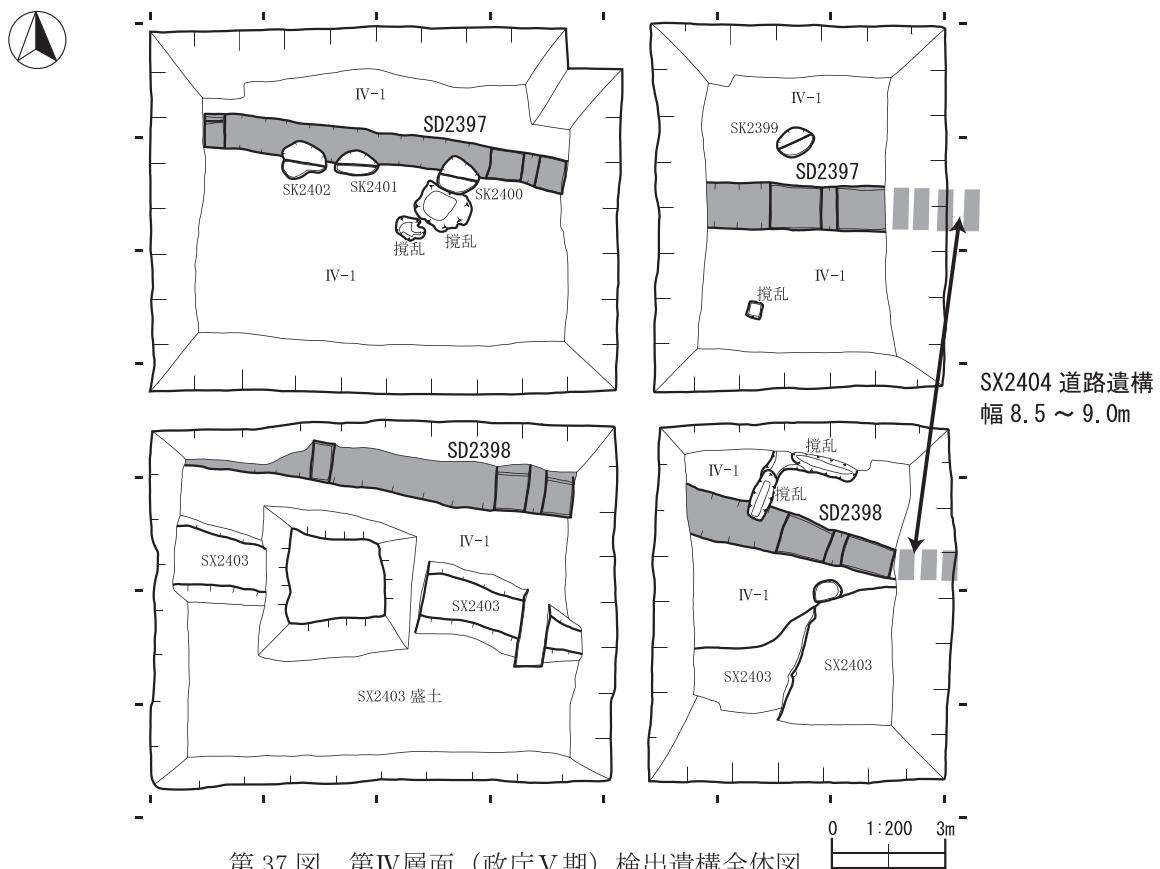
その後、第Ⅱ層の耕作土が堆積しており、畝状遺構も発見されていることから、近世以降は畠地となっていたと考えられる。その後、調査地周辺は高清水小学校敷地となり、昭和39年にはその学校敷地の一角に秋田城跡出土品収蔵庫が建設されることとなる。

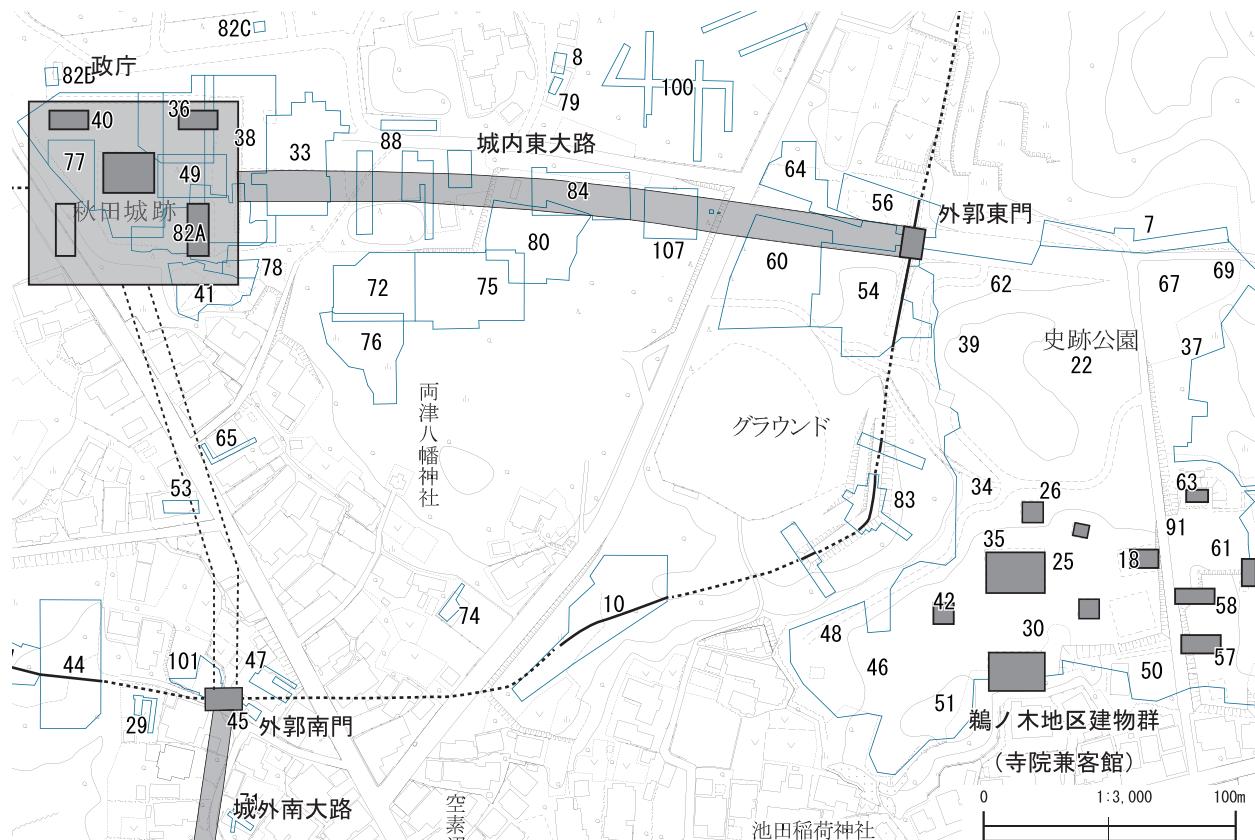
以上、第107次調査地における道路遺構の規模の変遷をおおまかにみれば、奈良時代（政庁Ⅰ・Ⅱ期）は幅12m道路、平安時代（政庁Ⅲ～Ⅴ期）は幅9m道路であると言える。これは、周辺の第84次調査などで判明しているこれまでの城内東大路の所見と同様である。いずれの時期においても、北側を区画する溝跡は同位置にあり、道路幅12mから9mになると、南側側溝がより北側に配置されている。ただし、





III 考察





第39図 秋田城基本構造図（政庁・城内東大路・鶴ノ木地区部分）

政庁Ⅲ期の9世紀第1四半期では、道路幅が7.5mとなる時期や、政庁Ⅵ期では道路幅が6m台であるなど、平安時代は道路幅9mであるという規格に当てはまらない場合も一部ある。また、道路の区画は基本的には素掘りの側溝であるが、政庁Ⅱ期の南側区画が一本柱列塀、政庁Ⅲ期の南側区画が材木列塀の時期があるなど、一時的に立体的な構造物で遮蔽する場合がある。

また、周辺の第33次・60次・84次・88次調査と、今回の第107次調査の結果を踏まえると、政庁から外郭東門までの城内東大路は、ほぼ一直線の規格性の高い道路であることが判明した(第39図)。これは、外郭西門周辺の城外西大路が地形に合わせて造営されていた点とは対照的であり(註8)、秋田城の基本構造を理解する上で重要な点である。すなわち、外郭東門を出た城外の南東には大陸との交流を示す古代水洗廁舎跡や客館と考えられる建物群が発見されており、外交・交流機能を有する特殊なエリアが広がる。こうした特殊なエリアと政庁をつなぐ城内東大路は、規格性や視覚的効果を重視し、直線的に計画配置されたものと考えられ、多賀城とは異なる秋田城の特性を反映していると考えられる(註9)。

(2) 第107次調査地周辺の生産施設の展開について

第107次調査地からは鉄滓が出土しており、第Ⅱ章3の基本層序の部分で述べた(表8)。当該調査地では明確に生産施設であると言える工房跡は発見されなかったが、鉄滓のような遺物の出土は調査地周辺に鍛冶工房などの生産施設があったことを示唆するものである。鉄滓の種別は鍛冶滓・椀形鍛冶滓で鍛冶が主な活動であったと考えられる。出土層位別にみると、政庁Ⅳ期の第V層から徐々に出土量が増え、政庁Ⅴ期の第IV層でピークとなり、政庁Ⅵ期の第III層まで比較的出土量が多い。したがって第107次調査の鉄滓の出土量からみると、調査地周辺において、9世紀第2四半期前後から鍛冶工房から廃棄

III 考察

された鉄滓量が増え、9世紀第4四半期前後で廃棄される鉄滓量がピークとなり、10世紀前葉まで出土量が多い、といえる。このような結果は、これまでの城内東大路周辺の調査の結果と一致している。周辺の調査によれば、政庁Ⅲ期の8世紀末・9世紀初め頃から鍛冶工房が展開し始め、第87次調査の所見では最盛期は9世紀第2四半期から第3四半期であることが指摘されている。また9世紀代の鍛冶工房と考えられる竪穴建物跡が多数発見されており、さらに、第100次調査地では10世紀代の鍛冶関連の竪穴建物跡も発見されている。第107次調査地における層位別鉄滓出土量は、周辺の鍛冶関連活動の盛衰を如実に反映しているといえよう。

一方で、10世紀前葉の整地層であると考えられる第Ⅲ-2層からは漆が付着した赤褐色土器坏が2点出土しており（第30図6、11）、周辺に漆工房があった可能性も示唆される。実際に、第72次および第75次調査地では多数の漆紙文書が発見され、また、第72次調査地では非鉄製小札甲も出土しており、漆工房の存在が指摘されている。本調査地で発見された漆付着土器もこうした周辺の漆工房からもたらされた可能性が高い。

4 第107次調査の成果と課題

- 以上第107次調査の結果により、以下の4点について成果があった。
- ①各遺構面の形成時期は出土遺物などから判断して、第Ⅲ層面は政庁Ⅵ期（10世紀前葉～中葉）、第Ⅳ層面は政庁Ⅴ期（9世紀第4四半期）、第Ⅴ層面は政庁Ⅳ期（9世紀第2四半期～9世紀第3四半期）、第Ⅵ層面は政庁Ⅲ期（9世紀第1四半期）、第Ⅶ層面は政庁Ⅱ期（8世紀後半）、第Ⅷ層面は政庁Ⅰ期（8世紀第2四半期）と政庁の変遷と対応するものと考えられる。
 - ②第Ⅲ～Ⅷ層の各遺構面で東西方向の道路遺構が発見された。これらは周辺の調査地で確認されている城内東大路の一部であると考えられた。各遺構面で発見された道路遺構の道路幅と構造は次のとおりである。第Ⅲ層面で約6.0～6.5m（SX2396道路遺構）、第Ⅳ層面で8.5～9.0m（SX2404道路遺構）、第Ⅴ層面で8.5～8.8m（SX2416道路遺構）、第Ⅵ層面で7.5m（SX2428A道路遺構）と8.6～8.9m（SX2428B道路遺構）、第Ⅶ層面で12.1m（SX2437）、第Ⅷ層面で12.2m（SX2446道路遺構）である。なお、第Ⅵ層面の道路遺構は、8.6～8.9m（SX2428B道路遺構）から7.5m（SX2428A道路遺構）という変遷が層位的にみられた。各期の道路区画は基本的に素掘りの側溝であるが、一部異なる場合もある。すなわち、Ⅵ層面のSX2428B道路遺構の南側は材木列壙跡、第Ⅶ層面のSX2437道路遺構の南側は一本柱列壙である可能性があり、一時的に南側の区画は立体的な構造物であった可能性がある。
 - ③以上の所見から、大きく見れば、平安時代は幅9m道路、奈良時代は幅12m道路であるといえる。これは、周辺の第84次調査などで得られているこれまでの城内東大路の所見と同様である。また、政庁Ⅲ期に相当する第Ⅵ層面検出遺構では、一時的に道路幅が7.5mと狭くなること、第Ⅲ層面の10世紀前葉は道路幅が6m台となることなど、より詳細な変遷について所見を得ることができた。今後は、今回得られたデータをもとに城内東大路の環境整備を行っていく予定である。
 - ④周辺の調査結果も含めて検討すると、城内東大路は政庁から外郭東門へほぼ一直線の規格性の高い道路であることが確定した。外郭東門を出た城外の南東には、古代水洗廁舍跡に代表されるような外交・交流機能を持つ特殊なエリアが広がっており、こうしたエリアと政庁をつなぐ城内東大路には、規格性や視覚的効果が求められ、直線的に配置されたものと考えられる。これは、秋田城の特性を考える上で重要な基本構造の一つである。

- 註1 これ以降の考察における肥前系陶磁器の年代比定は下記に基づき記述する。
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』
- 註2 赤褐色土器の呼称と坏A・Bの分類については、酸化炎焼成、非内黒、ロクロからの切り離しが回転、静止糸切りのものを赤褐色土器とし、坏類の底部から体部下端および下半にかけてケズリ調整を施すものを坏B、無調整のものを坏Aとしている。
- 註3 これ以降の考察における古代出土土器の年代比定は、以下一連の秋田城跡出土土器編年成果に基づき記述する。
小松正夫 1992「秋田城とその周辺地域の土器様相（試案）－第54次調査の木簡・漆紙文書伴出土器を中心にして－」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料』pp.139-144
伊藤武士 1997「出羽における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』7 pp.32-44
小松正夫・日野久・西谷隆・伊藤武士 1997「秋田城跡出土土器と周辺窯の須恵器編年（試案）」『日本考古学協会 1997年度秋田大会蝦夷・律令国家・日本海－シンポジウムII・資料集－』pp.18-30
秋田市 2001「第7章 秋田城跡の発掘調査 九 秋田城跡出土の土器編年」『秋田市史 第7巻 古代 史料編』pp.383-390
秋田市教育委員会 2007「秋田城跡の土器編年」『秋田城跡II－鶴ノ木地区－』pp.340-345
神田和彦 2010「ケズリのある赤い坏－古代秋田郡域の赤褐色土器坏B－」『北方世界の考古学』すいれん舎 pp.187-210
- 註4 愛知県市史編さん委員会 2015『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』
- 註5 太宰府市教育委員会 2000『太宰府上房跡X V－陶磁器分類編－』
- 註6 秋田城出土瓦については表12に基づき分類した。
秋田市教育委員会 2009『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2008』

表12 秋田城出土瓦の分類

分類	細分	色調	焼成	質	備考	時期区分	年代
1群	1-1群	灰白色	良好・やや不良	軟質	・丸瓦は無段タイプのみ	政序I期 (外郭I期)	8世紀 第2四半期
	1-2群	灰色					
	1-3群	黒色(いぶし焼成)					
2群		青灰・灰・暗灰色	良好・堅緻	硬質	・砂粒が多い ・平瓦では特に凸面に砂粒が目立つ ・補修瓦か	政序II期 (外郭II期)	8世紀後半
3群	3-1群	暗灰～灰色	良好・堅緻	硬質	・丸瓦は有段タイプ ・平瓦は板状工具で撫で調整 ・成形時に粘土板を重ねた痕跡 ・古城廻窯跡産か	政序III期以降 (外郭III期以降)	8世紀末・ 9世紀初以降
	3-2群	灰・灰黄・黄灰色					
4群	4-1群	橙色系を主体	やや不良	軟質	・丸瓦は有段タイプ	政序III期以降 (外郭III期以降)	8世紀末・ 9世紀初以降
	4-2群	黄灰・ にぶい黄灰～褐灰色					

※秋田市教育委員会 2009「IV 考察 ⑤外郭西門跡および周辺出土の瓦について」をもとに作成

- 註7 秋田市教育委員会 2005『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2004』
- 註8 秋田市教育委員会 2016『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2015』
- 註9 伊藤武士 2011「秋田城跡の調査成果について」『条里制・古代都市研究 第26号』pp.44-57

IV 秋田城跡環境整備事業

平成28年度の整備

今年度は、政庁南東部の平面表示および遺構説明板の設置を行った。政庁南東部を表示するため、盛り土造成を行い、政庁区画施設である築地塀の南東コーナー部については、犬走り部分を樹皮系舗装で、築地塀位置についてはユキヤナギ植栽にて表示した。

工事の概要は次のとおりである。

実施地区 大畠地区

整備面積 382m²

工種	細目	数量	金額(千円)	備考
敷地造成工	土工	1式	970	切・盛土
擁壁工	L型擁壁工	1式	1,154	
園路広場工	排水工	1式	297	
	法覆工	1式	706	人力盛土法面整形、野芝張芝
遺跡表示工	表示工	1式	929	ユキヤナギ生垣植栽、樹皮系舗装
サイン工	遺構説明板	1基	627	遺構説明板1基
直接工事費計			4,683	



政庁南東部(北から)



政庁南辺部擁壁施工状況
築地塀生け垣・犬走り表示(西から)

V 秋田城跡保存活用整備事業

史跡秋田城跡を、市民の郷土学習の場として有効活用を図るために、平成28年度は下記の事業を実施し、全体で6,916名の参加者があった。

1 学習講座（6月9日～11日）

秋田城跡全般について発掘調査成果、文献史料、環境整備事業等を学んでもらう市民講座を開催した。郷土学習の機会として秋田城跡の周知を図るとともに、ボランティアガイド養成講座も兼ねる。参加者29名。

2 史跡探訪会（6月25日）

市街地内にありながら、良好に保存された自然環境の観察を通じ、史跡指定による環境保全の側面も理解してもらうことを目的とし、史跡内を散策、動植物観察を行った。参加者13名。

3 発掘体験教室（7月23日）

小中学校を対象に発掘調査を実際に体験することを通じ、地域の歴史や秋田城跡への理解と関心を深めてもらうことを目的として体験教室を開催した。参加者14名。

4 史跡秋田城跡パネル展（秋田市ポートタワーセリオン8月2日～8月31日、秋田市民俗芸能伝承館 旧金子家住宅9月17日～10月16日、北部市民サービスセンター11月26日～12月25日）

市内の観光施設3箇所で、一般市民、近隣の小中学生を対象に、秋田城跡についてわかりやすく解説したパネル展を開催した。また、パネル展のテーマに合わせた「秋麻呂くん通信」を発行し、会場で配布した。平成28年度のテーマは「秋田城跡－資料館の宝もの特集－」で行った。見学者は、ポートタワーセリオン543名、民俗芸能伝承館1,179名、北部市民サービスセンター732名。

5 史跡散策会（9月17日）

ボランティアガイドの説明により史跡内の散策会を開催した。参加者27名。

6 東門ふれあいデー（10月2日）

秋田城跡外郭東門周辺を会場として、史跡の保護と活用を推進するために、地域住民と共同で各種イベントを開催した。ボランティアガイドの会等関係団体、地域住民による支援団体、地元町内会からなる実行委員会の主催、運営で行われ、歴史資料館としては情報発信のためのパネル展示、のぼりの製作・活用、リーフレットの配布等を行った。参加者2,250名。

7 史跡めぐり（10月29日）

史跡公園以外の史跡指定地域の魅力を伝えることを目的とし、秋田城周辺の文化財を講師の解説を聞きながら歩き、史跡めぐりを行った。今年度初めて開催した。参加者14名。

8 第107次発掘調査現地説明会（8月27日）

寺内大畠地区の発掘調査成果を公開した。参加者140名。

9 出前講座（御所野学院中学校1年生6月9日、高清水小学校6年生7月15日）

秋田城跡について出土遺物や遺構の画像等を用い解説する講座を実施した。生徒に秋田城跡への関心や理解を深めてもらう機会とするため、郷土学習の授業の一環として歴史資料館職員が講師となり授業を担当した。参加生徒数123名。

10 歴史資料館企画展（前期7月23日～8月23日、後期12月23日～1月29日）

秋田城跡や周辺遺跡から出土した資料から、古代の秋田について興味や関心を深めてもらうことを目的とし開催した。夏と冬の2回行った。見学者は前期1,323名、後期529名。

V 秋田城跡保存活用整備事業



1 学習講座



2 史跡探訪会



3 発掘体験教室



4 パネル展(ポートタワーセリオン)



5 史跡散策会



6 東門ふれあいデー



7 史跡めぐり



8 第107次調査現地説明会

VI 秋田城跡現状変更

秋田城跡歴史資料館では、秋田城跡の発掘調査や環境整備事業、史跡の管理・活用の他に、現状変更に伴う調査を実施して、史跡内の遺構や歴史的景観の保護に努めている。しかし、史跡内は歴史的・自然的環境を活かすと同時に、居住地であることから住民のより良い住環境の整備も必要であり、現状変更の必要性も生じてくる。そこで、やむなく史跡内の現状を変更する場合は、秋田城跡歴史資料館が窓口となって申請者および関係機関と史跡保護のための協議を慎重に行い、史跡への影響がない範囲で最小限の対応を行っている。

平成28年の現状変更申請は20件であったが、掘削が最小限で、現状変更が軽微なものについては工事の際に立会調査を、その他については発掘調査を行って対応した。その内容は下記のとおりである。

- ①民間工事16件…住宅新築・解体工事（4・5・7・8・13～15・17・19・20）、電柱等工事（6・9）、樹木伐採・表土整地・工作物撤去（1）、樹木補植（12）、樹木伐採（16）、給水管引込工事（18）
- ②公共工事2件…融雪施設等改修（10）、上下水道の取替（11）
- ③史跡の保護や保存に係わるもの2件…発掘調査（2）、環境整備（3）

表13 現状変更一覧

番号	申請者	申請地	変更事項	申請年月日	許可年月日・番号	対応
1	個人	秋田市寺内大畑1番7	樹木伐採・表土整地・工作物撤去	平成28年1月18日	平成28年1月19日 秋市教指令第2号	立会調査
2	秋田市教育委員会教育長	秋田市寺内大畑156番	発掘調査	平成28年2月3日	平成28年3月11日 27受庁財第4号の1954	発掘調査
3	秋田市教育委員会教育長	秋田市寺内大畑333番地内・334番地内・335番1、335番2、336番・337番地内	史跡公園整備	平成28年2月12日	平成28年3月11日 27受庁財第4号の2055	立会調査
4	個人	秋田市寺内高野131番・137番1	住宅新築	平成28年3月1日	平成28年3月2日 秋市教指令第125号	立会調査
5	個人	秋田市寺内鶴ノ木76番3	住宅解体・樹木伐採	平成28年3月8日	平成28年3月10日 秋市教指令第146号	立会調査
6	東北電力株式会社	秋田市寺内焼山90番2	電柱撤去	平成28年4月12日	平成28年4月13日 秋市教指令第366号	立会調査
7	個人	秋田市将軍野南一丁目212番85	住宅新築	平成28年4月15日	平成28年4月20日 秋市教指令第369号	立会調査
8	個人	秋田市将軍野南一丁目212番84	住宅新築	平成28年4月18日	平成28年4月20日 秋市教指令第370号	立会調査
9	東日本電信電話株式会社	秋田市寺内焼山56番地	電柱設置	平成28年4月22日	平成28年4月26日 秋市教指令第372号	立会調査
10	秋田市長	秋田市道高清水公園線(將軍野南一丁目、寺内高野地内)	融雪施設等改修	平成28年5月18日	平成28年5月20日 秋市教指令第379号	立会調査
11	秋田市上下水道事業管理者	秋田市道高清水公園線(將軍野南一丁目、寺内高野地内)	上下水道の取替	平成28年5月19日	平成28年5月24日 秋市教指令第380号	立会調査
12	高清水町内会	秋田市寺内大畑86番地・209-1番地	樹木補植	平成28年7月5日	平成28年9月16日 28受庁財第4号の690	立会調査
13	個人	秋田市寺内字大畑347番地1・347番地2	建物解体	平成28年9月13日	平成28年9月14日 秋市教指令第392号	立会調査
14	個人	秋田市寺内鶴ノ木103番、102番の一部	建物解体	平成28年9月23日	平成28年9月26日 秋市教指令第393号	立会調査
15	個人	秋田市寺内児桜二丁目198番4、208番2	住宅新築・既存物置解体	平成28年9月27日	平成28年9月29日 秋市教指令第394号	立会調査
16	個人	秋田市寺内児桜二丁目209番6	樹木伐採	平成28年9月27日	平成28年10月3日 秋市教指令第395号	立会調査
17	個人	秋田市寺内大畑353番	住宅新築	平成28年10月17日	平成28年10月18日 秋市教指令第396号	立会調査
18	個人	秋田市寺内大小路2番50	給水管引込工事	平成28年12月2日	平成28年12月6日 秋市教指令第400号	立会調査
19	合同会社 ステータ	秋田市寺内字神屋敷135番地	建物解体	平成28年12月5日	平成28年12月16日 秋市教指令第401号	立会調査
20	個人	秋田市寺内鶴ノ木103番、102番の一部	住宅新築	平成28年12月15日	平成28年12月22日 秋市教指令第402号	立会調査



①第III層面全景
(SX2396道路遺構検出状況) (東から)



②第IV層面全景
(SX2404道路遺構検出状況) (東から)



③第V層面全景
(SX2416道路遺構検出状況) (東から)



①第VI層面全景
(SX2428A・B道路遺構検出状況)
(東から)



②第VII層面全景
(SX2437道路遺構検出状況)(東から)



③第VIII層面全景
(SX2446道路遺構検出状況)(東から)



①調査前状況（東から）



②第Ⅱ層面全景（東から）



③SA2372柱列跡半裁状況（東から）



④SA2373柱列跡半裁状況（西から）



⑤SA2370・SA2371柱列跡半裁状況（東から）



⑥SD2374溝跡半裁状況（東から）



⑦SD2374溝跡土層断面（東から）



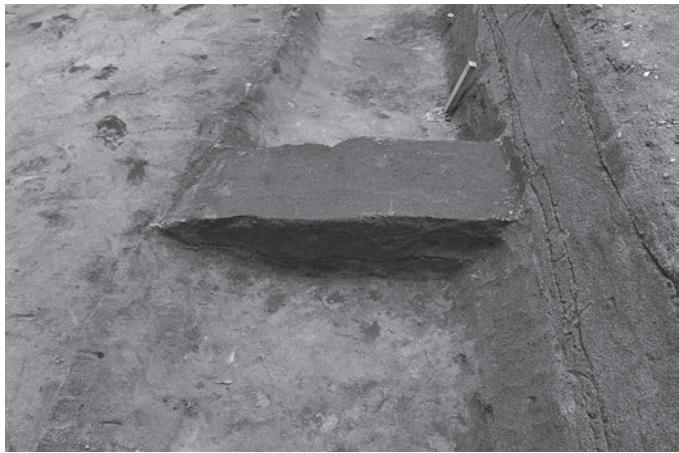
①SD2375A溝跡半裁状況（東から）



②SD2375B溝跡半裁状況（西から）



③SD2375C溝跡半裁状況（西から）



④SD2375D溝跡半裁状況（西から）



⑤SD2376溝跡土層断面（東から）



⑥SD2377溝跡半裁状況（南から）



⑦SI2378堅穴建物跡半裁状況（南西から）



⑧SI2378堅穴建物跡カマド残存部分（東から）



①SI2378堅穴建物跡土器出土状況（南から）



②SI2378堅穴建物跡紡錘車出土状況（南から）



③SI2379A・B堅穴建物跡半裁状況（西から）



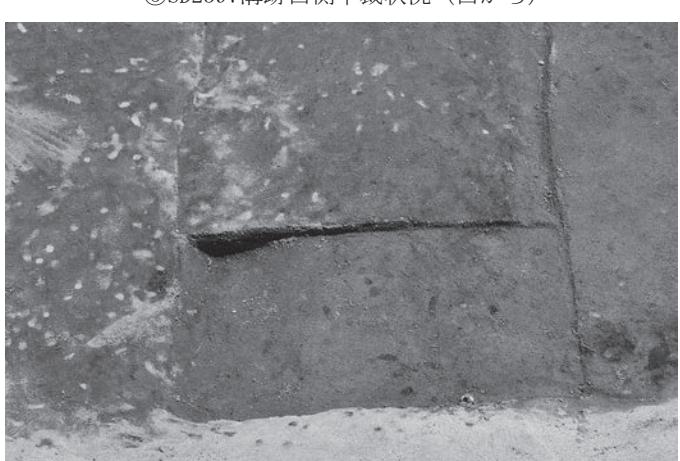
④SK2384半裁状況（西から）



⑤IV層面全景（西から）



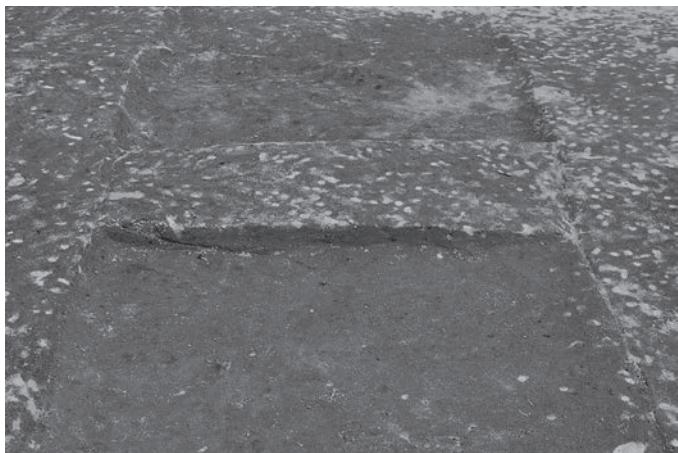
⑥SD2397溝跡西側半裁状況（西から）



⑦SD2397溝跡西端土層断面（西から）



①SD2397溝跡東側半裁状況（西から）



②SD2397溝跡東側土層断面（西から）



③SD2398溝跡西侧半裁状況（西から）



④SD2398溝跡西侧土層断面（西から）



⑤SD2398溝跡東側半裁状況（西から）



⑥SD2398溝跡東側土層断面（西から）



⑦SX2403土手状遺構（東から）



⑧SX2403土手状遺構土層断面（北東→南西）



①第V層面全景（西から）



②SD2405A溝跡半裁状況（西から）



③SD2405A溝跡土層断面（西から）



④SD2405B溝跡半裁状況（西から）



⑤SD2405B溝跡土層断面（西から）



⑥SD2406A溝跡半裁状況（西から）



⑦SD2406A溝跡土層断面（西から）



①SD2406B溝跡半裁状況（西から）



②SD2406B溝跡土層断面（西から）



③SK2413土坑検出状況（西から）



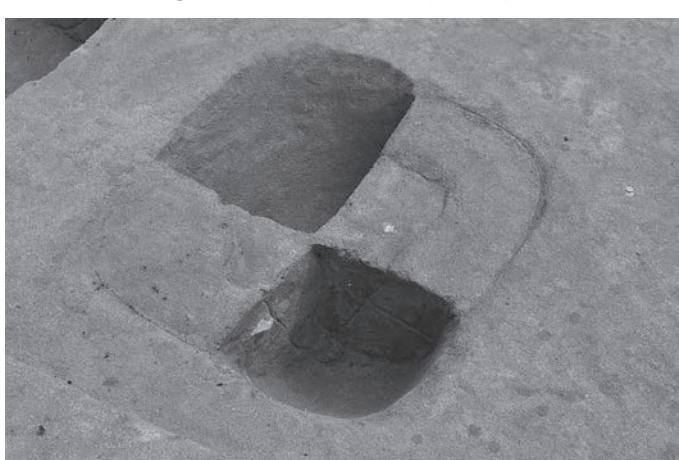
④SK2413土坑半裁状況（北西から）



⑤第VI層面全景（西から）



⑥SB2417掘立柱建物跡（西から）



⑦SB2417掘立柱建物跡 P 2（南西から）



①SD2419A溝跡半裁状況（西から）



②SD2419A溝跡土層断面（西から）



③SD2420溝跡半裁状況（南から）



④SD2420溝跡土層断面（南から）



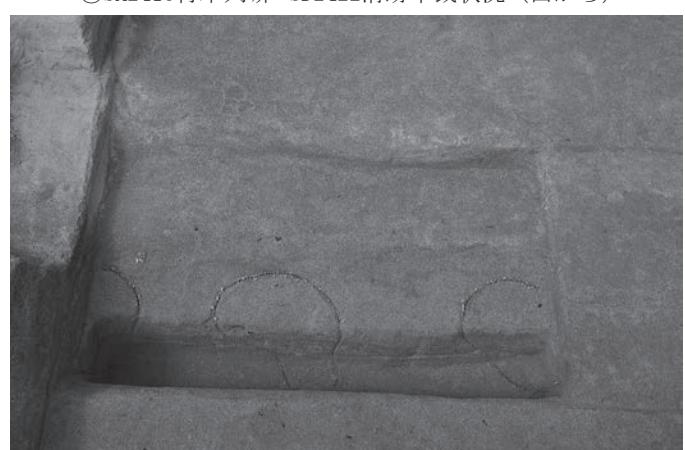
⑤SD2421溝跡半裁状況（西から）



⑥SA2418材木列壙・SD2422溝跡半裁状況（西から）



⑦SA2418材木列壙・SD2422溝跡半裁状況（西から）



⑧SA2418材木壙跡土層断面（南から）



①第VII層面全景（西から）



②SD2429溝跡半裁状況（西から）



③SD2430溝跡半裁状況（西から）



④SD2430溝跡土層断面（西から）



⑤SKP2431柱掘り方検出状況（西から）



⑥SKP2431柱掘り方土層断面（南から）



⑦SK2436土坑半裁状況（南から）



①第VIII層面全景（西から）



②SD2438溝跡半裁状況（西から）



③SD2438溝跡土層断面（西から）



④SD2439溝跡半裁状況（西から）



⑤SD2439溝跡土層断面（西から）



⑥SD2240溝跡半裁状況（南から）



⑦SD2441溝跡半裁状況（南から）



①調査地北東部IX層面検出状況（北から）



②調査地南東部IX層面検出状況（南から）



③SD2447溝跡半裁状況（南から）



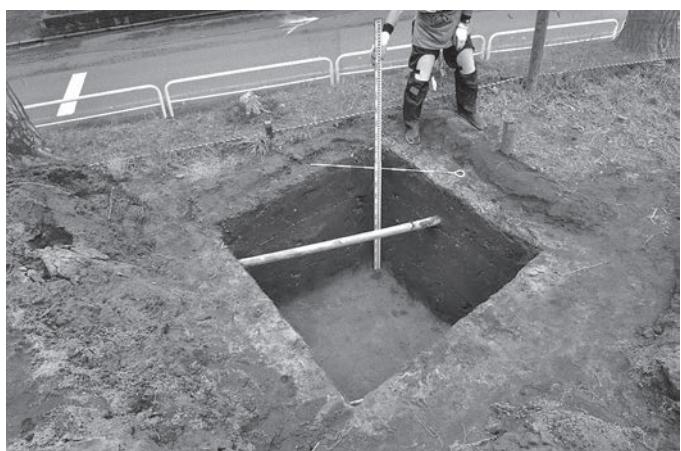
④SD2448溝跡半裁状況（南から）



⑤調査地北東部土層断面（南から）



⑥調査地南東部土層断面（南から）



⑦拡張トレンチ1第III層検出状況（北西から）



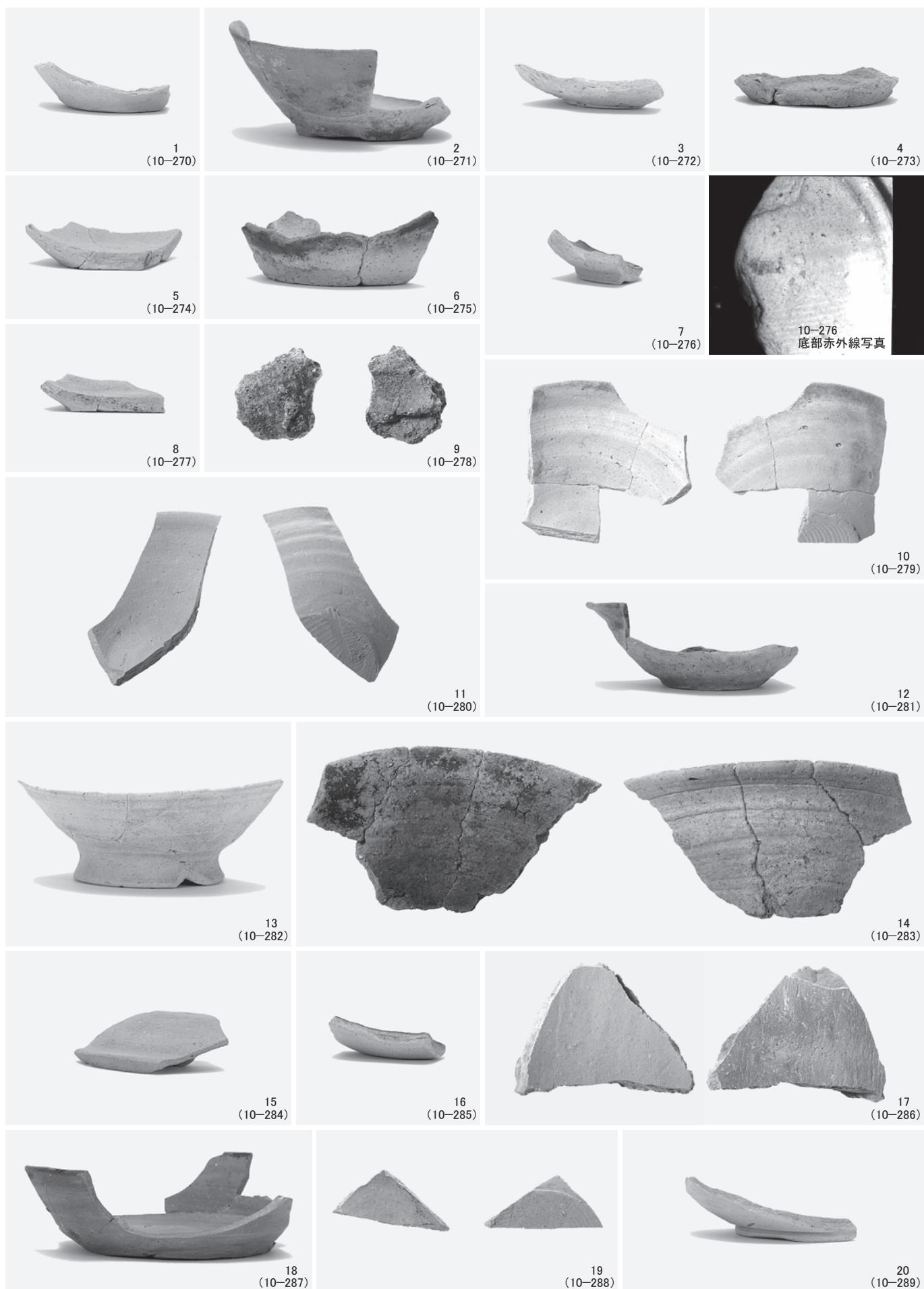
⑧拡張トレンチ2第III層検出状況（北から）



1 SD2375A、2・3 SD2375B、4 SD2375D、5～7 SD2376、8～10 SD2377、11～13 SI2378、
 14～21 SI2379A、22 SI2379B、23 SK2384、24 SK2386、25 SK2389 (13はS=1/2、それ以外はS=2/5)

第107次調査地出土遺物（第III層面検出遺構）

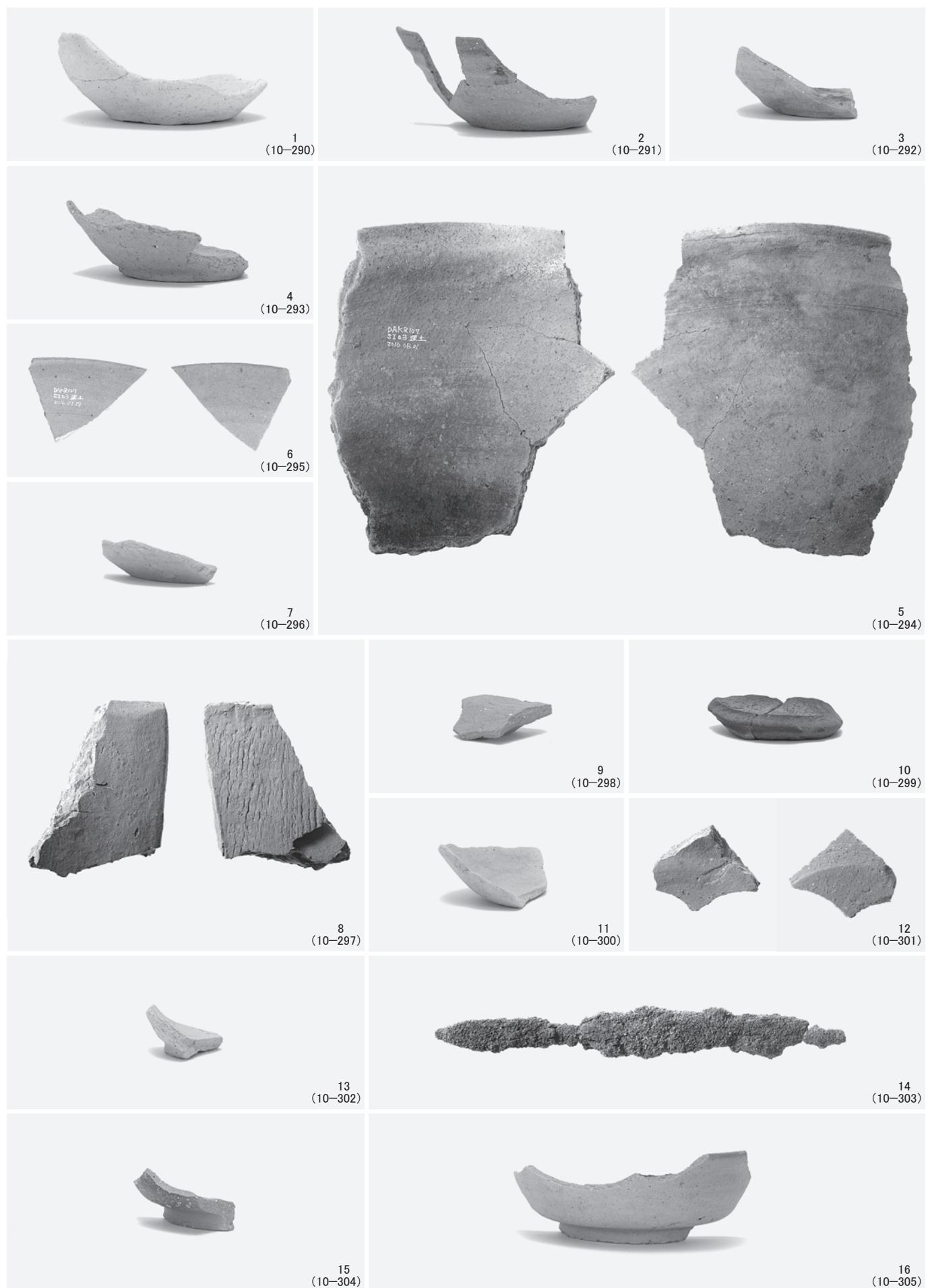
図版13



1 SK2391、2 SK2392、3～6 SD2397、7・8 SD2398、9 SK2399、10 SK2400、
11～14 SX2403、15～17 SD2405A、18 SD2405B、19 SD2406A、20 SK2407 (すべてS=2/5)

図版14

第107次調査地出土遺物（第III～V層面検出遺構）



1 SK2411、2～6 SK2413、7・8 SB2417、9～11 SD2420、12～14 SD2421、
15 SK2426、16 SD2430 (8はS=1/4、14はS=1/2、それ以外はS=2/5)

第107次調査地出土遺物（第V～VII層面検出遺構）

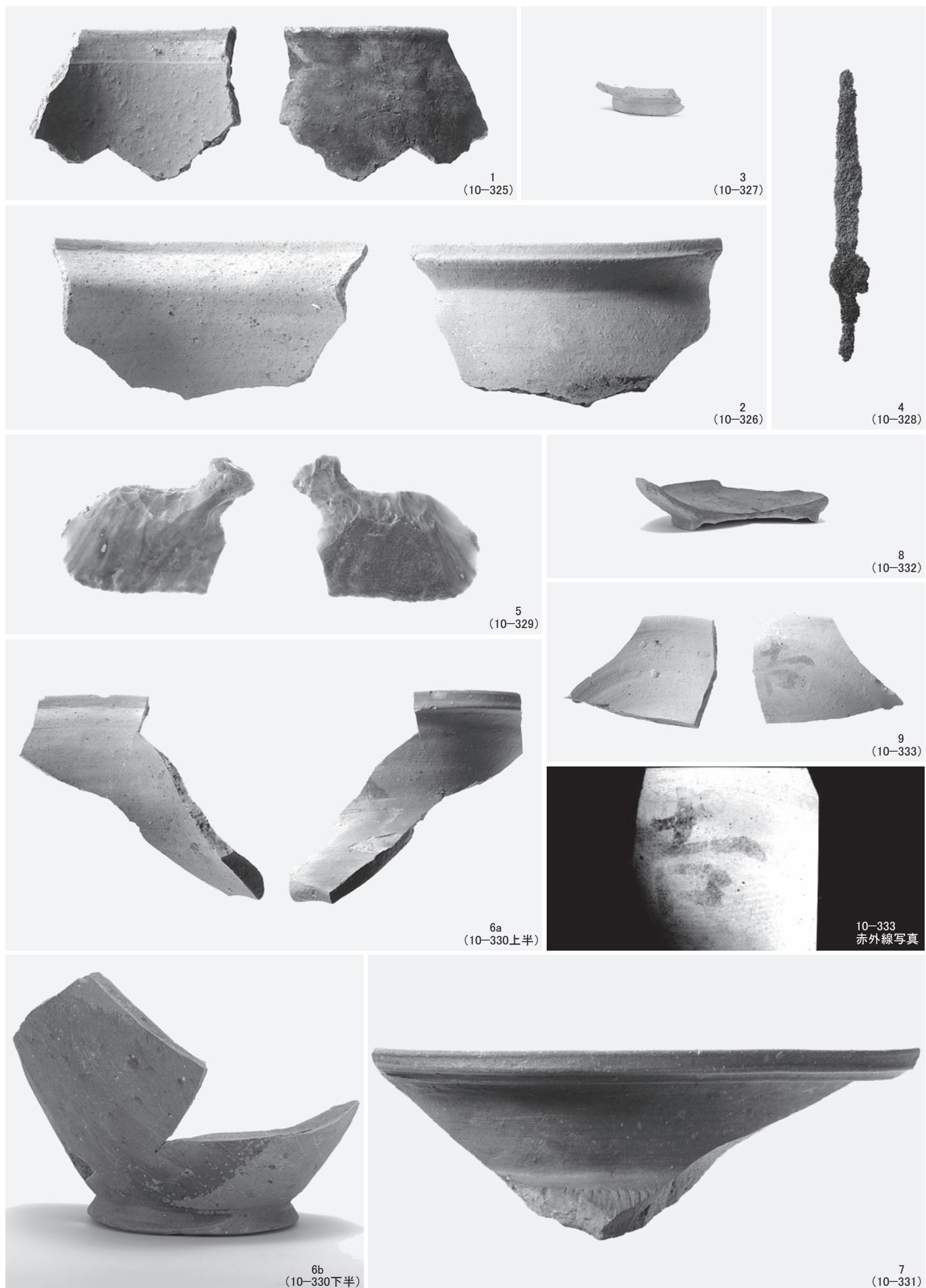
図版15



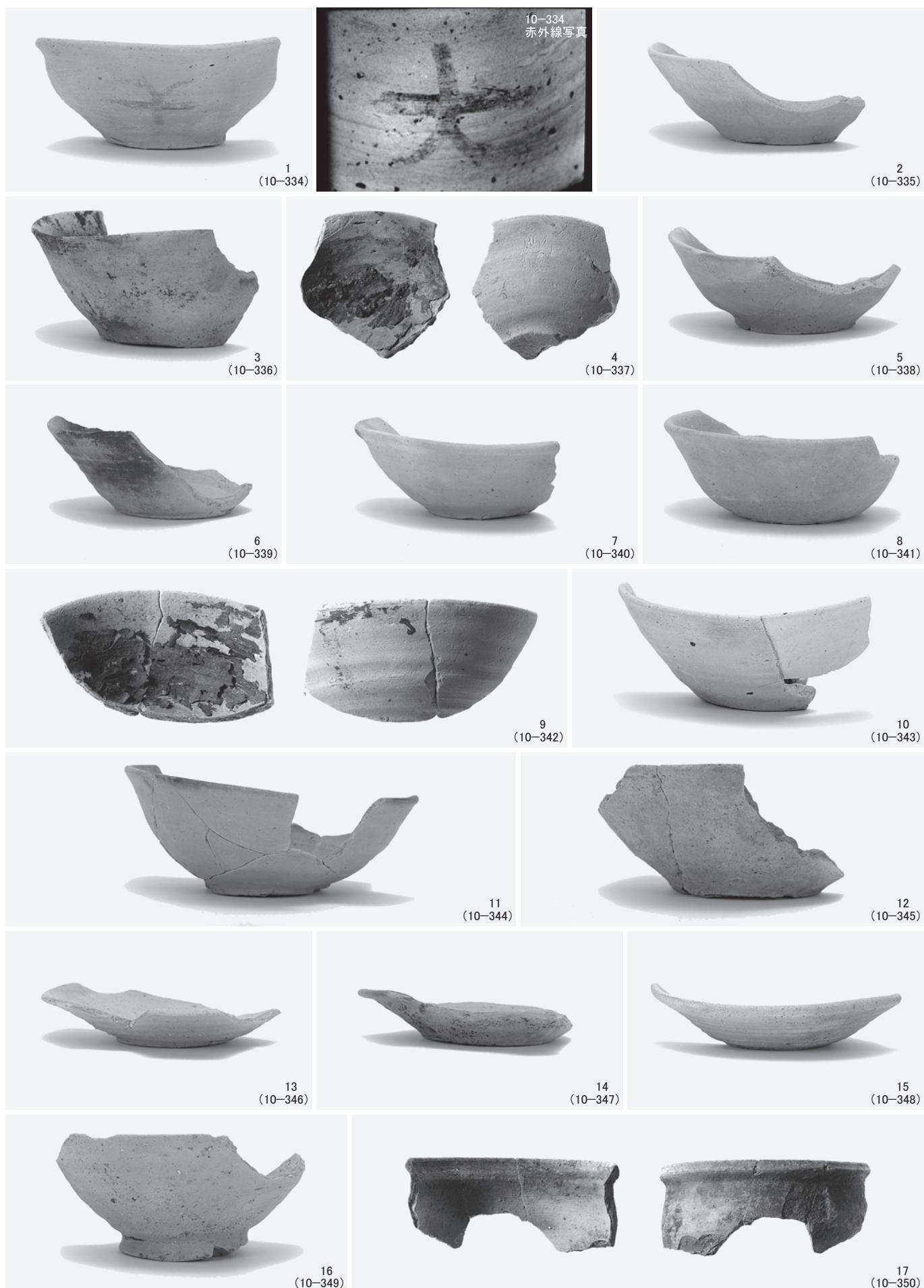
1 第I層、2~5 搅乱、6~13 第II層、14~19 第III-2層 (5はS=1/2、それ以外はS=2/5)

図版16

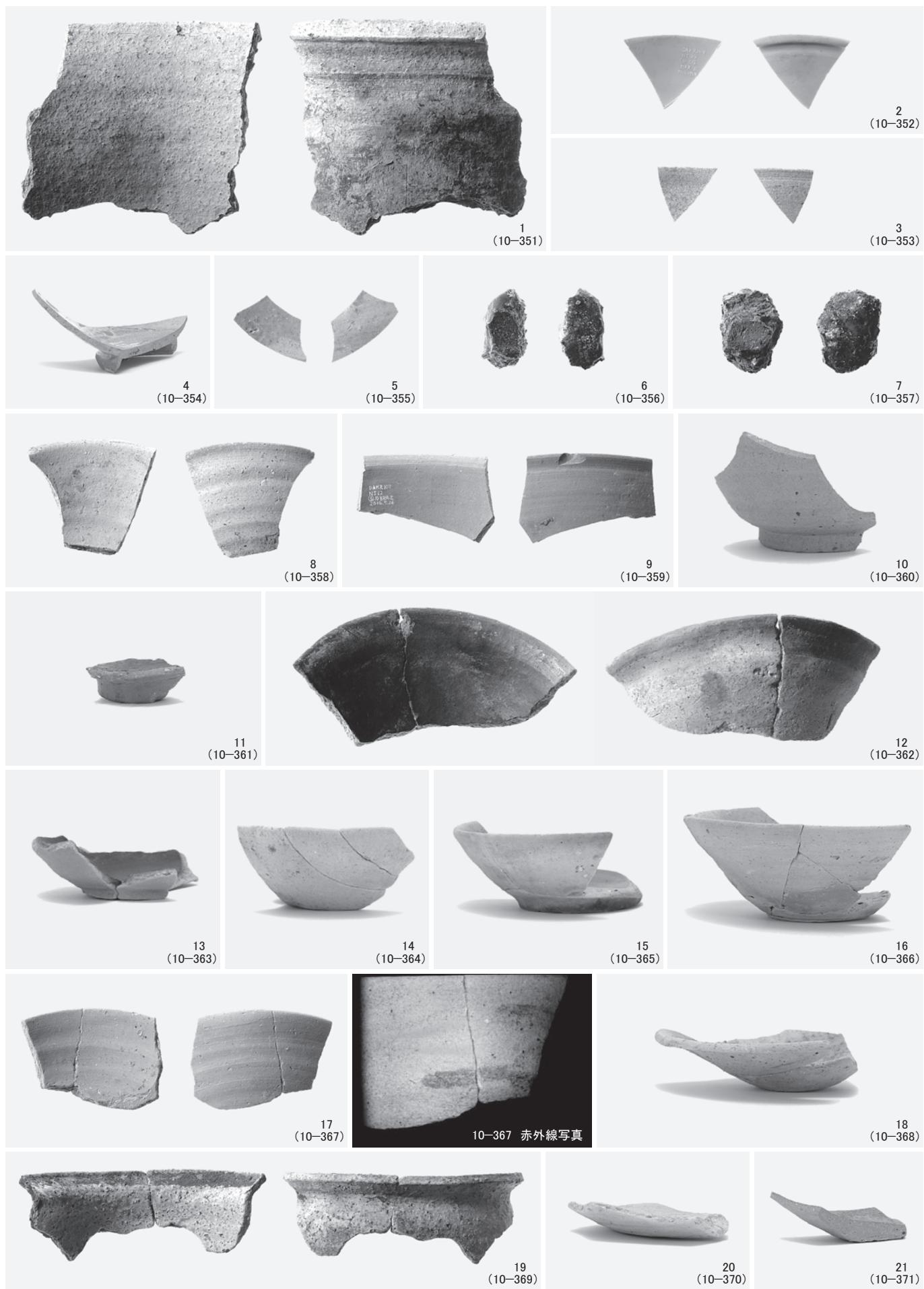
第107次調査地出土遺物 (第I・II・III-2層)



1～5 第III-2層、6～9 第III-3層 (4・5はS=1/2、それ以外はS=2/5)



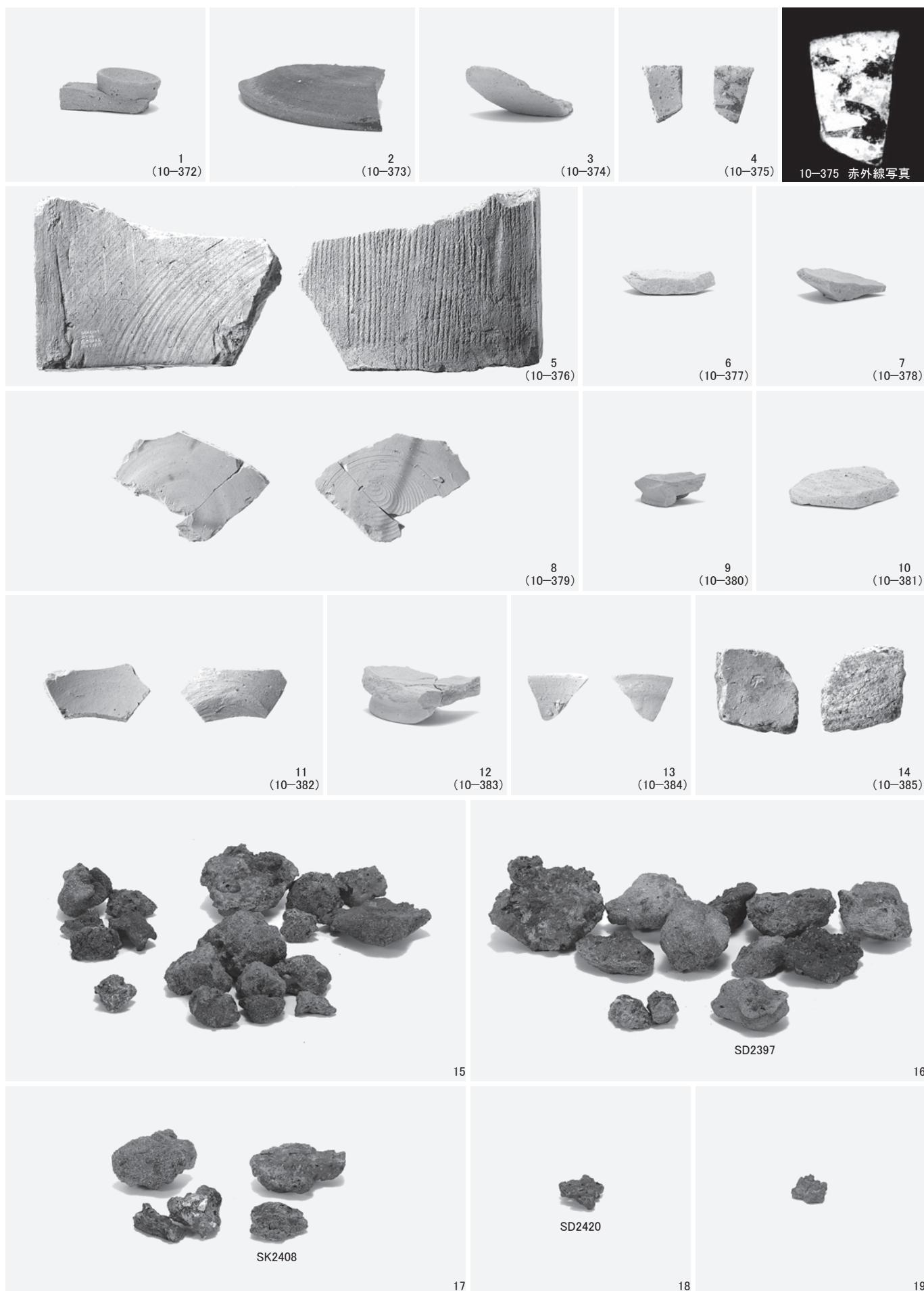
1~17 第III-3層 (すべてS=2/5)



1～7 第III-3層、8～19 第IV層、20・21 第V層 (すべてS=2/5)

第107次調査地出土遺物 (第III-3・IV・V層)

図版19



1～5 第V層、6～12 第VI層、13 第VII層、14 第VIII層、15 第III層出土鉄滓、16 第IV層・IV層面遺構内出土鉄滓、
17 第V層・V層面遺構内出土鉄滓、18 第VI層面遺構内出土鉄滓、19 第VII層出土鉄滓(5はS=1/4、それ以外はS=2/5)
図版20 第107次調査地出土遺物(第V～VIII層、鉄滓)

報告書抄録

ふりがな	あきたじょうあと							
書名	秋田城跡							
副書名	秋田城跡歴史資料館年報 2016							
卷次	2016							
シリーズ名	秋田城跡歴史資料館年報							
シリーズ番号								
編著者名	伊藤武士、神田和彦、阿部美穂							
編集機関	秋田市教育委員会（秋田市立秋田城跡歴史資料館）							
所在地	〒011-0907 秋田県秋田市寺内焼山9番6号 TEL:018-845-1837 FAX:018-845-1318							
発行年月日	2017年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m ²	調査 原 因	
あき た じょうあと 秋田城跡	あきた し てらうち 秋田市寺内	05201 186	39 度 44 分 20 秒	140 度 05 分 00 秒	第107次 20160516 ～ 20160921	423	保護管理	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な 遺構	主な 遺構	特記事項			
秋田城跡 第107次調査	城柵官衙 遺跡	奈良 ～平安	柱列跡4条、材木塀跡1条、掘立柱建物跡1棟、溝跡20条、竪穴建物跡2軒、柱掘り方1基、土坑43基、土手状遺構1基、道路遺構6面	須恵器、土師器、赤褐色土器、灰釉陶器、綠釉陶器、瓦、鉄製品、陶磁器、石器、錢貨	城内東大路の調査			
要約	<p>第Ⅲ～Ⅷ層の各遺構面で東西方向の6面の道路遺構（城内東大路）が発見された。これらの6面の道路遺構は、秋田城遺構変遷における政序I～VI期と対応すると考えられた。道路遺構の道路幅は、第Ⅲ層面（政序VI期・10世紀前葉～中葉）では6m台、第IV～VI層面（政序V～Ⅲ期・9世紀代）では約9m、第VII～Ⅷ層面（政序Ⅱ～I期・8世紀代）では約12mの道路幅である。なお、第VI層面（政序Ⅲ期・8世紀末～9世紀初め）では一時的に7.5m幅の道路（SX2428A）になる可能性がある。また、第VI層面（政序Ⅲ期・8世紀末～9世紀初め）の道路遺構（SX2428B）の南側区画が材木列塀、第VII層面（政序Ⅱ期・8世紀後半）の道路遺構（SX2437）の南側区画が一本柱列塀であり、一時的に立体的な構造物であった可能性がある。</p> <p>周辺の調査も含めて考えると、城内東大路は政序から外郭東門まではほぼ一直線の道路であり、規格性が高く秋田城の基本構造を把握する上で、重要な知見を得ることができた。</p>							

秋田城跡歴史資料館要項

I 組織規定

秋田市立秋田城跡歴史資料館条例 拠点（平成27年12月21日 条例第62号）

第1条

史跡秋田城の保護および管理、調査研究、整備、公開ならびに活用を通じ、市民の教育と文化の向上に資するため、秋田市立秋田城跡歴史資料館（以下「歴史資料館」という。）を秋田市寺内焼山9番6号に設置する。

第2条

歴史資料館において行う事業は、次に掲げるものとする。

- (1) 史跡秋田城跡の保護および管理に関すること。
- (2) 史跡秋田城および関連遺跡の調査研究に関すること。
- (3) 史跡秋田城の整備および公開に関すること。
- (4) 史跡秋田城跡および関連遺跡の出土品および調査成果の展示および普及に関すること。
- (5) 史跡秋田城跡についての学習活動の支援等に関すること。
- (6) 関係機関および関係団体等との連携に関すること。
- (7) 前各号に掲げるもののほか、歴史資料館の設置の目的を達成するために必要と認める事業。

II 発掘調査体制

1 調査体制

秋田市

秋田市長 穂 積 志

観光文化スポーツ部長 高 橋 善 健

調査機関

秋田市立秋田城跡歴史資料館

館長 松 木 仁

事務長 斎 藤 和 敏

調査・普及担当

副参事 伊 藤 武 士

主査 神 田 和 彦

嘱託 阿 部 美 穂

管理運営担当

三 浦 龍

高 山 信 義

遠 藤 栄 子

佐々木 アツ子

2 調査指導機関

宮城県多賀城跡調査研究所

秋田城跡（秋田城跡歴史資料館年報2016）

印刷・発行 平成29年3月

発 行 秋田市教育委員会

編 集 秋田市立秋田城跡歴史資料館

〒011-0907 秋田市寺内焼山9番6号

TEL 018-845-1837 FAX 018-845-1318

印 刷 株式会社フロム・エー
